葭の影

GK142
E39
93W61758

贈呈

中條

中條蔵如遺稿

蔵の影

中條岐如遺稿

岐の影

GK142
E39

國會圖書館
5.11.12

93W61758

GK142.
E39

國會圖書館
5.11.12

93W61758

牡丹條屏江遺作

故中條葭江遺作

葭の影

目次

築地向島時代の思ひ出……一
初霜……五七
明治三十年日記
歐洲旅日記……一二五
日記抄……二六七
おもかげ……五一一
葭の影にそへて……五三三

表紙裝釘　石井柏亭畫伯

中條葭江略傳

昭和九年六月十三日五十九歳ヲ一期トシテ此世ヲ去リシ妻ハ西村家ノ次女、茂樹ヲ父トシ千賀子ヲ母トシテ、明治九年十月七日ヲ以テ東京築地堀田藩邸ノ下屋敷ニ生ル。幼ニシテ築地小學校ニ學ビ、後華族女學校ニ入リ、明治二十七年第六回生トシテ同校ヲ卒業ス。小學校ニ於テハ常ニ首席ヲ占メ、女學校ニ於テモ亦毎年一二席ヲ競ヒシ事彼女ノ手記ノ中ニモ見ユ。

明治三十一年四月二十日貧シキ中條家ニ嫁シ、善ク舅姑ニ親シミ、備ニ困苦ヲ余ト俱ニセル狀ハ、結婚後ノ日記ニテモ知ラル。斯ル貧困ノ中ニ四男五女ヲ擧ゲシモ、不幸ニシテ夭折者多ク、現ニ一男二女ヲ遺スノミナリ。極端ニ子煩惱ナリシ彼女ハ、其子女ヲ失フ毎ニ何時モ悲嘆ニ暮レ、終ニ健康ヲ害シテ糖尿病ヲ病ムニ至レリ。思フニ彼女ノ體質ハ强健ナル半面ト虛弱ナル他ノ半面トヲ併セ有セルモノヽ如シ。長女百合子ノ生ルヽ時ニ於ケル大難產ヲ初トシ、糖尿病中ニ起レル癰、胃潰瘍、若クハ白內障等、幾多ノ大患ヲ經過シ、晩年巴里ヨリ歸朝後、脖臟膿腫ニ罹リ開腹施術ヲ行ヒ、奇蹟的ニ恢復シ、生來嘗テ覺ヘザリシ程ノ健康ヲ樂シミシ甲斐モ無ク、昭和九年六月肺壞疽ノ爲ニ命ヲ奪ハルヽニ至ル迄、五十九歳ノ齡ヲ重ネシハ蓋シ其强健ナリシ半面ヲ有セシ爲ナリシト思フ。

明治三十二年六月、余ガ文部技師トシテ任地札幌ニ赴クヤ、約二ヶ年半ノ間余ニ伴フテ寒地ニ於テ克ク窮乏ノ生活ニ堪ヘタリ。當年ノ試練ハ後年獲ル所蓋シ尠ナカラザリシヲ思フ。

明治三十六年十二月ヨリ同四十年七月ニ至ル數年間、余ガ英國留學中留守ヲ守リテ貧シキ家事ノ切廻ハシニ、又子女ノ教育ニ隙ナキ中ニ、不幸祖母及弟ノ喪ニ遇ヒタルモ、滯歐中ノ余ヲシテ後顧ノ患無カラシメシハ、余深ク彼女ニ對シテ德トスル處ナリ。

明治三十八年六月以降、父西村茂樹ノ創立ニ係ル日本弘道會女子部幹事ノ委囑ヲ受ケ、爾後死ニ至ル迄會務ニ携ハルハ、彼女ノ常ニ樂ミトスル處ナリキ。昭和七年擧ゲラレテ同會ノ特別會員トナル。

余ハ明治四十年七月歸朝後再ビ職ヲ文部省ニ奉ゼシモ、居ル事數月、翌年一月官ヲ辭シテ、會禰工學博士ト與ニ事務所ヲ丸ノ内ニ設クルヤ、彼女ガ余ノ渡歐不在中受ケシ生活上ノ苦痛未ダ酬ヒラレザリシ中ニ、生活樣式ノ急變ヨリ彼女ヲシテ再ビ數年間經濟的不安ニ遭遇セシメタル事ヲ思フテ氣ノ毒ノ感ナキ能ハザリシモ、爾來家族一同不安ナク今日ニ到レル彼女ノ苦心ニ對シ、今ハ亡キ彼女ニ謹シミテ殘レル子女ト共ニ一片ノ感謝ヲ捧グ。

昭和五年春、露都ニ病メル長女ガ僅ニ死ヨリ免レテ南歐ニ遊バントスル機ニ於テ、彼女ハ愛兒英男ヲ喪ヘル悲哀ヲ忘レント欲シテ、同年五月家ヲ擧ゲテ渡歐ノ途ニ上リ、滯歐數月ニシテ同年十一月シベリヤ路ヲ經テ歸朝セルハ病弱ナリシ彼女ニ取ツテハ、精神生活上ニ劃期的ノ旅行ニシテ、一日トシテ船車中ニモ其筆ヲ捨テザリシ努力ハ誠ニ異數ニ屬ス。然レドモ、愛兒英男ノ死ニ對スル敬虔ノ念ハ、彼女ニ取ツテハ一種ノ宗教的ナルモノトナリ。忘レント欲シテ忘ルヽ能ハズ、時ニ臨ミ折ニ觸レテ涙ト共ニコレヲ偲ビシ此大旅行ハ、尼僧的行脚ニ外ナラザリシヲ思フ。彼女ノ死後病院ニ於テ看護婦ガ『奥樣ノ御守ガ有リマシタ』ト余ニ出セシヲ見ルニ、英男ノ遺骨ノ一部ヲ藏メタリ。平常肌身ヲ離サヾリシ事ヲ、家人一同初テ知レリ。宜ナリ彼女ガ日常口ニセシ『清淨無垢ノ精神生活ヲ以テ此世ヲ去リシ英男ニ、他日地下ニ相會フ時、彼ニ對シテ恥カシカラヌ現世ノ生活ヲ送リタシ』トノ信念ヲ以テ、彼

女ガ理想ノ生活ヲ完フシテ其身ヲ終リシ事ヤ。コハ彼女ノ自ラ滿足セシ處ナルベシ。

彼女ハ正シキニ即セザレバ安ンゼザリシ風ト、事物ニ徹底セザレバ止マザリシ概アリキ。人ヲ視ルノ明ト、理性トニ富ミタル彼女ガ果斷事ニ處シテ誤タザリシニハ、常ニ内助ノ功ニ於テ尠ナカラザリシヲ追憶スルト同時ニ、纖細ナル婦人ノ特性ヨリハ寧ロ男性的荒削リノ特色ヲ多分ニ有セシ事ヲ見ル。彼女日常ノ趣味ハ讀書ト文筆トニアリシモ、晩年白内障ノ爲ニ視力減退シ、人ヲシテ讀マシムルノ不便ヲ嘆ズル事屢ナリキ。餘技トシテ興來レバ畫筆ヲ弄ヘル事アリシモ、是モ病ノ爲醫師ヨリ禁ゼラレ、僅ニ謠曲ト和歌トニ依リテ鬱ヲ散ゼシモ、時ニ或ハ友ト好ンデ歌舞伎談ニ耽リシナド、隱レタル樂シミヲ持チシ彼女ヲ、將ニ全ク失明スルニ到ラントスル前ニ心ヲ安ンジテ瞑目セシメシ余ハ不幸中ノ幸ト覺悟セザルヲ得ズ。彼女ノ死後、其遺稿ノ一部ヲ娘ガ印行シテ故人辱知ノ人々ニ頒タント欲スルニ臨ミ、求ニ應ジテ此一篇ヲ記ス。故人ノ遺稿ニ於ケル忌憚ナキ筆ハ寧ロ彼女ノ特色ノ一部ヲ反映スト雖ドモ、或ハ禮ヲ失スル處無キヲ保セズ。冀クバ恕セヨ。

故人ト親交アリシ石井柏亭君ガ此書ノ裝釘圖案ニ盡サレタル勞ニ對シ深ク玆ニ謝意ヲ表ス。

昭和十年六月

精一郎識

築地向島時代の思出

私の生れたのは、京橋築地一丁目一番地の角で、川向ふは其の時分の三座の一つ新富座をめぐつて俳優や藝人の家が櫛比して居た。家の眞向ふには、今もなほ有名な料亭ひさご屋がもうかなりはんじようして居た。一たい何故父の性格及び業務には非常につり合はない此の樣な周圍にすんで居たかと云ふに、此の地所は舊藩主掘田伯の所有地であつたからださうである。

二三軒をへだてゝ、伯父の經營して居る櫻組の靴工場が有り、人が呼んで靴場、靴場と云つて居た。夏の夕暮などは多くの職工が無遠慮な雜談を交しながら、赤がへるをまるむきにして皿におどらせてゐるぎんこくさに目をおほつた事もあつた。

幼ない時、夏の夕暮などはその靴場の空地でまだ其の時分ぬけきらない武士かたぎの子供達大勢を集めて、其の時分十か十一位だつたらうと思ふすぐ隣りの大澤さんと云ふ――今云ふ靴場の工場長とでも云ふ樣な人の長男を旗頭に、向ひ合せの門と大澤さんの家の門とに紅白の旗を立てゝ源平になぞらへ、その門をさかひに戰爭ごつこをした。半男半女のやうであつた自分も雜兵の一人に加はつた。そして或る時などは眉間に石を投つけられて可成りの怪我までした。

「女の子の顏にこんな怪我までさして」と諺に云ふ、子供の喧嘩に親が出ると云ふやうな騷ぎ、ひいては自分もさんざ〳〵叱られて戰爭ごつこはしばらく中絶した。

無聊に苦しんだ子供等は更に新らしい遊びを考へた。それは相撲であつた。

恰度その時分梅ケ谷と云ふ横綱の全盛時代で、西の海と云ふのがたしかその敵手であつた。

例の享さんが横綱になつた。自分は女のくせに負けずに立ちまぢつて行司の役を喜んでまねた。もゝだちをとり

板切れで作つた軍配うちはを持ち、何でも二三日かゝつてかけ聲や何かを練習したやうに覺えてゐる。
「ハツケヨイヤ、ノコツタ〳〵。」等と汗を流し流し云つた事が今でも鮮かに思ひ出される。

それからいよ〳〵私の幼稚園時代が始まつた。

此の頃はまだたつた一つしか東京になかつた幼稚園——園主はたしか五十位だつたかと思ふ。男女二人の子供を持つてゐて、娘の方をおたつつあんと呼んで年の頃は二十三四だつたか……。

先生の方は細面で〻色の淺黑いやせ形の人で薄痘痕があつた。弟の方は二十歳位、折々は金を費ひ過ると云つては園主の叱る聲を聞いた。このお龍さんが先生の助手で、半紙を二三枚四角に切つたのを一組づゝ生徒に渡して、鶴龜、お三寶、菊皿など一人々々について丁寧に教へた。あの帆掛舟の帆の處を目を閉ぢておさへてゐるとひとりでにそれが一寸の間に、目を開くと舳の方に變つたりするのが不思議で不思議でならなかつた。天神樣や蛙などは中々むづかしくて覺え切れずにしまつた。

或時など、何の爲、又どうして兩親が承知したものか初めて——生れて初めてこのおたつさんと云ふ助手と一しよに錢湯と云ふ所につれて行かれ、白粉のついた眉刷毛でおつくりさへしてもらつた。今でもその時の驚異に近い思ひ出を忘れる事が出來ない。それに引き續いて、築地の居留地のタムソンと云ふ外人の處へもつれて行かれた。或はこの初對面の外人へ何でもかわゆく見せやうと云ふ好意からこの錢湯さわぎをしたのかもしれない。今でも覺えてゐるのはその外人の家の外側が赤い緣取つた黑色の家であり、私がいつた時丁度入浴中だと云つて其風呂場へ一寸のぞきに行つたやうな覺があるだけで、あとには何の印象も殘つてゐない。この外國婦人は布教の爲日本に來

てゐると見え、毎週一回づゝ女弟子をつれて私の幼稚園へ來い〳〵した。たしか土曜日だつたか日曜日だつたか、何だか神の話を說いたのであらうがこれも覺えがない。たゞその時に渡される喜びの音(ねとうれ)——かうふりがなをしたパンフレツトとまで行かない小さい刷物と、綺麗な日本紙に花鳥や何かを色刷にし、聖書の中の句をかいた横三寸、竪二寸位——曲尺の——かわいゝカードを渡されるのが堪らなく嬉しかつた。何でもそれが十枚溜ると何かに取りかへて貰へるのだとは聞いたが幼い心にはほんの其の時ぎりでいつも二枚以上たまつてゐた事がない。

そしてこの外國婦人が來る度に二人の女生徒らしい人が付いて來た。それは今考へるとむしろ助手とでも云ふ役目をもつた人だらう。一人は教師らしい質素な服裝と容貌の持主だつたが、外の一人はあまりその派手々々しい扮裝にまだ印象が鮮やかだ。何でも年頃は二十一二にでも成つてゐたらう。冬の事は覺えてゐない、なぜだか夏紺色に大きい白絣のすきやに、眞赤な湯卷の色の毒々しさが幼ない自分の心にも不愉快な心持ちがした事を今でも覺えてゐる。頭髪をいてふ返しに結ひ上げ新わらなどをかけてゐた。

或年クリスマスを此小さい幼稚園で行つた。その時色々のおもちやや何かゞ澤山此園內に運ばれ、幼ない友人共は皆眼を睜り心を躍らして、あれがほしいなあ、これがほしいなどゝ目算を立てゝゐた事だらう。やがてさゝやかな式が擧げられ、皆の羨望し期待して片唾をのんでゐたプレゼントが運ばれた。どういふ事か私の前には山のやうな品物が供へられた。驚いてゐる私の顏を見て外國婦人はにこやかにいつた。

「これはあなたのものです」

と、すゝり泣く聲は私の口元から洩れた。驚いたおたつさんは何故だかわからなかつた。「何故なくの？　これ皆あなたにタムソンさんが下さつたの、サア持つて御覽なさい」

「いやだ、あたし、こんなに澤山持ちきれないの！」

かういつて意外に驚かされたおたつさんに泣き顔をふいてもらつてやつと歸つた事もあつた。

かうしたごく〳〵幼い白紙の樣な頑是ない私の心にも遂に今も尙忘れ難い事實が展開された。それは、かういふ私立の學園とでも云はうか、此園内にはかなり園主への贈り物が公にしてゐたものと見える。宅などではもとより嚴格な父の命令のもとに他家に見るやうな事は出來なかつた事だらう。しかし、ある時、お孃樣へといつてよそから贈られたねがけ――その時代にはよくあつた色々の紙に金や銀、或は繪の具で花鳥をかいた――それがまだ俗にいふおかつぱであつた自分には不用だつたので、「これはおたつさんにお上げなさい」と云はれて、翌日その命令通り彼女に贈つた。すると、「あんまり澤山ね、あなたにも分けませう」とかいひ〳〵又その中の幾つかを自分に返した。それを持つて歸つた自分は、それをすぐ切りこまざいて人形の髪にかけたり、帶にきつたりしてしまつた。

翌朝自分は又何氣なく登園した。するとふしぎな――今まで自分のかつて知らなかつた友だちの囁きと耳こすりのたゞならない光景を目にし耳に聞いた。

「この人よ、おたつさんのねがけをとつたのは――」

何だらう？　變だ事、とは思つたらう、けれど私の幼い心には何の餘念があるだらう。例によつて例の通り、短い課業を終へて先生にあいさつもそこ〳〵飛ぶ樣にして家へかへつた。すると、母は何か事あり氣に私をかげの部屋に呼んだ。そして、「よし江、おまへ何か先生のものを取つて來やしないかへ」

この問ひにも私はまだ何ともいへなかつた。否思へなかつたのだらう。――

後年になつて母はいつた。

「あの時、お前がはつきり何とも云はなかつたばかりにお母樣はどんなに恥かしくつらひ思ひをしたか、そして先生にもいろ〳〵お願ひしてあと〳〵お前が困らないやうにしたのだ。」

小學校時代は此私の一生に取つてかなり、長い生活であり、又情操の發育時代であつたのでその時の物情はかなり鮮かな印象を殘されてゐる。

此時分小學校はまづ高等小學六級といふのから初まる。小學生徒心得といふのが第一番に讀方として敎へられるのでこれだけはすぐさしつかへないやうにと母が毎日口授された。その爲、はいるとすぐ讀方はすら〳〵とよめて自分にもうれしかつた事を覺えてゐる。

其他かき方や何かも幼稚園でかなり苦しんだゞけよく出來ると云ふので一級飛びこしてすぐ上級に上つた。それからの三四年はあまり記憶に殘つてゐない。

只九歲の冬、大變雪の降つた朝、十になるまでは足袋をはかされない武士氣質の家に育つた自分は、素足に足駄ばき、本包を背に横しよひに、お辨當をぶら下げながら此冬末暮の大道の中をさしてつらひとも思はず、折から吹き荒ぶ北風を眞ともに受けながらものゝ二三町も行くと益々降りしきる積雪の中に足駄の緒を切らした。アナヤといふ間もなく自分は雪の中にころんだ。やつと起き上つた自分は家に歸らうか、學校へ行かうかと思つて雪がとけてうづく樣に寒じて來る足の指先を眺めながら思ひ惑つてゐた。ふと、やさしい聲が私の後ろに起つた。

「西村さん、かわいさうね、これはいてゐらつしやい、さあ」

驚ろいてふりかへる私の肩の上に、その時分もう上級で十三四でもあつたらう鶴見さんと云ふ――たしか下駄や

の娘さんだつた――人の丈の高い姿があつた。

彼女は自分の足駄を躊躇なく私の前にさし出したのであつた。私は今でも此の人の此時の有り難く嬉しい心づくしを忘れ得ない。

かうしていたわられ、漸く辿りついた校門の大きい方はピタリしまつて潜りだけがあいてゐた。いぶかりながら入る玄關の口に小使は立つて云つた。

「西村さん、今日は此大雪で誰も來る人が少いのでお休みになりました。」

聞いて見ると受持ちの先生も御遠方なので來られないとの事。

ワアッ！といふなり泣き出した自分は此時まだ九つであつた。

受持ちの先生は小田ちか子といふ女教員、外に本間すわ子といふ女教員がすけに見える外大低の事は皆この婦人一人で擔任された。

この小田先生といふ婦人は又の名を室田先生ともいつた。何でも實家の姓と、嫁してからの姓名となのだらう。太り肉の眼の窪んだ髪が赤く一寸癖のある髪を、大丸髷に結ひ上げ淺黄色の手柄か、何かじみな容姿であつた。所謂女大學式の非常に貞淑さうに見える婦人であつたが、奥女中式の陰險な意地の悪さには大分泣かされた人が多いわけても、福田さんとかいつた自分より一つ上級の少女は、どういふわけかひどく憎まれて、聞いてゐても氣の毒な位苛まれた。

級がちがつてゐても此時代の貧弱な教育機關は、一室で二つか三つの級を一しよに教へなければならなかつた。その爲、よく此の少女はしく〳〵泣きながらあやまるのを嵩にかゝつて叱責するこの女教員のネチ〳〵した叱言を

聞くことも一再ではなかつた。

一體此の女學校はもと舊幕時代の合宿所とか、詰所とかいものゝ跡らしく、かなり構造の大きい二階建の日本建築で、今から考へると、もう〳〵お話にならない位、不整頓なものであつた。ある時小學校が聯合で何といつたか或教育家らしい人を招いて道徳的講演を聞いたことがあつた。

何でも此の人は特殊の孝行を唱つた道歌の様なものが小冊子になつてゐて、まづ、演壇に立つとそれを唱つた。

「それ父は天、母は土、項より足までを惠み養ひ給ひぬる、慈悲の御息は中々に文字や詞に述べ難し、先づ胎内に宿るより十月が程の憂き思ひ、生るゝ時に臨みては、痛み苦しく節々や、骨々までも解けはなれ、氣をも失ひ生死の界にいたるその苦しみは――この間忘却――又尿ばゞに穢れものとりあつがひに十の指、十の爪には悉く、不淨のけがれ去りやらず、これを嘗めけん厭ひなく、たゞいとほしみ給ひにき、身に着るものゝさま〴〵や、あついつめたい事もたゞねんごろにいたはりて――

かう讀みあげた人は極紳士らしい立派な態度の人で、色白く丈高く、溫容な人の様に覺えてゐる。

この一文を聞きながら、幼ない私の胸にはかたいかたまりが込み上げて來た。何とも云へない感動が全身をわなゝかした。あゝ、これからはきつと孝行をしなければならない、もつと〳〵等と心に誓つた。

扨は自分と同じ教室にもう一人忘れがたい人があつた。それは、綱島先生といふ女教員で何といふか名は忘れたこの人が自分達の一つ下の級を受持たれてゐたが、實をいふと自分は此先生の方が受持ちの小田先生よりははるか好きで、どうかして此先生に代ればいゝ〳〵とねがつた甲斐なく、或時四五日間も先生の顔が此教室に見えなかつた。いぶかつた私はその級の人に聞いた。

「何だか病氣ださうですよ」

すると翌朝學校へ行くとすぐ、驚くべき悲報を耳にした。それは、この私の大好きな綱島先生が死なれた。何でも御顔に疔といふおそろしいおできが出來て一寸の間にわるくなつて——

かくて二三日後に芝邊かと覺えてゐる宏大なお寺で葬式があづた。幼い心にはもう大分忘れかけてゐたその先生の大きな眼、明晰な朗談、太り肉の胸を張つて片足を前に、いかにも聰明さうな廣い額、しつかりした口元、此先生は好んでいつも〳〵變らず太輪のいてふ返しに青い玉の根がけをかけ、小さい珊瑚のかんざしを深くさしてゐた

今縷々として、此の立上る香煙に更に其面影は髣髴として、私は又號泣するより外なかつた。しかし、死者を弔ふといふ事に私はこの時が私にとつては生れて始めてゞはなかつた。思ひ出せば丁度私が五六歳の頃、十三になつてゐたすぐ上の辰吾さんといつてゐた兄——男性ではあつたが姉を持たない自分にとつては何でもかでも力になり又かなりやさしかつた。——が、非常に體格のいゝ持主で夏になると水泳がすきでよく大川へ泳ぎに行くといつては、學校から歸るなり荷物を玄關へ投げこんでそのまゝ駈け出して行つては夕飯に一番おそくかけつけ〳〵した。

その兄がある夏、やはり水泳から歸ると非常に眞赤な顏をして、いつもならすぐガツ〳〵して、腹がすいた、腹がすいたといつて食膳をいそぐこの兄が、どうした事か「僕何だか飯が食ひ度くない」といひ〳〵ゴロリとそのまゝ横になつた。

驚ろいた母が額に手をあてると火の様にあたゝかつた。そのまゝ彼はすぐ病床の人となり、氷を買ひに走るもの醫者を迎へに車屋に走るもの、急に家の中はざわめき出した。そしていつも兩親だけのやすむ事になつてゐた十疊の間——鍵のかゝる西洋戸の——そこに兄をねかせ、私を手まねきした母は、どうも熱病らしいから、お前は決し

て辰吾さんの傍へは來ないやうにと命じた。何とも云へない寂しく悲しい心持ちが幼い自分の胸を壓した。そして心の中に、其事のある二三日前の事が思ひ出された。それは此兄のもつてゐる鉛筆が何だが無性にほしかつた。

「辰吾さん後生だからその鉛筆を頂戴な」

とねだつた。すると、

「これは僕折角削つた許りなのだから、いゝのを取つて來てやるからお待ち」と云ひながら、此頃兄の書齋になつてゐた西洋館の二階——かなり高いへ駈け上つた。そして、鉛筆を持つなり急いで下りるはづみに、どうした事か兄の足は空をすべつた。そして上から勢よくころげ落ちた。

今、この兄の病氣は、かういふ出來事の私がわがまゝをいつた爲だつたのではなからうか、そのためこんな急に熱が出たのではないかしらと、何の病氣が何うするものか知らなかつた自分はたゞ〳〵情けなかつた。そしてどうかして此兄さんの回復をのみいのつた。

醫者がかけつけてくれた。其時分海軍々醫總監で戸塚文海さんといつた。何でも維新の戰亂時代この人の奥さんが危難に遭遇したのを先代が助けたとかいふ事で、又それでなくても近い親類にもなつてゐた。——

わく〳〵胸を躍らせてその診察の終るのを、そして何といはれるかと西洋戸の外口に立ちつくしてゐた自分は、やがて手洗ひが運ばれ、醫者が送り出されそれツとかけ込まふとする私の袂を、又しても母はいそいで引きとめた

「辰吾さんはヂフテリアといふおそろしい傳染病——ウツルのですよ、これから病院へ行かなければならないのです。お母様もついて行きます。泣かないでお留守居をしていらつしやい、ちきよくなつて歸つて來ますから」

かういひ聞けられたのを、しく〳〵泣きながらも止める事も出來ない事を流石にしつて居殘つた事、やがてそれ

から淋しい日が暮れては明け、暮れては明けして幾日たつた事だらう。或日、めづらしく久しぶりの母の聲がなつかしく、朝起きたばかりの私の耳にひゞいた。おどり上つた私はいきなり茶の間に飛び込んだ。

そこには例になく、こわいまでに緊張した父の顏、祖母、それ〴〵熱心に母の話を聞いてゐた。けはいのたゞないのに勢をそがれた私は、直に母の膝へもよりそへず、小さく堅く隅の方にかしこまつた。はなしは入院中の辰吾さんの話らしく、何でも咽喉を切つて管のさしてあるのがいかにもみじめで、勿論はなしも出來ず、聲が洩れて――と、氣丈な母も聲を呑んだ。何とも知れず、誘はれるやうに私の涙は潸々としてその小い膝におちた。けれど母は云つた。

「お醫者樣はもう少しの辛棒だ、夜晝氷づめにして膿ませない樣にさへしたら、とおつしやるので一生懸命その積りで目を放さず冷して居ります」

あゝそれなら辰吾さんもよくなつてぢき歸つて來られるのかしら、と、かう思つたのも空だのみで、それから二三日すぎると、家の中が急にざわめき出し、釣臺？がはこび込まれた樣に覺えてゐる。とう〳〵辰吾さんが死なれたのだ。亡くなつた兄の遺骸が運び込まれたのだ。あまりの驚愕に、その時の心持ちは今、說明する事が出來ないたゞ、何でも、「まあ、この子はこんな小さな癖に御飯さへたべずに悲しんで居りますの！」と、母が親戚の近藤さんのおばあさんといふ――何でも事ある時はぢき駈けつけては世話をやく、この頃もう六十餘と覺えてゐる――人に涙片手に話されてゐるのを聞いた。それが、むしろ人事の樣に私の小耳にのこつてゐるのも、あまり幼なかつた心に、その悲しみがいかに深く心を取失つてゐたのかと思はれる。生存中非常に頑健であつた彼の好みから、學校の餘暇に柔道の稽古に通つてゐた。そして何でも無性に人を投げて見たくてたまらなかつたと見え、幼い自分を呼

んで、

「よつちやん、兄さん此頃大變柔道が上手になり、それは〳〵うまく人が抛れるんだ、よつちやん一寸抛られて見ないか、その代り半紙一枚づゝやる、そら、この通りこゝへおくよ」

一度にかう云ひ〳〵澤山の半紙を目の前において迎へる樣にいつた。初めに流石に恐ろしい樣な氣がしてかぶりをふつてゐた私も「ナーンダ、相撲の行司までする癖に、へボクタの意久地なし！」

この詞はひどく私を刺戟した。

元來、負けず嫌ひのきかんぼうだつた私、なんでこの詞に屈服されてゐやう。

「いゝわ、それぢやあ一度に一枚づゝよ、きつと――」といひながら、少しあやぶみながらも、兄の正面に立つたやがてかけ聲を揚げると共に、もろくも私は抛り出された。

「ドウダ、何ともないだらう、兄さんもうまくなつたらう」

約束通り一枚づゝ半紙を渡され、それが日に〳〵自分の机の上に推くなるのを喜んだ。

すると或日、何心なく兄の部屋の前を通り過ぎやうとした母が異常な物音に注意をひかれ、部屋の中をのぞくとこの光景が目の前に展開された。母は驚きと怒りの聲も鋭く、

「辰吾、々々、何です、女の子に――怪我でもあつたらどうします。お前も亦何だつて面白くもない、女の子の癖に抛り出されて喜んでゐるの？」

流石、いくら幼かつた自分も此場合、褒美のたまるのが嬉しくてともいへなかつた。

そのまゝこの遊びは中絶してゐた。けれどこれさへ、程なく又母の留守に蒲團を重ねて物音も少なく、怪我も決

してないやうにと、くれ〳〵もいひ含められて又兄の相手になつてゐる中、意外にも今此の不幸の爲、大事な大事な兄自身さへゐなくなつてしまつた。直ぐ上の一番親しかつた兄——

これがまだ頑是ない私にさへ悲しみのため絶食にする樣な衝動を與へたのだらう。

この出來事のあつた年の樣に思ふ。初冬の風寒く肌を吹く頃から、父は風を引かれた樣なので、吸入や何かと治療される樣子だつた。何でも鏑木さんといふ軍醫——この人は私などの生れない前から父の遠緣の關係上書生時代に家に寄寓され、それから上に立身して此時分はもうかなりな軍醫にまで昇進されてゐた。——が前からの關係上心安く、我まゝを云ひ得る主治醫だつた。それで萬事商賣ばなれのした、至極親身な立場から父の神經質なのをよく知つて、何の藥でも一々處方を父に見せては調劑しい〳〵した。それがひどく父を安心させ、信用を厚くした。

だが、この時の父の風邪は例のとちがひ大分永びいて少しばかりの熱が引かなかつた。子心にも此時分、父が炬燵にはいつてばかりゐ、めづらしく書齋にも入らず、目は落ち窪み、母が氣をもんで何やかや細やかに心配してゐる樣子を見聞きしては、わからぬながら心をいためた。とう〳〵熱海行きを斷行する事に成り、私も同行されることになつた。其時分若黨といつた——今の書生にあたるだらう——名は何といつたか其男と兩親、私も一しよだつた。何でも箱根をこえる時、山百合の花盛りなのを見た覺えがあるから、初夏の頃だつたらう。立つ時も母がしきりに、

「お父樣が大分弱つていらつしやるから、お前は大人しく何でも駄々をこねてはいけませんよ」と云ひ聞かされて其時分はやつと小田原まで開通した汽車に新橋から乘つた。あとで聞くとこの汽車の中で父が乘車切符を紛失されおまけに私が幼な心の所在なさに、前にいひ聞かされた戒しめを忘れ駄々をいひかけたので、母が自分のさしてゐ

た本甲のびん櫛をかして「おつむをきれいにこれでかいてごらん」と、今なら、いろ〳〵玩具もあらうのに、明治初年のこの時分、何の玩具などに大金をかける人があらう。第一買ひたくても有りはしなかつた。——その櫛を唯一の玩具に、小さい鏡、これも母のをかりて頭の毛をかいてはうつし、かいてはうつしゝて、わずかに徒然を慰めてゐた。その櫛をどうしたはづみか眞二つに折つてしまつた。元來私の頭髮は、前に云つた戸塚さんといふこわいやうな軍醫さんが、何といふ髮の毛の濃い兒だらう、まるで地が見えないぢやないかといひ〳〵流石にその頭を撫で〳〵したといふ位濃い髮の毛であつたもの、何のあんばいもしらず、ぐい〳〵梳かしたのではたまつたものではない。

それさへ母は大變氣にして、昔から櫛の折れるのは凶事の前徵だとしてある、この旅行がどうか無事にすみ、父上も滯りなく快方に向はれゝばよいがと、人知れず胸を痛められたさうな。

それでもまあ切符の方も事なくすんだと見え、小田原に安着した。東京を一歩踏み出しさへするといつも父は元氣になつた。何でもこの時もその樣に覺えてゐる。そして生れて初めて旅に出た自分に取つて、夕飯の食膳の上に大好きな香の物が東京の家のそれとちがひ、ほんのチョンビリほかのつてゐないことがひどく自分を不滿にした。

「お母樣、お香の物が足りない」

これが私の家を放れてからまづ第一の不平であつた。とう〳〵父の分も母の分も皆私の食膳にゆづられてやうやく食事をすませた。

後年母がよくこの事を云つて私のお香の物好きは一つ話にきへなつた。

この小田原からは、此時分たしか山駕籠で上つた樣に覺えてゐる。それも折々は歩かないではならない樣な急坂

さへあつた。おくれ勝ちの自分を若黨に託して、母は足の達者な父に遲れまいと、結付草履の足元かるげにはるか先立つてしまつた。今考へると此時分から、大分歩き下手だつたらしい自分は、いくら行つても〳〵山又山、母が若黨に渡しておいたお鼻藥の松葉形の干菓子ももう殘り少なくなつた。結び付けた草履さへむやみに重く成つて來た。

困り切つた男は、かけわける樣に生ひ茂つてゐる夏草の中で、子供の氣に入りさうな花など手折つてだまし〳〵歩るかせた。それからどの位時がたち、道のりがあつたか覺えたゐない。何でももう悲しくなつて泣きたいのをこらへ〳〵「お孃樣は立派な武士のお孃樣です。泣くなんて見つともないので御座います。」

かう云はれて、グツと聲を呑んだきかん坊だつた自分だけを、今も記憶によみがへる。

それから又何處からか駕籠に乘つた——山駕籠といふのらしい。母にだつこして乘つた自分の小さなかぶきりの子供姿がわれながらいぢらしい樣に目の前に浮ぶ。

よつほど行くと、それこれが二子山だ、こゝで一ッ息杖をついて——と駕籠かつぎが休み、この峠の名物甘酒をのんでゐた。何といふドロ〳〵した汚ならしい物だらう。と

「孃ツちやん、一ついかゞ?」と出されてゾッと顏をそむけた。それ以來此甘酒は見るのもいやできらひになつた

しばらく行くと、ひどく惡臭のある水が山あひから流れ出してゐた。母は、「あれがあしのゆといふ硫黃のお湯で、難病の人はこゝへ來て湯治するのですよ」と指した。やがて母は右手に見へる墓石の跡が曾我兄弟のお墓——よくお話して聞かせた五郎十郎のお墓ですよといつた。すると自分が、

「あらお母樣、それではあの中に五郎十郎はまだ生きてゐるかしらん」

といつてひどくにらまれた事を覺えてゐる。そして、何の爲か說明されない幼子は、母がかく立腹した意味を知る事が出來なかつた。氣になつてゐたと見え、宿へついてからその事を聞くと、

「駕籠やが聞いてゐるのに、東京のお孃さんて何といふ馬鹿だらう、死んだもの生きてゐるかなんて——それだからにらめたのです。」

かういはれても何だかまだはつきりのみこめない心細さだつた。

宿へつくと、すぐ風呂といふ事になり、無論父が眞先に風呂場に入り、次いで母と私と——小さい私の浴衣を忘れたので、母がいそいで自分はふだん着にかへ、ぬいだ大きな浴衣を私にはふらせ、「あの階子段を上るとすぐのおへやがさうなのです。よくころばないやうに氣をつけて上つていらつしやい。」

かういふなり、何か父の用事でもあつたか母はいそいで室の方へ行つてしまつた。

まけずに跡を上つてゆかれるつもりの自分が、どうした事かいくらたぐつても〳〵袋の樣な大きな浴衣、足の先かやつと出るかと思ふと、此度は手の先が袖の中へ——何といふ果しなく大きいものだらう。一二段やつと上つた梯子段の中途で、もうにつちもさつちもゆかなくなつた。さうかうしてゐる中、とう〳〵このだん袋は、かんじんの足元へたぐまつてしまひ、團子の樣に成つた。自分はもう落ちる外なくなつてしまつた。相不變例の通り大きな泣聲がわれながら驚くやうな大きさで自分の口元から出た。

「アラ、よし江だね、こゝですよ、いやな子だね」

かういつてすぐ上の障子を開けて母が顏を出した。あまり近く部屋があつたので、流石にきまりのわるい自分はもう着物を持てあましてゐる餘裕がなかつた。そのまゝそこへ浴衣をおきざりに、はだかのまゝ母の膝へ飛んだ。

この宿屋は吉田屋といつて、此時分はかなりの宿屋だつたらしい。やがて二三日すると周圍の様子がそろ〳〵知れて來た。二間三間おいて西洋人夫婦のとまつてゐる事、その西洋人夫婦が子供を大變好きで、自分がそつと障子をのぞくと、片言で何かいろ〳〵美しい菓子をいろ〳〵紙につゝんでくれた。

二階下の六疊位の部屋には、今以て私の尤も忘れ難い印象を殘した——これも後年母に聞くと三十位の軍人さんだつた——さうだ何でも子供にでも死に別れて、私が偶然その子に似てゞもゐたのだらう、あんまりかわいがりやうがひどかつたから。

それは〳〵自分を我子の様にいつくしんだ人が泊つてゐて、朝から晩までほとんどその人の部屋にばかりゐた。そして、私の好きなものを聞くとその次にはきつとそれが供へられてゐた。毎日一度づゝはその人の部屋で食事をすることになつてしまつた。面白い話のつゞきを聞き度くて便所へさへ付いてゆく。するとその人は、肩車に自分をのせて用を辨じたりした、それが何でも入口の天井が低く頭を打ちさうに成つたりした位であつた。かうしてまで話のつゞきを聞くのを樂しみ、又その人も聞かせるのを樂しんだ。或る時はあの湯元のたぎりたつ所へも一しよに行つて、恐ろしさにおんぶしなくてはいやだとだゞをこね、とう〳〵さうして歸つた事もあつた。

かうして幾日たつた事だか、或日、この人は自分が行くとふしぎな事をはじめた。宿の庭先に椽臺だか何か腰をかける様にして、此時私のたゞ一人の友だちであつた宿屋の子供と二人を並んでそこへすわらせ、やがてわれ〳〵の前には變な形をした機械が据えられた。細い木の脚のついた、その上に四角い箱の様なものが入り、黑い布がかけてあつて、驚くべきことはその帛をかぶつて、例のおぢさんはいつた。

「そら、この機械の鏡の様に光つてゐる所を見ておいで、おぢさんがこのきれをかぶるとこの光つた所へ面白いも

のが出るよ」

かういひ〳〵おぢさんは忽ちそのきれをかぶり、片手でその鏡のやうな所を指して、

「そら〳〵動いちやいけない、もう少しもう少し——」

かういはれて一生懸命その光る所を見てゐたわれ〳〵の目の前には、何の形も色も、ましておもちやも見えなかつた。

掛けなれない様子にかしこまつてゐた私は「ナーンダつまらない、いつものおぢさんにも似合はない、何にも出やしないくせに——」

きつとこの宿屋の子もつまらなかつたにちがひない。かう思ひ〳〵その時は過ぎた。

或朝また例の通り起きるとまづ一番がけに飛び込んだ此のおぢさんの部屋の中に、何が自分を驚ろかせたらう。それは何だか後向きになつて熱心に眺めてゐる姿を見た。私はいつも誰でもするやうに、ソーツとぬき足さし足その傍に近づくと、いきなりそのおぢさんの目を兩手で塞いだ。

驚いたおぢさんは——或は薄々しつてゐたのであらう——手にあつたものを落した。それは小さい硝子張りの繪の様なものであつた。いきなりひつたくつて自分はそれを見る——と、どうだらう、そこには自分の姿があり〳〵と宿屋の子の姿とならんでうつつてゐるではないか。

それからどの位われ〳〵はこゝに宿泊して居つたか、そのかなり長逗留の中かういふ事もあつた。

それはかねて病弱でありながら、山登りのひどく好きであつた父が、何月頃だつたか何でも、羽織を着てゐた様に覺えてゐる。初冬の頃だつたらうか、めづらしく麗かに晴れた空の様だつた。何か用事で私と母とは、暫くの間

父とはなれてゐた。お風呂に入つてゐたやうにもあれば、又買物に出たやうでもありはつきりしないが――自分たちの部屋にいつも本を讀んでゐる父の姿が見えない。肝臟が痛む癖のある父は、歩くのは一寸の間醫者に止められてゐたのだ。――その父の姿が見えない。母と二人で處々をたづねた。宿の者にきくともうよほど前にお一人でお出かけに成り一寸の事と思つて別段お出さきも伺ひませんでしたといふ。しかしもうぢき歸ることゝ、母共々しきりに待つて〳〵出つ入りつしてゐる障子にも、もう赤々と夕日の影がうつつた。

「御飯までにはおそくもお歸りになるだらうと思つてゐたのに――」

といふ母の顏を見上げて、たゞさへ三人ぎりの旅先きの心細さが更にしみ〴〵と身にこたへた。

もう程なく御飯の用意にと、食物の注文をきゝに下女が來た。とう〳〵母はいつた。

「サアお前一しよにお出で、何ぼ何でもあんまり御歸りがおそい、もうかうしてはゐられない。」

心の中では嘸かしわるい豫感で胸を騷がしてゐたゞらう母も、幼弱な私にいつても泣かれるより外甲斐のない事を知つて、かう詞少なにいつたまゝ、仕度もそこ〳〵自分の手を取るなり急いで店先へ出た。

やがて母と二人、歩きなれない山道を人さへ見ると「かういふ杖をついたかい、〳〵と此夕暗の山道をいくらも通る人のない――そてゐた。變にこぶ〳〵の曲つた。御爺さんは見なかつたかい、〳〵と此夕暗の山道をいくらも通る人のない――その人さへ見ると誰にでも問ひかけた。

「まるで舌切雀のお爺さんが雀を尋ねる時の樣だね」

と、母は涙ぐんで、それでも流石にいつもの樣に駄々をこねる場合でない、「お父樣はどうなさつたらう」と、子心に案じて泣きさうになるのをこらへ〳〵してゐる氣持は察せられたと見え、こんなことをいつてお伽噺を思ひ出

させて心をまぎらせやうとでもしたのだらう。けれど、いつまで行つても〳〵「そんな人は知らない」と憎らしいほどサツパリとあふ人毎にいつた。がつかりしながらも母は、

「行きちがひになつて、もう外の道を通つて宿に歸つてゐらつしやるかもしれない、サア、シツカリしておうちへ歸つて見やう」

かう云ふなり母はむりに元氣らしくもとの道へ踵をかへした。

もうあふか、もう行先がしれるかでやつとこらへてゐた自分の足は俄に重く成り、目の中もあつくなつた。聲をあげたいのをどうこらへたか、母と一しよに又もと來た道を宿へ歸つた。すると宿屋の潜り戸を開けるが否、番頭は店先に待ちかねてゐた。

「奥樣、旦那樣はもう小一時間前に御歸りになりましたが一寸御ころびに成つたので醫者を呼ぶ所でございます。」

いきなり母は私の手をはなすなり部屋の方へ急いだ。

父はかなり蒼い顏で床の中に入つてゐた。何でもやはり登山好きと、例のきかない氣が手傳つて、あまりいゝ天氣に此位は大丈夫だらうと、登つた時はよかつたが、歸りには大分疲れて一寸辷つた拍子に仕込杖の銷がわれ足の先を切つたので歩きにくゝなり、持病の肝臟が少し痛んで、やつと山の宿へ辿りつくとすぐ醫者に賴み、それ〴〵手當てをしたとの事。

「それですから、あんなにお醫者樣から止められていらつしやつたのに――」と、母は怨めしげにいつた。それには自分も同感だつた。

かうして後幾日か父は病床の人となつた。心にはかゝりながら追々よく成る父の枕元に、かなり女にしては潑溂

と遊びすぎの自分は永くついてばかり居られなかつた。例の宿屋の子供と一しよに濱へ出ては、長い海草のほしてあるのをひつぱつてはちぎつてたべ〳〵砂の中を鬼ごつこや腹ん這ひのまゝ、あてどもなくひろい海仰げばはてしなく高く大きい空を眺めてのんきな日をおくつてゐた。後年その時ちぎつてたべ〳〵した長い海草を何だつたのか母に聞くと「それはお前、若芽の生なのだよ」かう聞いて自分は唾が出る程その時の甘さを思ひ出した。早速買つてその「生の若芽」をたべた。ヂャリツといふ齒ざわりと磯くさい臭氣の外何の異つた味のないものだつた。

「ほんとうにお母様、たしかにこれだつたの？」

「あたしも實は、お前たちがあんまり甘さうにたべるので一寸かんでみたが、迚も〳〵食べられたものではなかつた、よくたべたもの、甘さうにムシャ〳〵たべる——と思つてゐたのさ。」

聞いてすつかりがつかりした。とりかへされない年のせいだ。

さう考へたのももう三十年近い前だつたらう。——

又ある晩、宿の前の濱べで大勢の人聲がした。耳さとい父はぢきに聞きつけて

「何だらうお千賀、一寸窓をあけて御覽」

と、明けさせる目の前の海上には異常の輝きがあつた。まだ宵の口でねなかつた自分もその明るさにかけつけた目の下に見える波打際には、澤山の人だかりが追々あつまつて來た、海上を走つてゐる一つの大きな黑い船から放つ異常な輝きにひきつけられてゐた。

ワッ〳〵といふ叫聲がして、中には船火事だ、船火事だといふ聲が多く聞こえた。

しかし父はいつた。

「どうもおかしい。火事なら光りがもつと動き、煙も見えるはづだが、一團になつて動かず、火の光りも少しあたりまへとちがふ、ふしぎだな」といはれた。

これもあとになつて——約十年もたつてから、それが電燈であつた事がしれ、火の光りが動かなかつた筈だと笑ひ話にさへなつた。

それから少し間があつたかはつきりしないが、やはり兩親と共に箱根に行つた。ところがどういふものか母と自分と二人が大變湯中りがし、下痢ばかりしてゐて、玉子のおぢやばかりで幾日か暮してゐた。そしてこの宿屋が非常に遠く、今とちがひ電鈴などゝいふ重寶なものがないので、小さい自分がお腹がわるいのに、度々長い〳〵廊下を往復して、勝手元に下女をよびに行く。何をたのむ——いやになつた事を覺えてゐる。たゞこゝで一つ珍らしかつたのは、或晩生れてはじめて時鳥の聞を聲いた事であつた。

さて、この二ヶ所の湯治で約一年間？　休養された父は、かなり健康を回復され、「お出での時切符をなくしたり、櫛をよし江が眞二つに折つたりして、お腹の中ではいくらかつぎやでない私もずゐ分氣にかゝつたが、こんなによくお成りになつて——」とよろこんだ母の詞を考へても快復された事がわかる。

父は又孜々として晝は勤め、夜は勉强された。

それからどの位たつたか、或晩、自分は寢床の中から起された。

「勝治さんが——叔父さん——なくなんなすつたから、行かなければならない」

かういはれて、ねむい目をこすり〳〵この叔父さんの家へ行つたこと――これだけほかおぼへてゐない。只其家は其あとで戸塚文海氏に譲り、その文海さんの代になつてから、始終自分も行つては診察をうけたので、めづらしい建物だつたゞけ今でも記憶が鮮やかだ。そして、其叔父の遺子の中、男は品川のおぢさん――西村勝三、伊勢勝といつた――その人に引とられ、女の子は二人自分の家へ引とつて養育された。總領が龍之助、次男が直二、三男が信次？　といつた様だつた。

此人は左利きで自分のお膳の上へいつても天神様の――今戸燒――像がおいてあつた。御飯の度に「天神様〳〵左利きをなほして下さい」かういつておがんでから御飯をたべてゐた事を覺えてゐる。眉毛がひどく地藏眉毛で口元のしまらない、私が子心にもこの人はお坊さんの様な顏だと心の中でおもひ〳〵した人だつた。

女の子は上の方がお琴さん、次の方がおとせさんといひ、お琴さんの方が私より四ツ上、おとせさんは二ツ上だつた。

この人たちが、私の九ツか十う位から引取られて一しよに暮す様になり、それまではたつた一人ねかされて、夜厠へおきるにも特に明りをゆるされなかつたので淋しく〳〵厠の硝子窓に顏のうつるのさへこわくて、かゞんで目をつぶり、やつと用を辨じた――それもこの二人が來ると共におこしつこをする事になりいつでも三人で行き〳〵してどんなにうれしかつたらう。殊に私の寢てゐた室は十疊の座敷で、西北の隅に佛壇があり、それにつゞいて一間の戸棚、その次が硝子がはまつた障子が立つて、その外が一段下つて廊下になり、その先に土藏があつた。夜起きるとその硝子に物の影のうつるのが恐ろしく、御飯の時にしく事になつてゐたござを皆がねしすまるのをまつてソーッと立てかけてはね――〳〵した。何でも幼い頃から、かなり神經質であつたらしい私は、夜寢る時には何で

も光るものをきらつたらしい。こんなにまで臆病であつた自分も武士の子だ決して「こわい」といふ事はいふものでない「かゆい」といへと云はれてゐた。

こんなにして恐ろしさをむりにこらへてゐなければならなかつた私にとつて、この二人の來た事はかへすゞ〳〵うれしいかぎりだつた。けれど程なく此二人の從姉にふしぎな癖のある事を發見した。それは或眞夜中のこと、ふとある物音に目が覺めた自分が、何氣なく目を開くと枕元にはぼんやりした有明の影に誰かしきりに起きて働いてゐる人がある。驚いてよく見ると、それはおとせさんで、何かあはたゞしげに足元にかたづけてある机の上をあれこれと尋ねては風呂敷につゝみ、やがてそれを背に負ひ、いつも學校へゆく時の通りそろばんを片手にぶらさげ、何か口の中で小聲につぶやきながら出て行かうとする様子なのだ。すつかり驚ろかされて思はず起き上つた私は「おとせさん、今時分あなたは何をしてゐるの？」かういつても更に耳に入らぬらしくしきりにつぶやく聲をきくと、「おそくなつた〳〵」といふのだ。

ふと自分は、かねて此の人がねぼける癖があるといふ事をおばあさんから聞いた事のあるのに氣が付いた。自分はいきなり彼女の肩をかなり強く打つた。そして「おとせさん夜中ですよ、あなたねぼけちやいけないよ、おとせさん〳〵」とくりかへした。その中彼女の姉もおきてともゞ〳〵目を覺まさした。やつと氣がついて、ハッと我にかへつたらしく周圍を見廻した彼女は「アラマア――といひながら更に自分の身の廻りを見まわし、きまり悪るげに苦笑ひした。そして「又あたしねぼけたの、すみませんネ――」といつた。

こんなに念の入つたねぼけ癖を初めて見た自分は、當分なんだかこわかつた。

姉のお琴さんの方も私には「よし江さん、おきてちようだい〳〵」とふるへ聲のかすれ〳〵自分をおこした事が

あつた。それは丁度蚊帳の釣つてある夏の頃、まだねて間のない事、自分より年かさの此の人は非常にからだもか細く臆病であつたので、何かにつけ、ズツと年下の私をたよりにすることが多かつた。

此時もかう云つて起されると、又臆病ものゝお琴さんが何がさわいでゐる。ドレ〳〵と年下の癖に少し威張つた氣持ちで起き上つた。すると、どうだらうお琴さんは手足をワナ〳〵震はして、蚊帳にうつる顏色は蒼白に蚊帳の外を指さした。そして「よし江さん、ソラ、外に誰か立つてゐる——ウヽヽ」とふるへ〳〵いふのだつた。

一時は自分も胸がドキ〳〵するほど恐ろしかつた。けれど自分が力にきれてゐるといふ樣な見え坊から、むりに鳴りさうな齒の根をくひしばつてその指さす方を見つめた。すると、そこには何のかげもなくたゞ足元の鴨居にかけてある浴衣が淡い有明けの影に薄白く見えるばかりであつた。

「お琴さんこれなの？　あなたのこわがるのは——」いきなり自分は蚊やを出るとその浴衣を引つぱつて見せた。

「あゝそれだつたの、よし江さん有りがたう、やつと安心したわ」

寢入り花をおこされてあまりうれしくもなかつた私は「大きな癖に」と少しは不平だつた。そしてこの詞にろくな返事もせずにねどこへはいつてしまつた。

かういふ風に年にしては目さとく、ねつきにくかつた自分は更には神經質の二人の爲折々幼ない頃の夢をさへ破られた。けれどそれも追々なじむにつれ氣にならず賑やかに樂しい方がふえて行つた。お琴さんの方は年上なので靜女塾といふ——平尾光子女史の經營してゐる——のに入門した。

そしておとせさんと二人は同じ小學校へ通學してゐた。同級の仲間の中今も覺えてゐるのは、塚本照尾さん、奥村さん、森村——さん、下田さん——此人は家が貧困の爲中途退學した。が、ひどく小田先生のお氣に入りで何で

も皆して雨でもふるとその人の家の前まで送つて行く事さへあつた。一度は自分も物ずきに一しように付いて行つた。これは何でも築地の裏長屋の小さい〳〵家で、その家の門口に小さな柿がたくさん實つてゐるのを、其下田さんが拾つて皆にくれたのを覺えてゐる。しかし、それは口にするやうなものではなかつだ。それをさへ御機嫌とりに外の友だちは甘い〳〵とほめ、下田さんがとつて得意然となる事さへあつた。

今おぼろにのこる下田さんの印象は、何でも年は私らよりズツと上で父親が車ひき——荷物挽きの樣なものらしかつた。ひどく頰のこけた目の窪んだ色の蒼い、一寸おばあさんの樣な顏に髪はこれも年よりらしいひつつめのいてふがへしに、小さい珊瑚の根掛けをかけ、娘らしくない服裝下の方へ小さく帶を結び——ひつかけのやうに——黑い襟をかけて實に〳〵お婆さん〳〵してゐた。

この人のいふ事はふしぎに小田先生のお氣に入り、あの人は先生のひいきよ、と友人同志がいつてゐた。しかし私には、別段何の關係もなかつた。しかし追々級が上るにつれ奥村さんといふ友人——これが恐ろしく級中に勢力をまして來て、この人の事でさへあると何故か小田先生は一も二もなく同意し、ないしよではひどいひいきをさへしたさうだ。

或時などは此時代によくあつた。

「サア皆さん、私が誰をひいきにしてゐるとか何とかと此頃しきりにいふ人があるさうだ、誰をひきにするかこの紙へ書いて御覽なさい」

見たところ奥女中式であつた此人はかういふ事までその式であつた。

やがてそれ〴〵に書かれた紙を先生はよもうとした。私もやはり遠慮なく「奥村さんがひいきだ」と書いた。胸

をドキ〳〵させながら聞いてゐる私の耳にどの紙にもどの紙にも「奥村さんは先生のひいきだ」とかいてあつた。
讀み上げた先生の顏はだん〴〵赤くなつて、ツイと立つて何處へか行つてしまつた。驚ろいた幼い友だちは誰も聲
を出す者もなかつた。正直に無邪氣な子供達の心には「惡るかつた？」かう思つてゐたのだらう。

やがて賑やかな足音がして、この二階の教室に小田先生の外本間先生が一しよに現はれた。そして不安げなこの
幼い生徒たちを見下して「この投票を見ると、皆が奥村さんをそねんでゐるやうです。あの人は全く出來るからひ
いきにするのです。これはあたりまへのことです。あなた方もひいきにされたいなら奥村さんのやうに數學がよく
出來るやうにおなんなさい」かう小田先生が嚴然といつた。

その後から本間先生が「生徒の分際で先生の事をとやかくいふのは不都合だ、全く小田先生のいふ通り、ひいき
にしてもらひたければよく出來るやうにするがよい」といふ意味でせい〴〵應援した。その頃はもう十一二になつ
てゐたらう。私の心の中ではどうしても納得出來ないものがあつた。それは、學問の出來るのを愛するのはあたり
まへだ、しかし、奥村さんには、出來ないでもいゝ點をやる、何から何まで待遇を異にしてゐる——それが不平な
のだ。先生はごまかしてしまつたのだ——實際この奥村さんといふ人は、何處からどこまで意地わるだつた。私な
どは幸ひ小學校へ入るとすぐ一番——この時分は一番二番で優劣をつけた。——首席で卒業まで通してしまつた—
—それでさへ苦しめられた。まして出來ない人となるとみじめにいぢめられた。それは見るから意地の惡るさうな
——小柄なしまつたからだつきで、顏は丸い方、顏一ぱいめづらしい程雀斑だらけ、色の黑いそして唇の厚い——
かう書いてゐるうちでもこの人の顏は南洋式とでもいふのだらう——あの蠻人の持つやうな厚い唇と三白の眼の悽
さ、聲が低くいやにおちついて一寸猫背の——

今この人の如何に陰險であつたかを書かうとしても、どうしてか思ひ出すやうな印象が殘つてゐない。殘念だが
しかたがない。たゞ不思議な事には此人が二三年前田端で横死した上田さん——この人も同じ小學校友だちでこの
人の兄さんの處へこの奥村さんが緣づき、不相變意地わるをつゞけたので兄さん夫婦がたまりかね田端へ別居して
無人の爲兄さんの留守中嫁さんになつてゐたこの上田さんが、物取りの爲横死する樣な不幸にあつたさうだ。

銀林綱男さんのお孃さん、名前はわすれた此人と、松尾友子さんといふ人がすぐ上級であつたやうだ。銀林さん
は作家丹野禎子さんの母堂となられた事を百合子から一兩年前きいた。そして先方でも私が百合子の母である事を
しり、是非一度あひたいといはれたとの事私も是非ともおあひして、作家を子に持つ母の苦しみ、よろこびをもし
み〴〵おはなしゝて、幼時を追憶して見たいと思つてゐる。

上級の松尾友子さん、この人はどうしてか格別親しくしてゐた。後年この人が非常に奸物で、われ〳〵の知らな
い中におとせさんと私の間に水をさし、それのみか小田先生にいひつけて私を叱らせてゐた事がしれたが——この
人はやはり小田先生にかなり大事にされた一人で、お父さんは松尾儀助といひ外國貿易商、木挽町邊にかなり大き
なお宅をかまへ一度そこへ行つたことがある。卒業しないで此人はたしか華族女學校へ行つた。何でも得意然と立
派な——琥珀の洋服——を着小學校へ來た事があつた。

その時分はまだ婦人の洋服といふものはめづらしかつたので、その人が學校へ來ると、小さい生徒がぞろ〳〵つ
いて歩いた。

或時、又小田先生の前へ此松尾さんが見えた。在學時代の仲よしの友人が集まり、私も亦その一人だつた。いろ
〳〵はなしの時、小田先生が「松尾さんあなたのおうちがお引つこしの樣にきゝましたがほんとうですか、何でも

華族女學校もおやめになるといふはなしですが――」

突然さういはれて見ると此頃松尾さんは御自慢の洋服は着ず、此日もさして立派でなささうな日本服だつた――かう先生にいはれて、松尾さんが何といつたかはつきり覺へてゐない。しかしこれからあと、自分がこの小學校を卒業して華族女學校へ入學した時、もう此松尾さんの姿は學校中に見えなかつた。噂に聞くと、何か御都合で御退學になつたとばかり――

それからあと幾年だつたか、私がもう此中條家に嫁し、小姑にあたる鷹子といふのが大瀧潤家といふ醫學士に嫁した後更に幾年、駒込の精神病院に春季の病人慰安の運動會があつた。

「ねえさん、もしおよろしかつたらいらつしやいませんか――日巢鴨の精神病院の構内で運動會がありますの、狂人とはいつても、皆藝人揃ひで地口の出來ばえやとてもあたりまへの人はだしださうです、三味線や踊りも上手であの有名な葦原將軍のさしづでお伽芝居まであるんですつて」

かう誘はれて、すぐゆく氣になつた自分は、たしか百合子がもうかなり、大きくなり國男と一しよにぢき近くの瘋癲病院へ行つた。何でも大變いゝお天氣の日で、いつになく列をなした人波が病院さして動いてゐた。

入口から中々こんで背のびをしなければ飾り物も見えない位。成程いろ〳〵のかざりものをして地口がかいてあるのが中々うまい。

やがて一團の群集が小高い所にあつまり、其中央の餘地に日の丸の軍配をかざし、半白の髪を束ねてさげ、白髯胸まで垂れ、野袴のやうな白い縞の袴をつけた立派な織物の袴をはき、繪で見た事のある菖蒲皮の足袋をはき大聲に號令してゐる一老爺を見た、直ぐ「ア、この人だ、葦原將軍は――」きいて見ると果してその通り、この軍配の

許に忽ち一團の狂人の群が集つた。桃太郎のお伽芝居だ。桃太郎、犬、猿、雉子、鬼の數人。芝居のかりものらしい金びかものを着飾つて扮裝した人々は、とても狂人とは見えない。一人先頭にたつのが尋常の人で、かういふ事に巧者な人と見え、いろ〳〵口上や何かをいひきかせて先へ立つた。やがて芝生の眞中に假設された天幕の中にそれ〴〵お芝居が演ぜられた。面白かつたのは、此見物の中に狂人のみが皆赤々と櫻の花かんざしをさして得意然としてゐた事だ。白髮のおばあさんたちも――

是は狂人の癖で、何でも赤い美しいものが好きな爲で、院長の好意から與へられたものださうだ。この尋常でない見物人も誠に靜肅だつた。お赤飯の折づめが配られ、皆よろこんで食べては舞臺のお伽芝居に手を叩き、中にはおどりあがつてよろこぶ者さへ見えた。

まだ一番總領の基さんが小さかつたので、鷹ちやんが歸らうといひ出した。それではといふので打つれて歸るこの病院の門内の植込の方から小走りに一人の婦人があらはれた。

「ちよいと〳〵、あなた西村さんぢやないの？　よし江さんぢやありませんか」

かう呼びかけられて驚ろきながら振りかへるそには、もう幾年も〳〵前に消息を絶つた松尾さんが立つてゐた。不相變大柄な太り肉に、薄痘痕のある鼻の低い、目のしよんぼりと――不相變その通りの面影が私の前にあつた。

「アア、あなただつたの？　おもひがけない、しばらくでしたわね、一體今どこにいらつしやるの？」

いつも快活に思ひ上つた樣子をしてゐたこの人の、例になく打沈んだおもざしと、こんな折にはあまり見すぼらしいみなりに氣が付いた。

「エヽ、あたしほんとうに不幸な目にあつてね、ほんとうに今はあたし一人ぼつちなの、天にも地にも――」

かういひながら、目元のうるんで行くのを見逃す事は出來なかつた。

小學校卒業後、此人の奸キツであつた事、そのためおとせさんも私に惡感情を持ち、つひには小田先生にまで中傷されてどの位難儀をしたか、にくらしい人だつた――と恨めしく思つたのも、このいたましい面だしには刃向へない。

「マア、お氣の毒です事、今どこにいらつしやるの？　その中是非おたづねしませう。そしてよく御はなしも伺ひませう。」

かういつていたわり同情する外なかつた。

少し歩きながらはなしを聞くと、松尾さんの一家は御主人の儀一さんが外國貿易の先驅者で、一攫千金の夢を見てゐたのが、一寸した失脚から木挽町の御宅も人手に渡り、丁度その時あの華族女學校退學の事も起つたさうな。さうして、その前友子さんが片付いた家の人達も、兄弟、子供ものこらず死に絶へ、今は實家の松尾さんの家をついだ若い弟、この人だけが生き殘つて今は支那に身を立てるため行つてゐるとの事。

あんなにもゆう〳〵と構へてゐた家、華族女學校――琥珀の洋服――華麗な夢はかく覺めた――。

かうして悲境に沈倫し、難きに陷つてゐたこの松尾さんの運命は、更に數奇を極めて此の私を驚ろかした。それは又その後、十數年の後、私共幼少の折通學した築地女子小學校長杉浦先生といふ人の滿廿五年勤續の祝賀會があつた時だつた。思ひ起すと、この校長さんにもいろ〳〵逸事がある。丁度私が小學校を卒業しやうとする時分だつたと覺えてゐる。

此校長さんは、衛生と倫理の講義を持つておられた。其時分この人は――今考へると四十には成らなかつたらしい――色の淺黑い――中肉中背で、目の細いチョボ髯の、あまり風采の上らない人だつた。――この人の特長は、いつも爪を嚙り〳〵講義をされる事だつた。非常に癖癖のある人だつたのだらう。絶え間なく嚙むその爪は、始めは一本の指、遂には五本の指、代る〳〵に及んで、見る目も五月蠅い程だつた。

この校長さんが、或時その衛生について話された。

「皆さん、衛生といふのは養生の事です。まづ第一番に自分のからだを不潔にしないやうに、お湯にはいる事や等々……そして爪もよく切り――」

私は思はず吹き出した。日頃から氣になつてゐるこの校長さんの爪の事、生徒たちは陰口に「爪かぢり校長」との異名さへ奉つてゐた――その當の主人公が爪の衛生をのべる――おかしさはとう〳〵爆發した。私は聲をあげたこの笑聲は校長さんの激怒をかつた。

「何です、笑つた人は西村さんだね、サア何故だかいつて御覽」

かう聞かれて私は暫時途方にくれた。けれど例の利かない根性はとう〳〵私を其席から憶面なく立ち上らせた。

「校長先生、先生は今色々衛生について御はなしが御座いました、しかし、先生はなぜ爪をおかみになるのですか」

この問ひはかなり先生を驚ろかせ、またまごつかせたのだらう。その問ひに答へず校長はそのまゝついと階下に行つてしまひ、間もなく上つて來たのは擔任の小田先生だつた。

「今校長先生から伺ひますと、この中で何か先生に無禮な言を申上げたさうですが今度はゆるして下さるさうです この後さういふ事があると考へなければなりません。かう校長先生はおつしいました、そして私の教へ樣も屆かな

い事になります。氣をつけて下さい。」

かういつてふきげんさうに小田先生は口を閉ぢた。日頃から何事も表面はやらかく、內心にこだわる事の多い此の婦人の氣性を、子供心に知つてゐる自分は、其後幾週間その餘憤に苦しんだか。

この校長杉浦先生の祝賀會に、同窓會が盛大に開かれ、紀念品の時計や煙草入れ？　なんかおくられた。古い同窓生の一人として、自分も幾十年ぶりかでこの校門をくゞつた。

幼い時の思ひ出――嬉しかつた事、つらかつた事、若かつた自分もかなり感動を新たにした。

やがて式場に――もとから見れば著しく面目を一新した――列なつた。まだはじまるには少し間があるので、さゝやきの聲がかなりかしましかつた。いきなり自分の肩をたゝく人があつた。これはかの松尾さんだつた。今度は又以前とは見ちがへる樣に服裝も美々しく容貌も明るく、例の又得意氣な面持ちが復活してゐた。

「アノネ、あたし今幸福なの、皆さんのおかげで――かういつて見廻す、この人の眼差しを逐ふとそこには平野さん――築地製版所々長の令孃――があつた。

氣はひを察してかその人は近付いて來た。そのはなしによつて、松尾さんは平野社長の夫人が死亡され、そのあとに多勢の子供があり、困りぬいて居られたのを、丁度この松尾さんの孤獨であるのをしつた平野さん――社長の娘――が、幸ひ同窓であるのを機緣に、とう〳〵目出度緣は結ばれ、今はその社長の二度目の細君として物質的にも些の懸念なく復活した生活に滿足しておるとのはなし。

その後又幾年、最近常盤會の同窓會の時、聞くともなく、此人が又此夫君にも死別され、又々孤獨の生活に入つ

た事を聞いた。しかし、物資には不平ない事、これがせめてもの事ではあるが――

人生もかう私位になると、ほとんど人生の一生を見る。

この人生の一生を見るといふ事が、ふと思ひ出した事を一揮話としてこゝにかき度い。

それは丁度これをかいてゐる日が昭和三年十一月十七日、丁度昨日が大饗宴、十四日から十五日にかけて夜を徹しての御祝祭大嘗祭の日であつた。

明治大帝が回天の大業を全ふせられ、國運日に月に隆盛、遂に五大强國の一にさへ進展し、其御治世四十五年の間絢爛たる御治蹟實に大日本中興の英主として、御治世のまだ短いのを歎ぜしめた。

噫、其御不例の報、ついで日に〳〵號外で報道さるゝ御容體書、いか程忠良な赤子の心を戰かしたらう。晝夜をわかず宮城前の小砂利の上に端座して天神地祇を拜し、只々陛下の御快癒を祈つてゐた。けれど、皇天何すれぞしかく無情なりしぞ、此英主を遂に其人民から奪つて遂に神さり給ふた。

年若い頃、歷史で見た「民考妣を喪するが如し」と、仁德天皇崩御の後、人民唯哀悼の涙にくれた――といふ歷史上の事蹟を目のあたり、天日爲に暗い感がした。程なく又號外は乃木夫妻の死を報じた。

丁度その時、私のうけた感動！　それほ何といつていゝか、今も尙其時の激情をあり〳〵記憶する――悲しいのか、否……何か？　何か？　自分にもわからない。說明する事が出來ない。まだその時分幼ななつた子供たちが懷疑の目を光らすのも痛ましい。私は戶棚の中にかくれて幾時間か泣き過した。

辛うじて泣き止んだ私は、何氣なく尋ねて泣き顏になりかけてゐた子供らの前に出た。

「どうしたの？　おかあさま！　泣いたやうな顏だわ、泣いたやうな顏だわ」

代る〳〵いぶかつた。それから數日かの後、御靈轜御發引の御大儀が擧行されるので、私は常盤會々員として華族女學校の御隣家閑院宮樣の特別の思召しにより一番拜見し易い御庭前に會員全部及教員達と御一緒に奉迎する事になつた。

何でも其日は朝から――午前九時頃から――華族女學校に參集し、夜の九時御發引を奉送するのだつた。

かくして前古未曾有の御大喪をおくり奉つて、この皇后陛下は遂に御痛はしく皇太后陛下とならせられ、青山御所に入御遊ばされた。

大正天皇の御世に成つた。時の皇后陛下、この御方こそ、私が丁度十七八歳の頃もう少しで華族女學校を出やうとするかなり上級の時代から、その頃まだやつとお稚兒まげのいたいけな――九條節子姫をふとした事から御見し申上る樣になつた。

一體私は、どういふものか、ひどく小さい方達が好きで、又その方々からも非常に好かれてゐた。鍋島伊都子姫後の梨本宮妃、藤堂鐙子さん、などが筆頭だつた。丁度其時分私の實父――西村茂樹――が校長だつた。

「ホントーニ西村さんのお父樣なの、校長さんは、だつてあんまりおぢいさんなんですもの」

とはこの方々の口から洩れた詞だつた。

このお仲間でひそかに節子姫をよそながら見上げてゐた。すると或時私は、お晝休みにならうとするかねの音で勇み立つた小さい方達がまるで蜘蛛の子をちらすやうに、丁度その時間が御習字の時間であつたと見え、手に〳〵眞黑く墨の付いた筆を手に、洗面所へと急ぐ所にぶつかつた。

その頃の校舍は、あの永田町に建つてあつた煉瓦作りのかなり新式で立派な校舍であつたが、まだ洗面所の設備などは幼稚で、筆を洗ふ所は大きい四角な横廣の箱の樣なものに水がたまつてゐて、これでも蛇口からねぢて水が出る樣になつてゐた。こゝが洗面所でもあり、又筆洗ひ場にもなつてゐて、今の樣に何處にでもある樣な洗面器はなかつた。それで、その蛇口の水を出すと、木製の流しの上で筆や何かを洗ふのだ。代る〳〵小さい姫達は筆を洗ひ〳〵して備へつけの手拭でふく。幼い人たちの御手ぎわで、よく筆をしぼらないでふき〳〵する――手拭は見る間に眞黑になつてしづくが垂れさうになつた。最後に近く節子姫が居られた。手を洗ひながらこの有樣を何氣なく見てゐた自分も「まあ、大變だ、あんなにぐしや〳〵になつてしまつては、折角洗つても筆をふく事が御出來になるまい。どうかして上げたい――例の子供好きの自分はだまつてゐられない氣がしてしきりに自分の袂を探ねた。すると、急に九條さんの聲がした。

「皆さんその手拭はグシヤ〳〵でだめ、これでおふき遊ばせ」

かういはれると、何の躊躇もなく、此幼い果斷な姫君は御自分の袂から紋入縮緬の目の覺める樣な襦袢の袖を出された。マアと驚く間もなく幼い御友だちの姫君達、勿體ないとも思はれない應揚さで、

「それでは皆さん御一しよにふきませう」

かういふが否、代る〳〵ふく筆のしづくに、この美しい御襦袢の袖も、亦さらしの手拭以上に黑くなつてしまつた。少しあつけにとれてゐた私も、もうだまつてゐられない。

「まあ大變、それではお袖が――御召の御袖までたまらない、さあ」

といつて、どうにかかうにか御世話して御上げしたこと。

或時は又、此校での一大儀式――卒業式の時、たしか七月十何日かと覺えてゐる。私たちの居る頃には、前にもいつた樣に照憲皇太后陛下が、此時には必ず行啓があり、一級の優等生にはそれ〴〵賞與をさへ賜つた。私も一度は此光榮に浴した。そして言海――國語辭典をたまはつた。

この式の日、もう陛下が成らせられる間もなく、それ〴〵奉迎の場所に行くべく、校庭を過ぎて表門の方へ急いだ。するとむかふの校門とは反對の方へ、九條節子姫がしきりに何か袖の方をおさへ〳〵行かれる姿が見えた。どうも御容子が變だ。おせつかいの私はいそいでその方へ走つた。幼なかつた姫にのろい私の足もぢき追ひついた。

「どう遊ばしましたの？」

「これ、こんなになつちやつたの！」

見ると、蘇黃と紫のあけぼの染に美事な寶づくしのぬい模樣の御袖は無慘に袖付のところから横にさけてゐた。

「あたし、おくれるとおもつていそいでかけたら、お袖の中に靴がはいつて――」

あゝ、と私はうなづけて、「サア、それでは御つきのところへ行つてぬつて貰ふ事にしませう、サア――」といふなり、もう時間の迫るのを氣にしながら、お手を助けて、御つきの待合ひ――裏門のところへ急いだ。

「またこんなに遊ばしまして――」と日頃からおいたの――はかういふお召の怪我が多いと見え、さういふお付きをせきたてゝ、ほころびをつくろはしてお上げしたこともあつた。

醸つてこれから前條の幼物語りにうつらう。その時分の私の家庭の有樣は、私のおばあ樣――お樂とよび輕子橋といふ――築地邊は埋立地だつた爲に橋が多かつた――その邊にごく瀟洒な隱宅をかまへ、女中一人と勝治さんの

遺兒龍之助（後に勝治）と三人で住はれてゐた。お風呂だけはすぐ近くの本宅からそのつど〳〵、第一番におむかへにいつてははいられた。いつもおみやけがあるそれがたのしみで、よく代る〳〵おむかへに行つた。まだ妹が小さかつたので大低は私と女中が行つた。

龍之助の弟直二といふのは、平助――これは勝治のすぐ兄、父の下から二番目の弟――も引取られてゐた。次の信二といふのがまだ小さかつたので、是はたしか秋本のおばあさんといつた――此信二の母の養母にあたる人の家に居た。そして品川の伯父の世話で靴商となり、病弱で夭折してしまつた。

私の家は此おばあ樣を第一に、兩親、金治――現在の一彰、よし江、すみ子、外にお琴さん、おとせさん、總領の兄は此時分もう何處か寄宿にはいつてゐたらしく日曜毎に見えるだけ、幼い心の自分の目にも何だか男らしくない柔らかものをきてゐるのがいやだつた――

その外謙吉といふ――幼少から西村勝三、伊勢勝といふ家號だつた――伯父に養はれて後繼となつてゐた――

その兄が私のいくつ位の時だつたか一頃かの異人館に泊つてゐた事がある。

何でも親達――養父母――のいふ事をきかないとかいふのらしい、當分その二階でごろ〳〵してゐた。そして偶に洋服をきて出ると途中でかわいさうな乞食にあひ、寒さにふるへてゐたので、その仕立ておろしの外套にお辨當までつけてやり、大變母にしかられてゐた事を覺えてゐる。何でもライラク豪膽な人であつた。偶々私がそこへ行くと、大きな〳〵文字が筆太に壁間にかいてある、「人間到處在青山」とかいふ樣な詩などをかいて――

それから間もなく此兄は洋行した樣に覺えてゐる。元來此兄は非常な傑物であつて、此洋行後も度々叔父たちのいふ通りの學問をしないといつて、とう〳〵學資の支給を止められ、活版所の一職工となつてパンに水のみの窮迫

した生活を送つてゐたさうだ。

もうその自分向島の家へ移つてゐた。その近所に品川の伯父が經營してゐた皮革會社の大きな工場があつて、大きな桶がいくつもいくつも並んで、丁度あの染物やの藍瓶のやうに臭い〳〵汁の湯を沸してゐた。何でも聞いて見ると、これが何か製皮に必要な藥品を入れて、皮をなめす下地になるものださうな。

その工場の一隅に――隅田川に面して外面は石造で土藏造りの家に叔父の本妻おのぶさんといふのが住み、其すぐ側にもとこの皮革業の教師であつた――伯父が洋行した時つれて來た外人の住居がもう明いてゐたので、そこにこの謙吉兄が住んでゐた。そして、洋行幾年後の此謙吉兄が獨逸人の夫人――失名とすんでゐた。大柄な、それでも容貌は決して醜くない。つとめて日本式にならうとおとなしい。しかし窮屈さうに座つて、お箸も持ちならひ、おじぎと、「さやうなら」「ありがたう」と、片言にいひ慣らされた、いかにもいぢらしい外國婦人を見たのは、その頃はもう十八九になつてゐた。私はこの兄一人を頼りに萬里の波濤をこえて、異境のものなれない親達や、親戚の好奇的な眼差の中に、しひて夫の機嫌にかなはうと努力してゐる有樣を見聞きしては、兄につれさう人といふ以上憐憫と同情を覺えた。

兄を通辨にしていろ〳〵とやさしく物語るこちらの心持ちは、國境のない人情の美はしさがある。「よし江さんありがたう」と大きな碧い眼でなつかしさうに見上げる眼差しは決して憎めないものであつた。しかしこの伉儷はつひにその終りを完くする事が出來ず、いたましくも彼女が遂に海外に去つたといふ事もたゞ人傳に聞いたばかりであつた。

その後數年、この向島に大出水があつた時、もういよ〳〵土堤が切れる、切れたら半鐘を打ちますからそのつもりで――とふれて歩く村人の姿は、私の胸をとゞろかした。

丁度其夏はめづらしい雨つゞきであつた。この頃どうしたのか、手洗ひのしみこみが一寸も水を引かないで、かへつてしみこみ處からブク〳〵水が出る――變な事があるものだネー、かういつて母が怪しんだ。

私が丁度十八九の夏だと覺えてゐる。

すると間もなくふりつゞく長雨に、「どうも土手が危ない、もう權現堂が切れたら大變だ」

かういつて村人が騒ぎ、宅でも父はじめ皆がこの噂で持ち切つた。

あゝ又雨だ！

かういつては皆が空を見上げて吐息をはく。傍らにまだ若かつた自分は、まだその恐ろしさを體驗しない呑氣さで、さのみ恐怖を感じないでゐた。すると、丁度それはやはり雨雲の低く暗澹たる夕暮れであつた。

ふと私たちは往來の方でピシヤ〳〵〳〵といふ聞きなれない物音を聞いた。

「オヤ！」

といひながら自分は二階に上つて往來を見やうとした。するともう門口の方から誰だかゞ「アヽ、水が來た、大變だ〳〵」といふ聲がした。間もなく二階から父の聲で

「此往來にもう水が來た、しかし土手が切れたのではなさゝうだ、半鐘が鳴らないから」

かういふ父の聲と共に大勢の聲が門前に聞え、この時分はもう獨身になつて事業に精進してゐた謙吉兄が、大勢の職工をつれて駈けつけて來た。勇ましい軍服で――兄は豫備少尉だつた――

「謙ちやん、大變、水が來たの、そこまで」

「ナーニ大丈夫、櫻組の職工總出で來ればこの家なんぞ土臺ごと持ち上げてしまへる、心配する事はない、安心しなさい」

といふと、すぐ職工たちをさしまねいて

「サア皆手廻しのいゝ樣にそのキヤタツを並べて疊を上げてしまへ、そしてすぐ賄ひに云つて焚出しの用意をさせろ、香の物を忘れないやうに」

そして更に、小舟の用意まで命じて——。

かうして小勢であつた私の家には、些さかの不自由もなかつた。否近隣までその恩惠は行きわたつた。

此時分向島の櫻組といへば、ほとんど土手繁榮の基を一手に集めて、車夫、掛茶屋皆其の餘慶にあづからないものはなかつた。もうその時分から病弱であつた伯父の社長は、單にその大本を握るだけで、ほとんど全權は兄謙吉に歸し、又實力ある支配人であつた。

土手に客待ち車夫の、掛茶屋の婆新聞賣り——皆この義俠的の兄が博愛の手に惠まれないものはなかつた。

私はしみ〴〵此兄の力づよさと、義俠的な氣持ちを讃美せざるを得なかつた。私がこの兄を兄として見たのはそれから數年後、丁度あの向島の大出水のあつた二三年前の事であつた。

「親のいふ事を聞かないから學費は送れない」

「養家への義理があるからこちらからかまふ事は出來ない」

何でもかういふ士氣質の見解からであらう。間もなくどういふ工夫したか、歸朝したといふ噂のみで歡迎の事さ

へなく、此兄は淋しく故國に歸つた。

同じ根に生ひ出でながらはふ蔦の
分るゝ君ぞかなしかりける

かうよんで、向島に繼母と同棲してゐた此兄に送つた事があつた。これには兄の返歌があつたのを、嫁して北海道にいつた間に紛失したのはいかにも遺憾にたへない。歌の心は何でも「蔦かへで色さま〴〵に異るとも心はいかで別れはつべき」といふ樣に覺えてゐる。

かうして私の心は不絶この不遇にして容れらざる兄に同情してゐた。兄も又私を只一人の妹の樣にいとほしみ愛してくれた。

其後の兄は、此頃は三十に二つ位前で、白皙美丈夫で、實にわれ〳〵兄弟の中に容貌も天稟もすぐれてゐた。目の少し出目の大きい赤い唇、白く廣い額、果敢らしく引締つた口元、中肉中背の瀟洒たる風采であつた。

外國で健康診斷をして貰つたら、奥齒が一枚蟲くつてゐる、其外は健康無比だといふ證明書だ——かういつてその健康らしい白い齒並をあらはに打ち笑つた事もある。

かうしてお互に義理の爲、公然と親兄弟が打とけてあふ機會のないのを悲しんでゐた私を憐れんでか、とう〳〵機會は來た。しかしそれは私にとつて最も忘れ難く悲しい——大事な祖母上——かの賢明な——の臨終の時であつた。

それは丁度私の十九の厄年——たしか華族女學校を卒業した其の夏の樣に覺えてゐる。若い時から胃弱で、めまひをひどくされる癖のあつた此祖母は、始終衛生に注意されたこれも亦賢明であつた彼女の一面でなければならな

い――それはまだ十三四だつたと思はれる或朝早く、祖母ははなれの隠居所からいそぎ足に出て來られた。そしてもう登校しやうと包みを抱へてゐる私に、

「よつちやん、お前ならもうものゝ道理がよくわかるから、聞いてもらへると思つてはなすのだが、今一寸おかあさんにいつて見たが――ゆうべ新聞を見ると、或おいしやのはなしで、大變銅なべの害があるといふ事を書いてある――お父様はふだんから胃が弱いお人なのだからそんな害のあるもので煮たものはあげたくない。どうか銅なべは皆拂つてしまつてゞも鐵のものに取りかへたい」かう思つておかあさんにはなしたが、中々のみ込めないやうだ、どう思ふかい、よつちやん」

かういつて熱心に語つた祖母は、しきりに私の答へを待つた。

「おばあ様、それはほんとうにおばあ様のおつしやる通りです。からだにさわるものなぞ、むだゞなんていつてゐられません、早速とりかへる方がいゝと思ひますわ」

かういひ切ると非常によろこんだ祖母は、

「それではお父さんにもいつて――どういふ交渉があつたか學校から歸ると、その祖母の提言はいれられ、父の食膳に供するものは銅を全廢した。

今考へると、やはり父を育てた賢母として時代を超越したところのあつたこの祖母は、自身の健康についてもよく新智識を入れた。

「ソレ新聞に鳩麥の効力が出てゐた」

すぐ翌日は買ひ求めてあの甘くない汁をのまされ、上句にはその煮た――實がはぜでグシヤ〳〵になつた――それに鹽と砂糖の少量を加へてたべてさへしまはれた。私もこの御招伴をして、あまり甘くはないが、まづくもないと思つた。

今ふと床の間を見て嫺熟たる菊の盛りなのを見て、此祖母の衛生に對する力行の一面として、此菊花栽培について、非常に努力された事も思ひ出される。それは嗜味からでもあらうが、早くから腰の曲つた痩せたからだを折々手をあてゝはのし上りながら、毎年々々此菊造りに熱中され、何でもおばあ様のおつしやることは、泣きながらでも聞かなければならなやうに馴らされてゐて、自分は此菊造りにも中々骨を折つた。一番困つた事は、まだ菊の葉が出たばかり――の二葉の時非常に油蟲につかれる事であつた。ビツシリとすき間もなく葉の裏から表へかけて、その黒くついてゐる油蟲――その一つ〳〵を丁寧に掌にうけて煙草の葉の煮汁を太い筆へつけては一枚一枚丁寧にこすつてはとり〳〵する。其あとから祖母が一枚一枚點檢する。少しのおこたりも見のがさない――この爲に、私の指の先は茶褐色に染つて、學校へ行つても「アラ西村さんの指はどうしたの、變な色なのネ、そして煙草くさいわ」かういはれるのが何よりもいやだつた。

けれど、かうして毎日々々の努力は報ひられて、秋になつては見事な菊の花がそろ〳〵蕾を持ちかける樣になると、あの市松の油障子がかけられ、むだ花をすぐつみて、何々と立札をする樣になると、流石に樂しみでない事もなかつた。

いよ〳〵爛熟と咲き誇る頃になると、祖母の懇意の人たちが招待される。

熊谷のお貞さん――この人は年頃少し祖母より若かつたらしい、大柄の半白の――多い髪の毛を切下げに、色の

白い柔和な、いつも大きい信玄袋――その頃はかういふ袋はあまり持つ人がなかつたので目についた――を手に、細い姿の――この人は腰が曲つてゐなかつた――

近藤のおばあさん、名は忘れた――色の黒い薄痘痕のある、小柄な、いぢのわるいといふ評判のおばあさん

大澤のおもよさん――皮革會社の社員――大澤省三氏夫人

八太のおばあさん――此人は商人に似合はないガッシリした體軀の持主で、容貌もひどくこわい――色黒く、痘痕があり、つよく釣り上つた眼、武張つた口許、平顏のこわい容貌で、シャンと座蒲團の上へ端座した樣子は子供などは一寸近づき難い風貌であつた。蔭では皆鬼婆さん〳〵といつてゐた。それを聞きかぢつた私は、或時このおばさんの爲、何か宅で御招きした事があつた「もうあのおばさんがいらつしやればすぐ御飯になる――」

夕方の空腹をかゝへて食慾の盛んであつた自分は、もう待ちかねて〳〵幾度も〳〵玄關に駈け出したがなか〳〵見えない。あぐねはてゝもう不平滿々でゐた自分の耳に、間ちがひなく例の齒のついた低い下駄の音を聞いた。

「おかあさま、とう〳〵鬼婆さんがいらつしやいましたよ」

いきなり母の手は私の二の腕を抓つた。驚いた自分は、流石にこの言葉がわるかつたな――と氣が付いた。

それを辯解する間もなくもうそこに――襖の外にその錆びた太い聲がきこえた。

「ソレツ」といはんばかり母は私を押しのけるやうに襖の外へ出た。

かういふ御連中――祖母の御客樣――の對手は大抵私がする事に成つてゐた。人づきあひの嫌ひな――讀書癖のあつた私には是もつらいお役目の一つだつた。

しかし此祖母も、父の母であるだけ此時代の人に似氣ない讀書ずきで、よく軍談もの――昔からいつた――を好

んだ。新聞なども日本新聞たしか陸實といふ人が社長だつた樣に覺えてゐる――其當時この日本新聞は今小川平吉氏の經營される一新聞の樣にやはり新聞紙中の異彩であつた。其時分外國に對する態度の柔軟なのを軟派といひ硬直なのを硬派といつた。そして、貴族院に於ける此兩派は常に對抗して相讓らなかつた。無論文は硬派で谷干城子曾我祐準子と相結んで國是に付てカン〳〵ガク〳〵の議を戰はした。

祖母は自分の敬愛する長子の味方であるかの如く此「日本」を愛讀した。そして、時には政事を論じて倦む事がなかつた。その相手は大抵私で、いよ〳〵分らなくなると父の歸宅を待つてその可否を聞かして貰つた。けれど父も亦なか〳〵暇がなかつた。

貴族院議員に勅選されてからは、未知の法律書及び基督教についてさへ研鑽を怠らなかつた。事の可否を通ずるには深く知り深く究めなければならない――かういふ信念のもとに父の研學は孜々として續けられた。

かくして宗教について深く考察してゐた父は、數年後學士會院に於ける基督教抗擊の基礎を作つたのだ。

この宗教抗擊の演說はかなり力づよく其道を奉ずるものを激昂させたと見へ、それから間もなく一つの出來事は若かゝつた私をどれほど驚ろかしたらう。

（此年代再調の要あり）

或朝の事であつた。例になく早い訪問客が玄關を訪れた。何氣なく登校の用意をしてゐた私の耳を、やがて破る樣に大きな怒聲が聞えた。

かなりゐてこの憎いお客は歸つた。

「お父樣、何だつてあんなにだまつてゐちつしやつたの？　議論におまけになりましたの？　ほんとうに私、どん

なにくやしく、心配したかしれません。お客の聲ばかりして、お父様のお聲はちつともしないのですもの」

かういふ私は涙ぐんでさへゐた。

「そうか、心配させたな、しかし心配する事はない、お父様は決して負けたのではない、あんなに夢中におこつてゐる人にさからつて、何を言つたとて決して耳に入りはしないもう少したつと、又おれは演說をする、その時きつとあの男も聞きに來るだらう。その時はよほどおちついて耳にも入るだらう。お前にはまだわかるまい、安心しろ〳〵」

かういはれる。其慈顏には些の憤りの氣はひさへない。あゝさうなのか——全ては了解出來ないながら、この大きな父の心はわかつた樣な氣がした。

この宗教家は何でも巖本善治氏であつた樣に覺えてゐる。

かうして、何よりの話相手であつた此祖母と孫の間には、普通の親しみを越えた理解と同情があつた。或時などはあまり本をよむにのみ熱中して家事を手傳はないといふ怒りから、「本を讀むなら御飯をたべさせない」かういつて激怒した母に對して——今考へれば不孝な反抗であつた——「よう御座います御飯はいたゞかないでも——」かういつて一日一食も攝らなかつた。

偶然の機會から此事を聞いた祖母は、あはたゞしくその曲つた小腰を早めて隱居所から來た。

「お千賀〳〵、まあ何だつてよつちやんに御飯をたべさせないのだえ、何かわるい事でもすればとにかく、本をよむから御飯を食べさせないなんて、何といふかわいさうな事をおしだね——」

かなり興奮して聲高にいふ聲は、不相變本をよみふけつてゐた自分の耳にも響いた。

「あゝおばあ樣がとう〳〵聞きつけていらつしやつたな」

かう考へた私の心にはホツとした樣な安心を覺えた。何といふ剛情な、そしておばあ樣に或期待を持つて我を張つてゐた憎らしい娘であつたらう。

かうして漸く私は御飯にありつけたのであつた。

「よつちやんは顏の色がわるい、玉子でも牛乳でも澤山たべさして色がよくなるやうに」

といはれたのも此祖母だつた。或時などは母から聞いた長兄——源之助といつた、年少から俊才で、父が「これはおれの跡取にしてわずかの錄をつがせるのはかわいさうだ、勘當してやらう」とかういはれたさうだ。その事を祖母の里方の母——この人はなか〳〵の賢夫人であつたらしい——が聞いて、西村かなへさんは流石素晴らしい人だ、かわいさうだから勘當するとはえらい、さうすれば他藩へ行つて何千石を取る傑物に成れるから——かういつて感歎されたさうだ。

果せるかな此長兄は十四歳で開成所の世話取締に成り白銀二十枚を賜つたさうだ。當時母は其事を當人の口から聞いても本氣に出來なかつたさうだが、やがて間もなく御使者が見へ、其白銀と辭令ともいふべき書付けが屆き、つゞいて多勢の年輩の人があとから〳〵見へ、其人の口から「是から源之助さんの御世話になりますから、どうかよろしく」といふ詞をきいて、初めてその事が事實であつたのだとしれ驚喜したといふ事、その兄がいつも極小食で「朝飯を澤山食ふと記憶がわるくなる」かういつて大抵は朝ほんの少量か或は全く朝食ぬきで勉強した。といふ逸事を母から聞いて、自分もさうしやうと朝飯ぬきで登校した。すると偶然だつたか其朝の授業は好成績だつた。それからほとんど二食主義ですましてゐると、これもとう〳〵祖母に見つけ出された。

「まあよつちやん、おまへは源之助のまねをして朝御飯を食べないさうだね、源之助はすぐれた子だつたけれど、長生きでもする事か、わずか十八で死んでしまつた、それは二食だつたからではないにしろ、お前はよわいのにそんなまねをするとは何事です。いくら學問ばかり出來たつて、弱くなつてはどうします。さあ〳〵おつけに早く生玉子でもおとして――」

とかういひ〳〵登校に氣忙しい私を引き止めてむりにも養生をさせたがつた祖母だつた。

此時代の、たゞ家庭的にのみ育て上げる主義の中で、この祖母の學問に對する理解と、衛生に對する注意は、この剛情な孫をも屈伏させずにはおかなかつた。誠に剛にして柔、聰明にして慈愛の深い人であつたとしみ〴〵今も考へさせられる。しかしこの祖母にも亦私はどうしても一致出來ない論旨があつた。それは家康對秀吉の事であつた。

封建時代の倍臣の家に生れかつ嫁いだ此祖母は、天資聰明であつたとは云へ單に私が德川家康を呼びすてにするのさへ憤慨した。「なんだネーお前は、いくら世の中が變つたつて勿體ない、東照宮樣の事を德川家康だつて、ほんとに〳〵呆れてしまふ、サアこゝへ來てちやんと東照宮樣が――と云ひ直しておくれ」

かういつて憤慨すればする程私は尙不平だつた。

「おばあ樣は何でもかでも東照宮樣のなすつた事できへあれば、よくてもわるくてもいゝとお思ひになるからいやだ。私ける學校で大阪落城のおはなしを小田先生に伺ひました。そして、先生もしきりに家康がいくら天下を一定しやうとしたにしろ、大阪の落城には同意出來ない」とおつしやつて、いろ〳〵その奸策についておはなしがありました。つまり天下を取るためにはいかなる殘酷さをも忍んでした奸物なんです。表には柔和を裝ひおなかの底に

は……」

祖母は顏色をかへた。

「何ですつて、假にも學校の先生ともあらう人が、こんな年も行かないものに、そんな大それた事をいつて敎へるとは――お父樣にいはなければならない――」

血相を變へてそのまゝだまり込んだ祖母は父の歸るのを今やおそしと待ちかまへてゐた。

「いくらお父樣だつておばあ樣の味方にはおなりになれない、どうしたつて家康はにくらしい秀賴はかわいさうだ」

（何といつてお父樣はおばあ樣にとき聞かして下さるだらう。いゝ、わるいはもうわかり切つてゐるのだもの。）

かう思つて自分も亦玄關に響くであらう馬丁の先拂ひの音に耳を立てゝゐた。

今の人とちがひ、父は朝「何時に戻る」かういはれたが最後その時に多少の差はあつても何十分といふちがひはなく、果して此日もその豫定の通り憂々と樂地川に響く馬蹄の音と共に、馬丁の勇ましい「エオーッ」といふかげ聲がした。――今はおそらく若い人はしらないであらう。此かけ聲は、なか〳〵勇ましい江戸つ子らしいものであつた――紺の香新らしい法被の裾を一寸捲りあげて――定紋は純銀の五ツ松皮菱のついた――キツチリした股引をはき、素晴らしい銀側の時計をさげ――かうして父が歸られる後からついていつた自分は、着かへるのを待つてゐられなかつた。

祖母も同じ心せきに、やはり同じ時に居間に出て來た。

「ハヽア又やつたな！」

かう內心に早くも悟られたであらう父は、不相變ゆつくりときかへにかゝつた。その世話はいつも私であつた。

上着をぬがせる、すぐ着物をきせかけ、ズボンはそのまゝで足をなげ出す、靴下スボン下も一しよに引つぱつてぬがせる。足袋だけは自分ではき、帶をしめる、いつもかういふ順序だ。七八ツ頃の私はいつもこの靴下から何から一しようにスボンを引張りながら後ろへ引つくりかへる——かうして鞠のやうに、コロンところげるのが此謹嚴な父を笑はせ、それがむやみに面白かつた。——

十年一日の如く今日も亦その通りの順序に着がへを終つた。

「おとうさま、一寸聞いていたゞきたい事が御座いますの」

「ウン、まあ茶でも飲ましてくれ、おばあ樣もお待ちかねの御樣子だ、サア一しよにあつちへお出で」

かういつたまゝサッサと茶の間へ行く父は決して片口のみを聞かうとはしなかつた。

「アノネお父さま」といふ私を制して、

「又おばあ樣との御はなしだらう、それならばおばあ樣のおはなしを承つてからだ」

かういふなり父は祖母の方へ膝を向け、そして丁寧に、

「又何かよし江が無理を申上げたらしく思はれますが承りませう」

待ちかまへてゐた祖母は、自分に一瞥を與へたまゝはなしの口を切つた——ソレ見ろといはないばかり——一瞬自分は此祖母を憎んだ。

「アノネ、もう〳〵よつちやんにも今日といふ今日は呆れてしまひました。先生も先生だと思ひます、こんなまだ年はも行かないものに、いろ〳〵わるい考へを吹き込んで——」

「ハヽア、それはどういふ事で御座います」

「アノネ、かういふ事なんだよ、何でもけふ學校で大阪合戰の御はなしがあつて、東照宮樣のなすつた事は、自分が天下を取る爲でいかにも秀頼がかわいさうだ、一體家康といふ人は——と、かういふ口をきくのです。そうしてつまりうはべはやさしい顏をして、おなかの中はおそろしい、天下を取る爲!—それがまあ東照宮樣御自身の爲だというのですもの。まあ〳〵いくら世の中が變つたからと云つてむかしだつたら—それは〳〵どんな事になるだらう、罰當りの事だ、一體小田さんといふ先生も先生です。假にも人の子供を敎へる御役目でありながら、まあ何といふ人でせう。かういふ人に御上から敎員など仰せつけるといふのは——」

「イヽエかうなの、おとうまさ」

嚴として父は私の詞を遮つた。

「よし江、貴樣はまだこんな英雄や豪傑ともいふ樣な大きな人物を批評する力はないのだ。いくつだと思ふ。中々このおとうさまにだつてかういふすぐれたお人の事を批評する力はないのだ。今にわかる時が來る——それまでは決しておばあさまに逆らうな、あの天下を平定した大功に對し東照宮樣といふのは當然だ。まだ貴樣には早いのだ」

かういふなり父は祖母に向つてやさしく、

「イヤ不相變よし江の剛情にも困ります。まあ何しろ年が行かないから先生のいふ事ばかり一途にいゝと思ひ込んでしまつたので、おつしやる通り小田さんといふ人も一寸勢にのつて云ひ過たやうにおもへます。大方舊幕の人でないでせう。まあ、お茶でも一ぱいいたゞきませう、さあよし江、お菓子とお茶を賴むぞ」

かういつたまゝ、それきり父は話を他に移して祖母の好むやうな世間ばなしに時を過した。

けれども遂に此祖母にも自覺する時が來た。元來、私の祖母だけあつて「自分がいゝのだ」かう思ふと一歩も讓

らない彼女であつたが、又「是はわるかつた」と覺ると美事に、――丁度竹を割るやうにサツクリと折れるのが此祖母の美點であつた。

この事あつて以後、もう私が十八九にも成つた頃だつたらう。或日華族女學校から歸つて隱居所に「只今」をする私をむかへる時に祖母はいつた。

「アノネよつちやん、お前にあやまらなければならない事が出來ました」

意外に驚き顏の自分を眼鏡越しに見つめる彼女の膝の上には、大きな淺黃色の表紙に「大阪ものがたり」とかいた古い本がおかれてあつた。ある直覺が私の中をかすめた。

「コレダナ」

果して祖母はいつた。

「よつちやん、御前さん覺えてお出かい、あのそれ、いつ頃だつたか、まだ小田先生といふ方に敎へていたゞいてゐた時分――ソウ〳〵小學校でしたつけネ――あのそれ、東照宮樣と太閤樣の御はなし、いゝとか、わるいとか議論をしましたつけ、あのときは、しみ〴〵おばあさんも呆れて、何といふ子だらうと思ひましたが、今日お父樣の蟲干しで字が大きくてよみよささうなので、この大阪ものがかりを借りて見ると、まあどうだらう、全くよつちやんの怒るのもむりがない、どうしてまああんな事を遊ばしたかと思ふ位、あはれで〳〵、あんなに迄なさらないでも――と、あたしでさへ涙がこぼれてなりませんでした。全くお前のおこるのもむりはない、まあ是もいつ又お父樣に伺つて、なぜ東照宮樣があんな無慘な事を遊ばしたか聞いて見なければならない。まだ此「おれんものがたり」といふのもあります。是も定めしあはれなものでせう。やつぱり落城の時のありさまを此おれんといふ人がか

いたものらしいが」

かういつて傍の一冊をしめした。

「さうでせう。おばあ樣、全くかわいさうでたまりますまい。けれど全くおとうさまのおつしやつた通り、私もあの時よりいろ〳〵の事も聞き、又考へも少しかわりました。何しろ、人のする事ですもの、英雄や豪傑を道德家と一つに考へたのは、私がまだ他の事を知らなかつたせいです。あの時よりは私も分つたつもりなの、兩方でわかつてよう御座いましたわネ。おばあ樣が御あやまりになる事はないわ、やつぱりお父樣のおつしやつた通り、私はあの時年が小さすぎたので御座いますわ。」

「オヽ〳〵よつちやん、よくわかつておくれだね、ほんとうに年はあらそへないものだね――」

かういつて心からなごやかに喜んだ祖母も私の十九の歲に亡くなられたのだ。

此時――此時こそと私は前に記してある――謙吉兄を公然と兩親の家に請じて祖母の靈前に久しぶりの對面をさせ、われ〳〵も晴れて兄弟の交りを復活させる事が出來たのだ。

これからあとしばらくこの兄との交りは樂しかつた。何しろ、長兄の一彰は××の鑛山に勤めてゐるし、姉のない自分に取つては何よりの力でもあり、親しさであつた。

或時此兄がブラジルに行き、今の皮革會社の製皮の原料を仕入れる談判を、其膽力と、技量とにより、誰も至難の事として指を染める事の出來なかつた其土人と交渉して、遂に成功をかち得、遂に皮革會社をして原料缺乏の窮地から救ひ得た事さへあつた。

その時代のブラジルは、赤毛布の眞中に、頭の出るだけの穴を丸くあけ、それをきて行くのださうだ。そして宿屋といふのは絶對になかつた。此地方では、客があれば、先に吊したアンベラ樣なものゝ中にやすませる――この難行がまづ他國人には忍べなかつたのだ。

兄はこの苦行にさへたへた。そして、材料輸入の根底を作り、かの日露戰役の當時、陸軍省の註文らしい御用のランドセル等の需用に些の澁滯をつげしめなかつた事は、偏へに此兄の賜でなければならない。

皮革會社は國難に處して貢献する處多大であつた。と同時に其利する處も甚大であつた。聞くところによると此日露戰役後、會社は積年の借財を返還し、尙增資する等一再ではなかつたさうである。

此兄のブラジル歸朝の時、「よし江さんへ」といつて、マニラの古金貨を――銀貨を妹のすみ子に送られた。妹を熱愛してゐた、母は激怒した。

「ナンダネ、金と銀とはまるで一しよにならない、こんな兄弟に片手落ちのおみやげはもう持つて來ないがいゝ」

撫然として兄は一言も發しなかつた。そしてそれぎり姉妹にみやげ物といふものはもつて來なかつた。たゞ私にだまつて貯金帳の入金をふやしてくれた。私たちの貯金は當時利のよかつたゝめ皮革會社にあづけてあつた。

初雪

――(明治三十年日記)――

十一月五日　金曜日　雨

今朝胸部痛むこと甚だし。よりて午前十時迄臥床後起きた。

朝食は大根のお汁おさつを食す。晝飯は青ゑんどう。

精一郎様雨故御在宅。

廿圓受取内二圓さだに返す。但し小さきものなかりしゆへかりおきたるなり。

安積へ日記及御機嫌伺ひを出す。

夜謠をうたふ。

午後九時就床、夕飯は青豆にねぎのおつゆ。

十一月六日　土曜日　雨

今朝八時におき出づ。

朝飯は大根のお汁、海苔青豆少し

精一郎様御在宅。

今朝より寒氣甚だしおきごたつをかけあたる。

安積へ今日日記を投函す。

吉富安之助氏及建築學會より端書來る。

朝柿十（十錢）人參（六錢）やきどうふ（四錢）をとり、かき八つを精一郎様と食し二つを下婢に遣す。

晝飯は人參とやきどうふのにつけ。
今日は鷹子殿に俥をやとふ上下。
午後精一郎樣御綿入をぬふ。
煙草（四錢）刻みこんぶ三（一錢二厘）を求む。
升本に御砂糖一斤いひ付く。
夕飯はこんぶ、ねぎのおつゆ、切漬の香の物。
省吾樣にお小遣壹圓さし上ぐ。
吉富氏より端書來る。
夜謠をうたふ、態野忠慶等。
大に二葉會廻狀を尋ぬ、なし。
午後九時就床。

十一月七日　日曜日　快晴

午前七時過起き出づ。
朝飯はお葉のお汁、にんじんのゝこり。
今日は天氣よければ向島に母上をとひ參らせんと午前十時出で立つ。
朝省吾樣に御食費一圓と下島氏への四圓を托す。出がけ鷹子樣に菓子代十錢さし上ぐ。

向島へみやげにとて吾妻橋際にて一錢五厘の柿二十個求む。
上野へ立ちより白馬會を見る。
衣類は牡丹黑地の長襦袢に鼠地に紅葉のかたをそめ出したる半襟かけしを着し、上着はよけ縞もくめがた小紋縮緬下着にやがすりの小紋縮緬をかさね海老色の繻子の丸帶をしめ黑縮緬三つ紋の羽織に吾妻コートを着す。髪は束髪に星形ふさ付きの金のかんざしをさす。
向島へいたれば折からに晝飯にて母上もすみ子も食事中なりき。カステーラ柿など食しおるうち晝食出づ。うなぎめしにさしみ口取（きんとんかまぼこあはびの甘煮）香の物（お葉、大根、奈良漬きうり）
下の者二人へ柿二つづゝ遣す。
疊がへにて大騷ぎなりしゆへ、はなれの方にゆきてくさ〴〵の物語をもなし、夕飯はあんばいの御飯、オムレツ青豆等なり、オムレツを初めて食したる味思ひの外よかりしもしつこき氣味にて少しほか食する能はず。午後五時少し前かへる。土手のつきなんとするところ迄歩行し、枕橋より車にのる。今日は職業學校生のボートレースありき。それより上野迄ゆき、又車にのりうつり、本郷竹町の若竹亭に至り淨瑠璃をきゝ、本郷の勸工場にて鷹子樣御注文の卷紙（松島の景色の物九錢）を求め、それより又車にて歸る。
向島よりカステーラ餅菓子、及太陽三冊かり來る。謠本も一冊先日たてかへおき給はりし藥代一圓卅錢自分の內より出し御返しす。歸れば八時なりき。それより寢ぬ。
留守中婆やの息子來り玉子折（十五入）一箱持來る婆や不快のよし。
山田敬三氏來る。

山田兼長氏より端書來る。
安積父上様よりも御手紙來る。

十一月八日　月曜日　快晴

午前七時過おき出づ。
朝精一郎様吉富氏へ「ヨルユク」といふ電報を鷹子様に御頼みにて御かけ遊ばさる。
朝飯はにんじん、すいき芋お葉等混じたる御汁畑の人参のにたるもの、青豆きり漬をつけて朝より廻狀をたづぬ尙なし。
精一郎様八時半頃御出かけ正午過御歸り。
よう子殿に襦袢裏袖代五十錢御渡しす。
電信料五錢、唐紙代七錢よう子殿に。
精一郎様甲斐一彦氏三河屋へ御發狀。
よう子殿も安積へ御發信ゆへ精一郎様御書き加へ。
晝飯は朝のお汁の殘り。
精一郎様に牛乳二合玉子二ツ及海苔をやきさしあぐ。お香の物は畠の大根とお葉の漬けたるもの、二つとも（不明）
夕飯は畠のお葉の胡麻あへねぎのおつゆ香の物は晝に同じ、食物今日うまからず。

夕飯後精一郎様吉富氏へ御出で自分時計の修覆をお願ひす。一圓自分の内よりさし上ぐ。
よう子殿に髪をいてふがへしにゆひていただく。
胡麻二合を求む、代四錢四厘。
精一郎様夜十時御歸り自分日記の帳面（四錢）を求め被下、時計は廿錢にて明日中に出來上る筈。直ちに就床。
升本に炭をいひつく。
正午過精一郎様とカステーラ一切、菓子一つを等分して食す。

十一月九日　火曜日　晴天

今朝午前八時出床、精一郎様少し御腹痛、少時にて止む。
午前十時頃地震あり。
朝食は小かぶのお汁、お葉の胡麻あへののこりを食す。柿十錢（十二個）内二つを下婢に遣す、殘餘を兩人で食す。
さつま芋一貫目（八錢五厘）を求む。
魚や來る。さしみ一人前（八錢）のをとり精一郎様めし上る。
晝飯はさしみ、さつま芋の煮付け、大根の莖と軸の漬物を出す。
午後精一郎様御湯にて御身體を御ふきになりて一時過御出かけ。
小田切秀繼様より御端書にて下島氏へ一圓づゝ御送金のこと及御容體、西村よりの土産物到着のよし。

亮藏を御依頼。
父上様より御端書にて古事類苑のこと及利札のこと。午後廻狀を尋ぬるになし。着後にもしや、と思ひて紙屑籠を見しに、底に端書と共に丸められてありき。さながらしはに揉まれてありつれど見出しうれしさ似るものなしや
下島氏の綿入をぬふ。
夕飯はさつま芋、づいき芋のおつゆ。
今日お風呂をわかす。
精一郎様午後十時前御歸り、三十錢のしやぼん一箱、卷紙七錢のを御求め被下。

十一月十二日　金曜日　晴天

午前八時頃起き出づ。
朝飯は御葉のお汁、のりを食す。
九時頃精一郎様御出かけ。
午前より又綿入をぬふ。
晝飯はおつゆのゝこり。
向島母上より來狀、下婢取替可然とのこと。
晝向島よりの退閑雜記及少年世界、封入の包荷物配達にて到着。
精一郎様午後三時過御歸り。

間もなく向島妹より手紙にて父上様御旅行先岡山縣下味野村野崎といへる多額納稅議員の家にて茶席のぬれ椽より御墜ち遊ばし、餘程背骨を御打ちにて家中大騒ぎの由なり。かねてより御風氣の事をこそきづかひしがかゝる異變あらんとはかねておもひきや。手紙未だ中ばにいたらぬに、手ふへる胸おどりておさへんにもおさへがたく覺えず聲をあげて泣きふしたり。されど、かくてあるべきにあらねばそゞろふりおこしてよみゆくにしたがひ漸くさのみの御事にあらぬをしりて心少しやすまりぬればいでや、向島に母上がもととひ參らせん。さすれば御容子もしれなんと萬づの物皆なげすてゝ車いひつくる間もおそしと出で立ち。衣類はお召縮緬花色裏に、あい鼠紅入り友禪の下着をかさね例の黑地牡丹の長襦袢に前記同じの半襟をかけたるを着し、海老色襦子丸帶をしめコートを着しゆく髮はこわれたるいてふがへし。
ゆけば午後五時頃なりき。母上は名倉にお出でにて、名倉氏同伴にて岡山へお出でを願はんとす。名倉氏老體にて行く不能して空しく御歸り、但し粉藥をお貰ひ御歸り。
父上様より御手紙來る。御容體常と餘りお變りなし。母上お出でなき様にとのこと及御氣分、食事等は少しのお變りもなし、されど御痛みのため一寸もお動き遊ばされずとのこと。
隨行員坂田氏より來狀、謝罪及父上様の御容體、之は樋田魯一氏持參せらる。
義二郎來る。明日一番にて先づ義二郎のみ出立の筈。
小石川宅へ電報にてコンヤミナトマルとかく。
父上様フランネルお襦袢をぬふ。
すみ子梅若へ七十賀祝の金子を持ちゆく。金五圓。

途中にて柿を求めかへり皆食す。お饅頭を食す。
精一郎様二の宮氏へお出で。二の宮老人卒中症のよし、途中にて又小石川へ御發電。
オソケレバトマル　と
午後八時精一郎様向島へ御歸宅。
母上精一郎様に氷嚢に、白フランネル大巾二尺お頼み。
午後十一時頃就床、離れの方へ眠る。
精一郎様村瀬氏へ女中とめおきのことを端書にて御申遣し。
今夜は向島へ一泊。
阿部より三圓返す。
安積父上様より御手紙來る。
向島へ吾妻橋際にて柿一錢五厘のを四十錢求めおみやげとす。

十一月十五日　月曜日　晴天

午前七時前起き出づ。
朝飯はすゐきのお汁、里芋のゝこりを食す。
今朝は床に大幅をかゝげ、赤飯を供へ燈火を灯し一同拜禮す。御佛前及不動明王へ供ふ。
午前九時前精一郎様御出かけ。

綿入をぬふ。
午前十時頃下島氏歸らる。大風呂敷を遣し呉れとの御頼みにあふ。
午前九時迄綿入をぬひ終る。よつて車夫をやとひて風呂敷白地金巾自分のを包みて御送りす。車夫の賃十二錢。
魚や來る。さば一尾を求む（十五錢）大切にきり味噌漬とす。
晝飯はおひるのお汁のゝこり里芋、のりを食す。
精一郎様正午過お歸り。牛乳をとり味噌漬のさばをやきてさし上ぐ。
すみ子より端書にて北澤氏より電報ありあんずる事なしと、又坂田氏より追々快く、御食物朝一杯玉子三つ、晝二杯めし上り、端坐御談話御讀書等遊ばさるゝよし及野崎家と坂田氏へ兩人連名にて禮狀さし出すべき旨御注意あり。
向島母上へ發狀。一昨日の禮と二の宮のこと及その葬式に行く時の黒縮緬の衣類御廻し被下度よし申遣す。
夕飯は青豆すゐきのおつゆ。
村瀬氏より端書にて女中は他へ行きしよし來る。
車や拂ひを取りに來る。五十錢。
柿二箇半を食しさつま芋をも食す。
夕飯後精一郎様俵氏へお出かけ、九時過ぎお歸り。
夜筆三本求む（四錢五厘）
下婢に湯錢一五厘遣す。

夜安積への日記をしたゝむ。
省吾様にホヤを買ひていたゞく。代五錢。
精一郎様小原詮吉氏、佐伯惟馨氏、古事類苑編纂事務所へ御發信。
午後九時過就床。

十一月十七日　水曜日　雨　午後止

今朝六時過起き出づ。
朝飯はのり大根のお汁、大根の切漬。
午前九時前精一郎様吉富氏と雨を侵して西村三木男氏へお出で、午前十一時過御歸宅。
晝飯はのり、大根のにつけ、お汁のゝこりを食す。
間もなく精一郎様洋服とおきかへにて御出かけ、一圓御持參。
朝省吾殿に廿錢さし上ぐ。
向島母上より御手紙にて、義二郎よりは未だ手紙不來。下婢は不來も差支へなきよし。
精一郎様御綿入の綿を入る。
さつま芋一貫目を求む（十錢）
升本に味噌及天光砂糖を求む。
夕飯はさつま芋の煮付け、ねぎのおつゆ。

精一郎様御出立につき塵紙二帖（四錢）寶丹（十殘）を求む
午後十時過精一郎様御歸宅。向島へお出で色々お話し、　二の宮氏の悔みにお出で等、
吉富安之助氏より來端。
よう子様幾何學を精一郎様御教へ。
午後十一時就床、それまでよう子殿も御勉强。

十一月十九日　金曜日　朝晴間もなく雨

今朝五時精一郎様上野發一番汽車にて御出發ゆへ四時半におき出づ。
鷹子殿も此時より勉强。
五時精一郎様御出發。
朝飯はお葉のお汁、かぶの葉の漬物、大根とにんじんのゝこりを食す。
五時より又就床、九時に起き出づ。
起き出でゝも何となく物足らぬ心地して淋しきに空さへ曇り初めぬ。汽車におはす内はともあれ、下り給ひてより道のほど三里半もかちにてゆき給ふべきよし承りゐしに、ふりなばいかにこうじ給はん。まして毛布お買求等をかなしさに紛れて氣付かず添ひ參らせざりしゆへいかにとこゝろくるしうおもひみだるゝおりからあなこゝろなくふりいだせしよ。とてもふらんものならば宵よりこそふるべけれ、さるになか〳〵今になりてはとさながらおもひみだるゝあしたふりかし。

午前アートタイプを持參す。代金一圓十錢拂ふ。
晝飯はますとお汁のゝこり
ます七きれ求む（七錢）
精一郎樣御綿入をぬひ初む。
山田〇〇來る。自分の掛物の箱に預かりおきし探幽の掛物を入る又その掛物の天地の切れと軸、經師屋にあちんとおもへばたづねくれと言葉の傲慢不遜なることさながらむかし話しにきゝし大名の言葉もこれにはすぎじとおもはる。本來好ましからぬ人とはおもひしかどかくまでとはおもひきや。たゞあきるゝの外なかりき。自分心おぼへしより未だかゝる傲慢の言葉を聞かず、ましてその身は收稅の屬なりといふに、たとへ位などはかりの物なればともあれ華族共他位あり尊き方々にも言葉をまじへ參らせしも、未だかゝる非禮の言葉をきかず、胸をどりてたへがたし。われかりにも人に無禮を加へらるゝことを不好、いまやかゝることにあひてやるかたなき不平をこの筆にもの す、筆心あらばわが心なぐさめよ。

山田杏の砂糖漬一瓶送る。
夕飯はすゐき芋のおつゆ。
昨日のゝこりの柿一個を食す。
雨天ゆへ鷹子殿に車をやとふ。
午後六時過向島より父上容體書來る。精一郎樣御留守中安積へ御廻し申上る筈ゆへしるしおく。

御容體書うつし。
只今岡山より北澤氏歸京せられ御出被遊候義二郎より御容體書を遣し候間御目にかけ候
野崎客間に御出被遊候ては御氣兼の由にて同じ野崎家構内の室に御移り被遊候よし。

御容體書

十五日

御食事

午前九時　玉子半熟三つ。御飯輕く一椀
午後二時　御體溫　三十七度三分
同九時三十分　三十七度四分
午後御食事　御飯輕く二椀

御便通

午前五時一、午前九時十八分一、午後三時半一、午後九時一
右四度共少量にして御小水色赤し

十六日

御食事

午前十一時十三分　玉子半熟二つ
御飯輕く二椀

午後四時三十五分　玉子半熟一つ
飯二椀

御體溫

午前九時八分　三十七度
午後五時三十五分　三十七度二分

御便通

午前七時一、午前十時半一、午後七時二十分一

御小水色赤し

十五日に御大便無之に付下痢藥二度御用被遊、午後共御通じなく候へば本日（十六日）ヒマシュを醫師に御注文遊し御頓服、右の如く本日は二度大用有之候。

十七日

御熱

午前三時　三十七度一分强

大略右之通り

右の如く申參り候十七日朝北澤氏御出發相成り候よし右一報申上候也。

十九日午後二時五十八分

今夜甚だ寒し置ごたつをおく。

午後八時過就床。

十一月二十日　土曜日　快晴

午後三時過すみ子より端書にて精一郎樣御歸京次第御賴み申上度ことゆへ來るべしと、よつて直ちに車にのりて赴きしに、自分にあらず精一郎樣に用事ありしなりと。そは今日遜治郎歸京の話しに大阪兄上御出での折は、丁度父上の御病狀最もよろしき折にて、それよりはひきつゞき御加減あしく今日あたりは又餘程おわるきよし、それゆへ看護婦をのこし自分は歸京せしよし、そのよしくわしく品川伯父上に御話しせしに、その樣子にては、明日にも東京より赤十字社の醫師を遣すべしとのことなりとぞ。よりて向島母上にも是非御出發の方然るべしと。ゆへにその御相談のため御よび申せしなりと、且母上御心配のあまり、二の宮森永兩醫學士の宅へお出でにて、悉く父上の御病狀につきての意見をおたづねありしに、兩氏とも決して御生命に懸はることなく且僻地に御出でよりも汽車にてゆる〳〵御床のまゝ御歸京、十二分の御手當然るべしとの御說なり、母上には尙も樫村博士の意見を聞かんとおぼしさてこそ精一郎樣をよばせ給ひしなりけれ。

向島へゆく道にて木村信十郎に出會ふ。廿四日より又向島へ執事にすみこむよしなり。

向島へつきしはもはや五時前にて、夕飯かつをの煮付けにて御飯を食し、柿五個を食す。

今夜は一泊の積りにて車夫をかへし小石川へ其よしいふやう申付けたるも、よく〳〵考ふれば今夜もし御歸りあるやもしれずとおもひ且はあまり泊り重りしゆへ夜を侵して歸宅す。時に八時、

行きの車夫に二十七錢拂ふ。

向島へ卅錢車代をおく。（自分の内より）
留守中米やに金二圓拂ふ。
今朝胡麻二合（二錢）五厘切手（十錢）求む。
向島にて金貨十圓を一圓紙幣と取りかへていたゞく。
尙義二郎よりの父上診斷書をうつしおく。

西村茂樹殿病況大略

十一月六日夜第十及十一背柱棘狀突起ヲ打擊セラル其部腫起疼痛アルノ他腰部ノ筋及直腸筋等運動ノ爲疼痛アリ然レドモ骨折脫臼ナク背髓及背膜等ニ變狀アルノ徵候ヲ認メズ、又今日ニ至ル迄發熱ナク精神又常ニ異ナラズ食慾平常ヨリ少シク振ハザルモ亦大イニ減少セズ。
要スルニ豫後佳良ニシテ大ニ心配スルニ不及ト目下診定致候。

主任醫　高畑雄平

十一月十四日

お風呂を湧かす。精一郎樣御歸宅未だなきゆへ御先に入る。
午後十時前御無事御歸宅。五色煎餅のお土產あり。少し食す。
午後十一時就床。

十一月廿二日　月曜日　晴

午前八時起き出づ。
朝飯はかぶのお汁、かぶのかうじ漬、かぶの葉の漬物、さけ少しを食す。
精一郎樣廿日御差出しの郵便（端書）今朝着、廿一日御歸宅のこと及御宿所、向島の容子次第發電すべきやう等なり。
今一通停車場着の時直にお出しの端書は未だ不着。
午前十時頃精一郎樣御出かけ、午後一時過御歸り。車代のたし一錢出す。
晝飯はさけのやきたるの、こぶのにつけ、お葉の漬物、かうじ漬のかぶを食す。お汁をも。
午前さだに一錢三厘のこんぶ五つと鮭十切れを魚勝よりもとむ。
午後さだに鷹子殿御羽織のすがぬひをもたせやる。次手に靑豆一升（十八錢）玉ねぎ（五錢）求む。
とうふ（二錢）求む。
本田龍助氏より端書にて岡山父上の容體及十五日に夫人及お子供無事御歸國のよし及植木やのこと。向島すみ子より端書にて廿四日には着がへ二人共持參すべき旨及赤十字社醫師昨夜出發岡山へ向ひしよし。
夕飯はこんぶくずかけとうふのおつゆ。
夜精一郎樣本田、向島へ御發信、向島へは端書。（不明）のこと、父上樣のこと、廿四日にお出でのよし。
すきがへし三帖（九錢）
ぢいや來り明日仕事に來るべきよしをいひ直ちに歸る。

夕飯後精一郎様本郷へお出で午後九時御歸宅。
伊藤氏不在なりしよし、直に就床。

十一月廿三日　火曜日　曇　新嘗祭

午前十時起き出づ。二度眠りしより大にねぼうす。
朝飯はつまみ菜のお汁、お葉の漬物、こんぶを食す。鮭も少し食す。
吉富安之助氏より來端。今日午後五時迄に御出で被下る様にとの事なり。
精一郎様御在宅。
おきごたつをかけあたる。
晝飯は青ゑんどう、こんぶ、お汁のゝこりを食す。
午後鷹子様手袋を少しあむ。
多田好問氏より父上様へ來書。精一郎様御返書あり端書にて。
夕飯は青ゑんどうにお葉のお汁。
午後四時精一郎様吉富氏へお出かけ、車代七錢さし上ぐ。
午前警鐘一つ少時して止む。
夜鷹子殿に髪をいてふがへしにゆひていただく。
午後九時過精一郎様御歸り。フランネルシヤツを求め、微醉。

午後十時就床。

十一月廿四日　水曜日　曇

午前六時過出床。
稲葉氏來訪。家宅賣るにつき書類借りたきよし。
朝飯は大根のお汁、お葉の漬物、こんぶ豆少し。
すみ子より書面來る。大阪兄上より電報にて赤十字醫員來る、お出で見合せ、明廿五日御地へ立つと。よつて今日は來ること見合すべし。
義二郎より書狀來る。父上様兩三日前より揉療治を御賴み被遊、されど格別効見えず心痛とあり。
自分の内より柿十錢求む。
安積へ日記及義二郎よりの手紙二通をお送りす。
晝飯はさけのやきたるものこんぶお汁のこり。
畠のお葉を一樽漬ける。
精一郎様御在宅。
午後燒芋四本求む。午前三錢の淺草紙五帖求む。しほ二錢五厘。
丘つき子より手紙にて二葉會の様子問ひ合せ。
夕飯は大根の煮付け、こんぶ。

午後七時向島より電報にて至急お出でねがふと申來る。時に精一郎様一足ちがひにて御他出。直ちにさだに命じて追はしむるも不及。省吾様にお頼みして伊東忠太氏の家に至り、そのおもむきをしらしめんとす。精一郎様まだ御出でなかりしよしなりき。車や二臺をいひつけ精一郎様の御歸宅を待つも御歸りなし。よつて自分は午後八時半出で行く。此夜霧深く、すこしの先も不見。向島につきしは午後十時過なりき。途々何ごとにやと胸つぶしつゝゆきしに父上様御容體兎角おもはしからず、それに今朝品川伯父上よりの御手紙に赤十字醫師の診斷には、餘病のおこるやもはからずとあり故に懸念に不堪と。されば明一番汽車にて精一郎様と御一しよに岡山へすみ子をも引きつれ御出でのよしなり。精一郎様いかに〳〵とお待ち申上居りしに十一時過御出であり。車夫とめおきしは、あまり遲かりしゆへかへりしなりと自分の車に畠の漬菜を持ちてゆく着類はお召ちりめん花色裏に、紅色友禪縮緬の下着をかさね、帶はあゐ菊形のに鶯色紐をしめ、黑縮緬長襦袢に黑縮緬三ツ紋の羽織を着し、コートにショールを着、束髪にてゆきぬ。柿を食す。今日より信十郎來りしよしにておりぬ。

明朝御出發の筈なりしより、兄上大阪より御出でのゆきちがひ出らるゆへ、明日はやめんとのことになる。父上御入院のよし報ありしゆへ、すみ子入院するはまことか、ようたいあしければといふ電報かけしに午後十二時頃はや返電あり、ヨーダイカワラヌといふ。

午前一時頃就床。離れの方にゐぬ。上履を母上にさし上ぐ。五十錢代りにいたゞく。

十一月二十五日　木曜日　晴

午前八時頃起き出づ。

いよ〳〵明朝御出立の事に決す。

朝飯は生玉子、のり、お汁（お葉、まめ、かつをの味噌漬）、てんぷら。

母上精一郎様に牛乳二合あげんとて種においひつけになる。種きたらぬ内精一郎様御出かけ。午前九時頃。

母上様下島氏に金五十錢御見舞として精一郎様に御托しあり。

品川伯父上に明一番汽車にて出立のこと及び禮を母上代筆にてしたゝむ。

母上様むらさきのお枕をぬふ。

母上胴卷をぬふ。

第三株式會社へ電話にて二百圓御出し被下るゝ様にと發信。

晝飯はかつをの味噌漬、てんぷら、しやけ、のり等を食す。及牛乳一合計り、ほうれん草のおひたし。

信十郎及下婢に十錢づゝ遣す。

柿を食す。かすてーらをも食す。

精一郎様午後三時頃御歸り、電話不通のよしにて又御出かけ。金二百圓向島へ立てかへおく。

外に七百卅圓お出し被遊。廿圓くらしの分に受取る。

午後六時頃精一郎様御歸宅。

夕飯は鰻飯、ほうれん草のおひたし、まめ等、それにお葉の玉子とぢのおつゆ。

夜謙吉兄上お出でにて明日の御出發は先づ大阪兄上御出京の上岡山の御容子悉しくしれしのち御出での方然るべさよし御話しあり、先づ電報にて大阪へ兄上御立ちありしや否やを聞かんとの話しありしかば、一同もげにとおも

ひて又明日の御出發は御見合せとなる。
兄上午後六時御歸り。
午後十二時頃返電あり西村はもうたつたと。
午後十一時頃就床。

十一月二十六日　金曜日　曇

午前八時頃出床。
朝飯は小かぶのお汁、のり、しやけ、ほうれん草のおひたし、まめのゝこり等。
午前九時頃精一郎樣種の車にて御出かけ、今朝弘道會より整骨醫木村正英といふ人非常に斯道に上手にして、内藤翁及島田夫人等を治癒して治さしめしよしにて、それゆえ御出立前此醫師に意見を聞きてゆかんと母上の御考へにて精一郎樣御出で被遊れしなり。
午前十一時過精一郎樣御歸宅。芹澤氏をも御訪ひ被遊しよし、少し快方のよしなり。
晝飯ははんべんにしやけ、のり、かづのこ。
京都高木祐次郎よりふくさを送る。
かすてら、開化饅頭、ビスケットを食す。
夕飯はハンペン、しやけ、のり、かづのこ等。
午後六時頃櫻組兄上御出で、暫時御話しの後御歸り被成らんとせしに、丁度門口にて大阪兄上に御出會、それよ

り色々御話しあり父上御病狀は存外に御快く、只今は半臥の樣に被爲入廿三日は非常に御快く、謠をうたひ被遊しよし、父上には母上御出でを非常に御心配被遊決して御出でなき樣にとのこと、それに醫師の言にまかせ來月三日あたり日よりのよき日をえらみ舟にて神戸病院へ御入院の筈。御途中は安樂椅子に御のりのこととされば母上御出立は父上御入院の後に被遊る方よろしきとのことゆえ、御出立御止め被遊。
兄上御土產に大阪白粉六つ、紫檀鏡臺一つべに一箱被下る。御飯前なりしゆえ、鳥料理をとり御飯を召し上る。
櫻組兄上お先に御歸り、大阪兄上は午後九時頃又歸り。
それより就床。

十一月二十七日　土曜日　晴天

午前八時出床。
ぢいや來りしよし。
朝飯は玉子のいつたるもの、のり、お汁、しやけ。
いよ〳〵御出立おやめにつき精一郎樣午前九時御歸宅。
鷹子殿より御手紙被下西村三木雄より手紙來りしゆへ附箋して廻せしとのこと。
柿四十錢求めて皆々樣と食す。
大阪兄上十時御出で、今日正午御出立のよし。
母上代筆にて品川伯父上へ又出立やめしことを報ず及看護婦醫師等の禮。

晝飯はしやけ、かづの子、のり。
家への土産に言問ひ團子三十錢をいねにいひ付け求む。
午後一時頃歸宅せんとするも種不來。
午後四時頃車をやとひて鏡臺、おしろひ、きがへの着物、精一郎様のかばん、團子等を持參。
夕飯を向島にて一膳しやけにて食す。
歸宅すれば午後五時なりき。八つ頭にて一膳食す。言問ひ團子を食す。
向島へ直ちに古鏡臺、こり、ふろしき、大陽二冊、畠の大根かぶとを送る。
夜楠翁算筯を出し其上に鏡臺をおく。

十一月廿八日　日曜日　晴

午前八時頃起き出づ。
朝飯は大根のお汁、のり、八つ頭のにつけ。
鷹子殿障子張りを被成。
障子紙を求む（十三錢五厘）
車やに拂ふ（七十五錢）
晝飯はさばの味噌漬、お汁のゝこり、玉ねぎを食す。
さば一本（十三錢）

午後義二郎へ精一郎様と兩人にて手紙を遣す。
午後三時過精一郎様と上野繪畫展覽會へゆく。こもんもくめ形のかはり裏にやがすり小紋のを重ね、例の襦袢に帶はあるの菊形黑縮緬三ツ紋のを着しゆく。コートを着る。白山まで歩み、それより車にて上野におもむく。一臺十錢づゝ。
それより上野にゆき展覽會を見る。終れば午後五時すぎなりき。それより松田にて料理を食す。口取と甘煮（口取は蒲鉾、さよりのしほやき、くりきんとん、甘煮は八つ頭に鳥）わんもり（海苔、三つ葉、さよりしゐたけなり）てりやきあま鯛ににんじんのやきたるもの、こんぶのにつけ、さしみ白と赤（代一圓八錢）それより車にてめがね迄到り（七錢）それよりおり、神田淡路町の洋物やにて鷹子殿肩掛を求む（三圓）又上ぐつ自分のを求む（五十五錢）それより又車にて、勸工場東明館に到る。（車代四錢）中にてお客菓子盆用及びんろうじ箸（五錢）のを求め又省吾様の箸（二錢）を求む。
其前途中にて鷹子殿羽織のひも（三十錢）白きものを求む。
勸工場にて半襟（四十九錢）のを求む。場中にて精一郎様御知人に御面會あり。
それより又車をやとふて歸る（廿二錢）
歸宅すれば午後八時なりき。
片栗粉及昆布共十錢を求む。
豆ふ三つ（三錢）を拂ふ。
紙くづを拂ふ（四錢）

午後九時就床。

十一月二十九日　月曜日　晴

午前八時起き出づ。

朝飯は大根のお汁、かつをの味噌漬、こんぶのにつけ、お葉の漬物。

午前九時頃精一郎様御出かけ。

向島より野菜物の禮及三木雄より手紙不來旨申參る（端書）

義二郎より又容體書來る。餘程お宜しきよし何よりも嬉し。

西村三木雄より留守宅あて切手送りくれる樣申參る。

一圓切手を求む。

鷹子殿お羽織の紋出來上る（代十二錢）

精一郎樣午後一時前御歸り。

さつま芋一貫目（十錢）魚やより鮭六切れ求む。

升本にまき、しほをいひつく。

晝飯はさつま芋、おつけののこり、精一郎樣に牛乳一合とる。

こんぶ（四錢）青豆一升（十八錢）

向島へ手紙にて泊り中の禮と西村三木雄の手紙は此方へかへりきたるよしをいふ。

ちいや來り三十錢遣す。但し先日の分。

丘つき子樣へ返書、二葉會よりは何とも申し參らずといふこと。

安積へ御容體書を遣し御機嫌伺ひをもそふ。鷹子殿夜さだと白山にて毛絲中細（六錢）二オンス、あみ棒（二錢五厘）足袋（十六錢）鷹子殿の（二字不明）半紙（十三錢一厘）を求め（パン十錢）と。

精一郎樣午後六時頃運動にお出かけ、午後九時御歸り直にいぬ。

夕飯を不食、夜十一時過パンと芋を食す。

明朝六時發の汽車にて鷹子殿先生を御見送りのよしゆへ、今夜より車をいひ付けおく。

午後九時過就床。

十一月卅日　火曜日　晴

今朝始めて庭に氷を見る。

朝飯はかぶのお汁、こんぶ、さつまいもの煮付け。

新聞代三十錢、牛乳代一圓、米や六圓、升本三圓。

精一郎樣御腹痛御在宅。

今日より向島母上の手袋をぬひはじむ。

精一郎樣上ぐつをつくらふ。

晝飯はさけのやきたるもの、青ゑんどう。

向島母上より御手紙にて歳暮として金五圓被下べきよし、
今朝四時頃鷹子殿御出でに付き三時過に御おこしせしに既に御おき被成御出かけ。
さだにあづき（七錢）ホヤランプ芯（四錢五厘）魚勝に一圓三錢拂ふ。
下婢に給金一圓遣す。
地代一圓廿六錢拂ふ。
安積父上様より御手紙來り、御祖母上近々御出京のこと。下島氏への御手紙在中。
精一郎様御入浴（一錢五厘）
車やに四十錢拂ふ。
精一郎様に十二錢御渡しす。
夕飯は青ゑんどうに、すゐき芋のおつゆ。

十二月一日　水曜日　晴寒し

午前七時過起き出づ。
手水氷れり。
すみ子より。寫眞一枚遣す七分身羽織を着しいてふがへし。
赤飯をたき御佛前と不動明王へ供ふ。
御飯は大根のお汁、青まめ。

精一郎様午前九時過御出かけ、その前御腹痛湯タンポを作り、背をなづ。少時にて御治り。
西村三木雄氏より切手到着のよし報あり。
晝飯は大根のお汁、さけ。
安積貞子様より御手紙參る。御祖母様今月十日頃甲斐氏と御一しよに御上京のよし、及井戸を御ほり被成し處淺くてよき水出るよし、來年始めには新築にかゝるといふことと、米は今日御廻しすべしと。
岩越鐵道より端書來る。
黑ごく細毛絲一オンス（六錢）柿（二十錢）求む。
精一郎様御綿入をぬひ、たびをつくちふ（くつした）
鷹子殿、向島母上の八丈小袖を御仕立上げ直に向島へ御出で被遊れんとするを、おそければ御止め申す。
夕飯は豆腐のくづに、こんぶのにつけ。
豆腐一つ求む。
精一郎様に十錢さし上ぐ。
午後四時過精一郎様御歸宅。
お風呂をわかし入る。
柿を食す。
午後九時就床。

十二月二日　木曜日　晴

午前九時出床。

西村三木雄氏來訪。

三木雄氏より端書來る。

午前十時精一郎樣御出かけ。

朝飯はこんぶの煮つけに、かぶのお汁。

精一郎樣御靴下をつくらふ。

八丈夜具を干す。

とうふ二（二錢）求む。

しほ（五錢）を求む。

お葉を又漬く。

晝飯はやきどうふのにつけにお汁ののこり。

さつま芋五百目（六錢）求む。しやけ十きれ、のり二帖（七錢）

安積貞子殿より御手紙鷹子殿あて來る。

朝西村氏へ出さんとて菓子十錢求むるも間に合はず。

朝柿を食す。

午後四時過精一郎樣御歸宅。

夕飯はさつま芋のおつゆ、餅菓子を食す。

豆（十錢）卷紙（七錢）求む。

明日さだに托さんとて向島母上及すみ子への書狀をしたゝむ。

鷹子殿に少年世界代五錢、月謝二圓御渡しす。

向島への書面には歳暮の御禮と父上御快き御悦び、寫眞の禮、鷹子殿土曜日に御出でのこと。手風琴と太陽小說かりうけのこと等、岡山より御入院しらせ來りしや否。

義二郎より手紙來る。父上樣追々快方にて御食慾も御增し被遊、御痛みの所も快く、御客と御談話等二三十分間も被遊ても御障りなしと、嬉し。

大瀧八郎氏より來書、鳥打銃は自分タイムス社引きしゆへ入用なりとのこと。

午後九時過就床。

十二月三日　金曜日　晴

今朝庭に霜白きこと雪のごとし。

午前八時出床。

朝飯は大根のお汁にまめ、のり。

午前九時過精一郎樣安藤阪三井へお出かけ。

昨日も同所金二十錢さし上ぐ。

午前九時頃下婢向島へ赴く。よつて母上すみ子への書狀を托す。
綿入をぬひ、手袋をあむ。
午後〇時少し過ぎ精一郎様御歸宅。
晝飯はさけにお汁にまめ。
午後三時過精一郎様御出かけ、十錢御渡しす。
午後五時頃下婢歸宅話中向島母上の御血色わるかりしよしなり、甚心配。
夕飯はさけにまめ。
鷹子殿少年世界を求め夜見る。
午後十時頃精一郎様御歸宅、卷紙二種御求め被下。
直ちに就床。

十二月四日　土曜日　晴

午前八時出床。
朝飯はのり、さけ、お葉のおつゆ。
向島すみ子より書狀來る。看護婦の報告書をそふ。岡山父上いよ〳〵御快く、もはや肋骨に少し御痛みのこれるのみなるよし、いとど嬉し。
省吾殿　牛乳代（一圓五錢）自分出しおく。

とうふ（二錢）求む。
松岡亮藏氏より端書にて、今夜十時半頃宿泊御頼み申度よし。
晝飯は大根のにつけ。のり、おつゆのゝこり。
午後二時過鷹子殿向島へ御出で、自分の内より一圓出し、母上にカレー粉（廿錢）牛肉（卅五錢）柿（廿錢）さし上ぐ。畠漬菜をも二はさし上ぐ。よう子殿御仕立の八丈の小袖も御持參、太陽も熱度計りも返す。
二の宮より菓子折一つ茶一箇遣す。
母上へ書面にて御しきせの御禮と父上の悦び。
さだに柿十五錢しやけ十きれ求めしむ。
今日午後より强風。
夕飯はしやけ、おとうふのくづに、大根のにつけ。
午後七時前鷹子殿御歸り、太陽と同じく赤本青豆澤山、かつをぶし餅菓子半襟等。
餅菓子柿を食す。
午後九時就床。亮藏氏御宿泊のよしゆへお待ち申上ぐるもお出でなし。

十二月五日　日曜日　快晴

午前八時出床。
朝飯はのり大根、大根のお葉のおつゆ。

義二郎より返書來る。父上様御病狀いよ〳〵御よろしきよし。
亮藏氏來訪、しばしにて御歸り。
阿部氏來訪、晝飯を出す。晝飯は皆さけと青豆。
午後一時過阿部氏歸宅。
安積への日記及看護婦の報告書をもそへしたゝむ。
自分の内より燒芋五錢かふ。
自分よりぢいやに大根のなり代五錢五厘遣す。
ぢいや來り畠の大根をぬきてほしゆく。
午後二時過精一郎様と根津神社を拜し、それより清華亭に至り、うなぎめしといりとり（くわゐとぎんなん、うど等）する物（たひ松露お葉しばゑび）うなぎは箱入りにて味頗甘美なり。代一圓三十錢。
着物は黑（四字不明）格子縞に、柿色中形の下着に古き帶の丸帶をしめ、辨慶黑八ッ橋織の羽織上にコートをき、かばんとづきんを持ちゆく。歸途にや氣付きし時に帶留め鶯色前打紐なかりき。歸途本郷にて柿一錢のを十五求め車にて白山にゆく。價十錢。白山のきれやにて鷹子殿おのぞみの半襟切地赤縮緬、藤色紋かべ（二字不明）呂、白羽二重二尺を求む。價〆一圓十錢、以上自分の内より。
歸れば午後八時なりき。
お風呂を沸す。後寒きこと甚し。
柿を食す。

午後九時少し前就床。
午後十一時電報あり、安積より來る「十一ジニテユク」と。さればもし今夜にもやと十二時頃迄お待ち申上げしも御歸りなし、よつて明日のことならんといぬ。
升本にすみ、みそ、しほ、をいひ付く。

十二月六日　月曜日　快晴

午前九時出床。
朝飯は大根のお汁、のり、青豆、ぬか漬の大根の香の物。
午前十時前精一郎様御出かけ。
午前十一時半頃向島母上御出で、お歳暮にとて金五圓外に二の宮より御もらひの白紬一反二子一反、改良染小紋一反餅頭子二包下女にも一包此方より御用立の金子二百圓太陽一冊かつをぶし一圓丈（之は右二百圓の内より遣す）自分中形の羽織及どうぎ御持參被下又頭巾地御持ち被下されしも少し短かきゆへ長き方と御取りかへをねがふ及精一郎様外套。
鈴木光成氏昨日臺灣より歸京のよしにてこられ、すみ子へ總彫金指環被下しよしお話しあり。
さけ十きれ、のり二帖（七錢）
ぢいやに卅錢（自分の内）を遣す。
晝飯は母上もいらぬとの仰せゆへ、さけとのり、お汁のゝこりにて食す。

午時十一時半電報にて大學へあて「ムカフシマハハキタ」といふ電をかく（五錢）母上より母上様に食事代十錢お遣し。

午前十二時過精一郎様御歸り。

種々（四字不明）を御いひつけ被下る。

午後三時半電報局より本人歸宅後ゆへとめおくといふ報あり。

午後三時過母上御歸宅、縞毛布とき物の洗ひ張るもの及大阪兄上へ差上ぐる小紋縮緬一反とをお頼みす。すみ子より鷹子殿へ手紙あり。

さつま芋（十錢）求む。

夕飯はさつま芋のくづにゝお葉の漬物。

夕飯後精一郎様鷹子殿と御祖母上お迎ひに御出で。

省吾様にホヤ（四錢）のをお頼みす。

省吾様あとより御出で、おむかへに。途にて鐵の杓子二本求め。

精一郎様に一圓さし上ぐ。

午後八時前御祖母上様貞子殿と御無事御着京、御容貌など少しも變なし。

右車代よう子様共三輪（六十三錢）の處まし十五錢を乞ふ。よつて不當の旨談す。

さだに魚勝にてぶり五切れ求めしむ。

御祖母上様御夕飯前なりしゆへぶりのてりやきとさつま芋のおつゆにて御飯をさし上ぐ。

おみやげに豆類澤山かき、ふなとたいの甘露煮、芋、餅。

かき、甘露煮を食す。

午後十一時就床。

お風呂をわかす。不入。

十二月八日　水曜日　晴

午前七時出床。

朝飯はかぶのお汁、青豆、大根の漬物。

義二郎より書面にて、いよ〳〵來る十一日御出發二三泊被遊し後十四日新橋着のよし、但し御歸宅時間等は途中より打電すべしと。

午前十時頃精一郎様御出かけ。

稲葉氏のあとへ引移りし人よりそば三つ遣さる。

晝飯はお汁のゝこり、青豆、あかゝぶの酢漬。

午後下女本郷にゆく途中にて五分しんホヤ一つ四錢を求む。

午後二時過より御祖母上貞子殿と本郷へ御出で、御頭巾、茶椀、箸箱、ふとんきれ等御求め。俄に雨ふり御祖母上のみ御車にて御歸り。車代五錢。

醤油やなりとて家を間ちがへ用をきゝに來る。

午後四時下女歸る。
夕飯はないりとて青豆をすりつぶしたるものと油揚を入れて胡麻油にていりたるものを食す。
油揚三枚一錢五厘。
夜糸芯十錢（十本）マツチ一箱（三錢）求む。
午後十時頃精一郎樣御歸宅。ホヤ一つ手袋一つお求め。
綿入をぬふ。
千坂智次郎氏より書狀にて嚴島艦親王附に補せられしよし、よつて御遊びに御出で被下たきよし横須賀よりよこさる。

十二月九日　木曜日　晴

午前七時出床。
朝飯は大根のお汁、ないり少し。
建築會及西村三木雄氏より端書にて安着のよし報あり。
午前十時精一郎樣御出かけ。
下女の羽織をたちてやる。
御祖母上樣御蒲團のたちもの手傳ひす。
晝飯はさけにあかゝぶのお汁。

米一斗求む（一圓六十六錢七厘）
午後四時過精一郎樣御歸宅。
おさつ（五錢）求む。
古着かひ來る。
夕飯はおさつのおつゆ。
午後御祖母上の蒲團の綿を入る。夜とちを手傳ふ。
午後五時頃亮藏氏御出で夜食を上る。宿泊。
おさつ六錢求む。
精一郎樣寫し物の罫を引く。
午後九時就床。

十二月十日　金曜日　晴

午前七時出床。
亮藏氏朝飯を食し御辭當をさし上ぐ。七時御歸り。
午前九時頃精一郎樣御出かけ、十一時頃御歸り。
三井建築の寫し物をなす。
隣家稻葉氏の跡に引き移りたる人の細君來る。直に歸らる。

晝飯はきざみこんぶお汁、とろゝ芋。
朝飯は大根のお汁、きざみこんぶ。
戸籍調べ來る。
夕飯はかぶ、つぶし豆、とうふお汁。
精一郎樣晝飯後御出かけ。
貞子殿に髪をゆひていたゞく。
二葉會より廻狀來る。
精一郎樣午後三時過御歸宅、ねぢぬきをお求め。(八錢五厘)千坂氏宍戸氏へ御出でのよしされど兩家とも御留守なりしよし。
省吾樣に二圓さし上ぐ。
さだに草履(三錢五厘)のを求めしむ。
柿崎氏より來狀、上杉伯令息天盃御頂戴ありしよし。
向島母上より來狀、父上樣いよ〳〵十四日午後三時十五分御着のよし及御祖母上へさし上るものゝ相談。
午後九時頃就床。

十二月十一日　土曜日　晴

午前七時出床。

朝飯はかぶのお汁。
今日は非常に寒く、風ふきてみぞれふる(あられ?)
おさつ一貫目(十二錢)こんぶ(一錢四厘)のを買ふ。
魚勝にまぐろの切身(五きれ)三錢づゝ求む。
晝飯はからにねぎ、おさつ、むきみを入れ油にていためたるものと朝のゝこりのお汁にておぢやを作り食す。
むきみ(四錢)から(二錢)求む。
升本にすみとみそをいひつく。
午前森山氏の建築明細表をうつす。
午前九時頃精一郎樣御出かけ、十一時過御歸宅、一圓御渡しす。
お風呂をわかす。入る。
午後三時頃精一郎樣向島へ御出かけ、午後十時頃御歸り。
夕飯はお葉と油揚のおつゆにお餅を入れたるもの及おぢやからを食す。
向島より端書にて太陽返却のこと及華族女學校教師鵜飼信子、原いよ子兩氏死去のよし。
下島氏より端書來る。
佐伯氏より明午前中に來るべしとのこと。
夜謠をうたふ。
午後十時頃就床。

十二月十二日　日曜日　晴

午前七時出床。

朝飯は大根のお汁、からいりのゝこり。

今朝頭痛し齒痛む由て九時迄又いぬ。

小楊枝一錢二厘のを二袋求む。

午前十時頃精一郎樣佐伯氏へお出で、宍戸氏へも御出で、西村三木雄氏へもお出で。

又うつし物をす。

晝飯はにんじんと青豆の三杯す。

安積父上及星野氏よりダイバー氏死去の爲明日の講義は休みのよし端書にて申來る。

板根榮吉氏より貞子殿の御寫眞請求。

淺見倫太郎氏來訪御歸りは午後二時過より四時頃精一郎樣御一しよにて伊東氏へお出で。午後六時過御歸り。

もなか十錢求む（よし江出す）

省吾樣に安積へのコーンビーフ（四十錢）求め御晝食十二錢さし上ぐ。

お風呂をわかす。

安積へ祖母上天王寺かぶ三つ小紋、二子二反西村よりのを御遣し及内よりコーンビーフ本一冊。

夕飯はおさつのくづに、三ばいす。

かみゆひ來り髪をゆふ、島田に（十二錢）よう子樣の内より。

車や四十錢拂ひをとりに來る。小さものなきゆへ後にといふ。

午後九時就床。

十二月十三日　月曜日　晴

午前七時出床。

朝飯はかぶの御汁おさつのにつけ。

安積父上より御手紙あり、米四俵御送り被下るゝよし、よつて受取證封入御送り被下る。

千坂智次郎氏より來書。

ちいや澤庵をつけに來る。

精一郎樣御在宅。

晝飯は青豆。

午後精一郎樣甲斐、阿部龍之助、安積父上、一郎、立岩、國分、とへ御發狀、一郎へは端書。

ちいやにぬかとしほ四十二錢、三十錢ぬか十七錢二厘かうじをかはす。

桶たが八錢。

すみ子より父上樣着十五日になりしよし申參る。

夕飯は大根のにつけ。

精一郎様御風呂に御出で。
夜謠をうたふ。
又うつし物をす。
午後九時就床。
八圓先日たてかへ金御返し被下る。

十二月十四日　火曜日　晴

午前七時過起床。
朝飯はかぶのお汁。
午前板根榮吉氏より端書にて貞子殿の寫眞又請求し來る。
午前九時頃精一郎様御出かけ、二十錢さし上ぐ。省吾様に月謝二圓五十錢さし上ぐ。
車やに四十錢遣す。
貞子殿さだと染物やへ御出で、下女に青豆十一錢五厘（一升）さとう天光二斤（十九錢）
紙くづかひ來り一錢にて拂ふ。
安積より米四俵來る。運賃（一圓六十二錢）外に手傳人に五錢。
晝飯はかぶのお汁、大根のにつけ。
下女に納豆を求めさす。なし。

午後綿入をぬふ。
午後四時過貞子殿御一人御歸宅下女は早く歸る。
午後四時頃精一郎様御歸り。
夕飯はかぶのないり、海苔。
夕俵氏來訪二三時間話しの後歸らる。
精一郎様御祖母上御湯呑を五錢にて御求め御氣に入らず。よつて夜とりかへにお出で、五錢七厘にて小蓋物御求め廿錢御渡しす。
九時過御歸り。
丹野愛子氏より廻狀來る。
午後九時過就床。

十二月十五日　水曜日　晴

午後七時出床。
朝飯は大根のお汁。
ぢいやに一圓かす。
午後九時頃向島へ父上のお迎ひにゆく。二人にて。
着せば十一時過にて、途中にてかきとりんご、ざぼんを精一郎様おみやげに御求め、それを持參。

向ふにて晝飯、牛肉と魚肉にて食し直に新橋へ赴き切符を求む（二圓御貸し）
横濱迄中等にてゆき父上を御待ち合せす。折よく御出遇ひ申し黑田看護婦と義二郎御付申せしにのりて新橋へ着す。品川にて西村直にあふ。これも同車す。新橋へ着けば品川より廻せしかごあり。弘道會員外櫻組井上、野崎の代人等來り迎ふる者多し。
母上も御出で、謙吉、一彰の二兄、鈴木、荒井遜治郎、品川伯父上も少時待ちおられしよしなるが寒きため歸らる。
父上は品川より廻されし駕籠におのりにて遜治郎義二郎、精一郎様も御歩行にて御供被成、自分は車にてお先にゆく。午後六時頃父上御無事御安着。離れにて御あんかにおあたり被遊、それより夕飯は、さしみ、甘煮、わんもり、にざかな、お汁。さしみはまぐろ、甘煮はあなご、くわゐ、八つ頭、午蒡、わんもりはゑびしんじようにお葉。にざかなは平目。お汁はしひ茸にはんぺん。かき。もち菓子を食す。
自分着物は孔雀羽織紋お召にやがすりの下着を重ね、黑もんちりめん五つ紋の羽織を着古代紫ふくべの帶をしむコート着用。
きがへは黑（一字不明）八丈細きのに白地さらさちりめん下着をかさぬ。
父上様には存外御血色もよく。又御容子もよろしくいとゞ嬉し。
午後十一時頃就床、宿泊。
大阪兄上も御泊り、義二郎も來泊す。
今朝精一郎様に三圓御渡しす。

途中上野より小包を出す。
善吉も來りたり。

十二月十六日　木曜日　晴

午前八時出床。
朝飯は善吉の遣したる口取物、牛肉、お葉のお汁。
午前十時頃精一郎様御歸り。
父上少々御風氣なり。
下女（やを）種に五十錢づゝ、信十郎に一圓遣す、自分の内より。
母上より三十圓頂戴す。
夜淺草へ赴く種の車にて廿錢のかるやき父上へ、すみ子へ花かんざし、かけ物、よう子殿、貞子殿へも二かけづゝ自分も、皆にて一圓餘。
半襟二かけ二圓のと一圓二十五錢のと五十錢の五。
千い坊へ手袋を遣す四錢。
俊ちやんへの大鼓十錢、狀袋四十八錢、二〻にて。
夕飯は鯛のしほやき、平目のにつけ。

十二月十七日　金曜日　晴

午前八時起き出づ。

朝飯は畠の小かぶのお汁、お肴。

午前看護婦歸る。

堀田家より平目五枚來る。二枚は進物にす。

父上のお風未だ不治。

彌岡忠氏來る御面會あり。

晝飯は胸あしく不食。

母上うちへのみやげにとて橋場の名物ふなのかんろ煮、すゞめやき、しそまき、みそあげ、玉子一折、のりのか
ん一箱被下。

午後一時頃歸宅。

留守中廿錢、納豆、たらを求めしよし。

髪結への反物一反六十二錢にてゆづりうく。（自分の内より）

夕飯は大根の油煮、大根のつけものゝみ食す。

自分の本數種祖母上へ持參。

十二月十八日　土曜日　晴

午前七時出床。

下痢腹痛のため又就床。

朝飯は不食。

うつしものをす。

晝飯は玉子のおぢやを食す。

夕飯はたらこぶを食す。

大瀧八郎氏來る、さしみ、たらこぶにて夕食。さしみ二人前をとる。

精一郎樣御在宅。お風呂を立て入る。

十二月十九日　日曜日　晴

午前八時頃出床。

腹痛のためユタンポをあつ。

朝飯は大根のお汁。

さだに五十錢、自分の内より歳暮を遣す。

下女にひまを遣し向島へやる。かりおきたるお重へ青豆一杯つめ返す。

晝飯はそば二つ食す。とうふ汁をつくる。

そばや代廿五錢内十錢（不明）遣す。

髪結來る反物を遣し、下すきに廿錢やる。
髪結錢十一錢。
下女夕不歸、皆にて食事の騷ぎをす。
午後五時過下女歸る。
夕飯はお葉のおつゆのおちや。
午後九時過頃就床。
とうふ三つ求む、代未拂。

十二月二十日　月曜日　晴

午前七時出床。
朝飯は大根のお汁。
午前向島へ見舞におもむく。着類はやがすり小紋縮緬下着にもくめ小紋の上着を重ね、黑地牡丹形繻袢に薄藤に古代の形ある半襟をかけたるもの、おびははかたに鶯色繻子の腹合せをしむ。はおりは五ツ紋羽織に黑縮緬と二枚着用、コートと頭巾をもつ。
向ふへは十一時着す、父上はお風も御ぬけにて御血色もおよろしく、昨日小山醫師の診斷にて漸次御快方のよし嬉し。
門口にて千い坊とお文にあふ。千い坊自分の買ひやりたる手袋をはめゐたり。

晝飯はほう〳〵のやきたるもの、なめもの平目のにつけ玉子燒にて食す。
かすてーら最中を食す。途中にて牛肉一斤三十五錢自分の内より買ひてもちゆく。宅より山形名產ののし梅一罐被下、之をも持參。
途上淺草本願寺門前にて一彰兄上に出會ふ。今日六時發の夕汽車にて御歸りのよし。
午後三時過精一郎樣御出で。
午後四時頃一彰兄上御かへり、龍坊のオルガンは兄上御求め。
夕飯はうなぎめし、すゐもの、さしみ等。
かき澤山母上御求め被下、又みかん一錢のを五十、宅へのみやげに御求め被下柿と一籠にして被下。
今朝出る前、貞子殿、鷹子殿に二圓づゝさし上ぐ。
午後六時過歸宅、途中淺草まで精一郎樣と御步行、それより車にて本鄕迄ゆき、それより一人して歸る。精一郎樣は九時過御歸り。
歸宅後みかんを食す。
留守中升本より白砂糖一斤、魚勝よりかづのこ少し遣す。
向島母上より端書來りゐる。龍坊の風琴は兄上にお話しありてお求めなりしよし。
下島氏より來書、祖母上に單獨お出で願ふよし。
吉富安之助氏よりも來端。
午後八時頃歸りしも、小かばん、かさをわする。多分向島へのこしゝならん。

午後九時過就床。

十二月廿一日　水曜日　晴

午前七時前出床。

朝飯はお葉とおとうふのお汁、ないり、黒豆を食す。

晝飯はさけ、お汁。

午後より貞子殿と寫眞師中黒へ赴き、自分は半身側面及正面のを三枚誂ふ。代四十錢づゝ、二人分八十錢（自分の内）歸途俊一殿足袋をかふ。十四錢五厘（自分）歸途精一郎様に御あひ申す。

衣はやがすり小紋の下着に、孔雀織の紋お召をかさね、あさぎ菊形どんすの片側帶をしむ。羽織は五つ紋の紋縮綱。

うつしものをす。

升本にみそをいひ付く。

おさつ五百目（六錢）

夕飯はおさつのおつゆ。かづのこ。

夜さだ貞子殿は白山へ赴く。廿五錢の眉はけ二錢の白粉一錢六厘づゝの齒磨二袋、つげのびんぐし（七錢五厘）を求む。白梅一つ遣す。

俊一殿への手袋（七錢）おさつ（四錢）柿（十錢）ひしやく（三錢）はね（三錢）皆自分の内、柿一つ食す。

午後十時精一郎様御歸宅、就床。

第三、村瀨、小原、野村、渡邊御出で。

向島母上へ手紙にて金と土産物の御禮及小かばんと傘のことをきく。

十二月廿二日　木曜日　晴

午前七時出床。

朝飯は大根のお汁。

坂根榮吉氏、野村一郎氏より端書來る。

精一郎様坂根氏へ、貞子殿寫眞出來次第御送りすと申し遣し。

中黒寫眞店へも端書にて七分身一枚丈至急仕上げ郵送しくれと御申遣し。

晝飯はのりとお汁。

精一郎様御寫し物を終る。

午後少し過精一郎様上野圖書館へ御出で。

安積父上様より書留のお手紙と佐藤秀壽氏より端書來る。岩越鐵道のこと。

午後おさつ三つ食す。

さだを菊坂へ遣して、精一郎様御羽織を黒染にす。三つ紋にて染代一圓、三十日頃迄に出來上るよし。薄化裝三袋求む。六錢。

油揚四つ求む（二錢）
夕飯はこんぶにあぶらげのにつけ、大根のお汁。
大和田氏阿部邸へ引歸し宅前へ新築出來次第又來らるゝよしにて來訪。
魚勝よりかづのこ一升求む。
精一郎樣より金三十圓受取る。內五圓下島氏へ。
一錢五厘下女湯錢。
午後九時過精一郎樣御歸り就床。

十二月二十三日　金曜日　晴
午前七時出床。
朝飯はお菜のお汁。書飯はかづのこ。
午前精一郎樣御出かけ、大澤デザインの手傳ひ。
今日もち二斗一升つかす。七寸の一そなへ一寸五そなへを五升の內よりとり、のこりは皆水とりにあと四升粟に四升の白をまぜて粟もちとし、のこり八升はのしもち。代
よう子殿十一錢御もち。
午後貞子殿と本鄕野々木にて貞子殿召物一反をもとむ、向島よりの二圓にて。
自分の內より自分帶留め（八十五錢）祖母上御（不明）（四錢）俊一殿勳章（四錢）手袋（四十五錢）。往復とも

歩む。歸途又俊一殿の風せん笛付（三錢）。途中にてよう子殿に御あひ申す。花やにて九錢のそなへ一杯求む。
歸宅後貞子殿と鷹子殿又本鄕へ御出で。反物御求め、右同じ內。
西村三木雄氏より金子の催促端書。
夕飯はないり。
御祖母上樣に綿八十五錢御求め申す。
午後十時頃精一郎樣御歸り就床。
中黑へゆき寫眞催促をなす。

十二月廿四日　土曜日　晴
午前七時出床。
朝飯はかぶのお汁。
午後精一郎樣御出かけ。西村三木雄氏へ金十圓渡す。松岡へ木葉會開會を報す。
上野停車場にて安積の汽車便を托す。（七錢）。岩淵鐵道株券を受取る。
安積へ御發狀、株券受取と及荷物受取證。
上野圖書館一圓精一郎樣に御渡しす。
安積より蕎麥粉及鳥の味噌漬來る。六十羽の內三十羽向島へ御送り被下べきよし。
安積へ荷物を出す。みかん、すゞめ燒、俊一殿足袋、風船、くんしよう。

お風呂をわかし入る。
晝飯は皆様は鳥のやきたるもの、自分はかづのこ。
夕飯はいはしと大根のお汁。
魚勝よりいはし十匹四錢五厘のを十五求む。
夜もち十切れ（十錢）求む。
午後八時過精一郎様御歸り。午後九時就床。
阿部健雄氏よりカバンの催促。
安積へ手紙をかく。御機嫌伺ひ、御祖母様より御問ひ合せ。柿のこと、井戸水同側下女のこと。
午後九時過就床。

十二日廿五日　日曜日　晴

午前七時出床。
朝飯は大根のお汁。
午前向島へ赴く。歳暮に。
樫村へ祖母を連れ診察を受く、ビール進物（一圓廿八錢）、淺見を訪ふ、上杉邸に至り憲章様に御祝を白す。小此木氏を訪ふ。津田泉二氏紹介を受く。
六十五錢の蜜柑一箱を持ちゆく。白山にてかき十九錢自分の内より持ちゆく。

旅日記

昭和四年五日廿日　快晴

いよ〳〵今日は出立の日に成つた。

快く晴れわたつた空によろこびを覺へながら昨夜から用意のお赤飯を神々に供へ尾頭付の肴に前途を祝ひつゝにぎやかな食事も終つた。

すえ子もさすがにけふは自然に早く目が覺めた。それでも中々ぐづ〳〵してはゐられないと、しきりに督勵しつゝ發途の準備をいそがせる——

まづ第一に氣に成るめまひの工合は案外快い方だつたが、まだ中々安心とまでは行かない、折々ヒヨロ〳〵と足元がフラ付く何しろ此季節に成つてもほとんど寒中に近いほど着ふくれて——それでさへまだどこやら薄寒くゾク〳〵する——是はやはり貧血の爲なのだらう。

このあんばいでは横濱は尙の事海の風寒く肌にしみるであらうと眞綿や何かいろ〳〵着こんだが、それぞれまだ〳〵薄寒い。皆に「けふは寒いの？」ときいて見ても「イヽエけふは大變あつたかで——と口を揃えていふ。

しかしもうそんな事に頓着してはゐられない綿のはいつた音譜もようの着ものを着、黑繻子にばらの花をかいた丸帶をしめ、それ〴〵準備がとゝのつた。

離れの方は——と氣に成つたが是もどうやら仕度か出來たらしい。

順天堂の横田さんが見送りにとわざ〴〵いそがしい中を來て見へた。

此人の持つ天質のやさしく情味に富んだ事は、こゝにも亦その一端があらはれて心から別れを惜しむ氣持ちが感

じられる――

あの細い玄關先を自動車についてそろ〳〵門前まで送り出して「サヨーナラ」といつた時私の心には一抹の離愁の影が淡くたゞよつた。

今日の自動車は自宅のものは國男が、荷物の大きいのを宰領して先發したので、雇車にしては中々優秀なものだつた、しかし今日のやうな時はたとへうちの車が小さくてもきたなくても馴れきつてゐる江井に把手を取らせたかつた。けれどそれもこれもひたすら私の健康の爲特に廣々とスプリングもいゝのを選んだのだといはれても何を抗議すべき樣もない。

快くそれに三人同乘して皆に見送られながら門を出た。

子供を抱いた人や何か近所の人達がかなり多勢交番の前にむれてゐた。

あとで聞くとその中に、子供を抱いてゐたのがA夫人だつたそうだが、眼の近い私がそれに氣の付く樣もない。

やがて車はめづらしく好晴に風もない街路を走つた。

横濱までの行程はかなり長かつたが、もう少しで――といふ時ふと横丁からかけ出した、自轉車に一寸觸れたかと思ふと乘手は瞬間車を下りた「ハツ」と思ふ間もなく又すぐ車に足を乘せようとした――

何か印半纏着の男らしい、

「まあよかつた――怪我もなかつたと見へる――」とよろこぶ……とほんど同時に私の車の運轉手がかつけようとする姿を見ると又急に車を下り何かグヅ〳〵いひ出した。

「あゝ困つた、是だから江井にさせればよかつたのに……やはり私が思つた通りだつたとつひ愚痴が出る……

とう〳〵あるじが車から下りそれでもしばらくたつて、やつと談判がすんだと見へ二人でこちらへ歸る影を見て漸くホツとする事が出來た。

それからは何のさはりもなく、いよ〳〵停車場につかうとして萬國橋といふ所でふと車が止つた。又かと思ふ中あるじはサツサと車を下りて右側の小さい家にはいつた。

「オイお前たちの指環を一寸外してくれ」といふ聲がした、

「ナゼ？」『念の爲稅關の人に見せるのだ」中々大變なものだと思ひながらぬいて渡した、是は何でも商品ではなくたしかに日本で買つてはめてゐた事を證明する爲だそうだ。

ふと見るともうすぐ目の前に巨大な船體の影が埠頭を壓して見へた。

一行は車を下り棧橋を渡り、高い階段を上つた。又例のめまひがして足元がフラ〳〵兩手がぬけるやうに力なくぶら下る樣な氣がする……

「是はいけないぞ！　油斷出來ないぞ！」私の心がかう叫んだ。

しかしもう總てを覺悟し、此行を思ひ立つた今、何の顧慮する事があらう……

心をおちつけ足元をしつかり踏みしめて胸を壓する樣に打つ脈搏に、體中がおの〳〵く樣に感じながら大膽に私はとうとう船室にはいつた。

そこにはもうM夫人の一行……三人の方々が入口に立つてむかへられきれいな花束を送られた。

室の中はどの船室にも見るやうにさして變つた處もなかつた。

たゞいつの間にかわれ〳〵より先着の美事な盆栽や、花束が五ツ六ツ處狹きまで並んであつた。

やがて續々と見送りの人たちが殺到した……Oさんの一家族、N氏O氏T氏S氏T氏N氏W氏M氏T氏等等の諸氏が……

其中、例の通りはりわたされる爲のテープが用意されドラの第一音に陸續とかへる人は歸つた。

辛うじて平靜を保ち得た私は、このテープの一端に籠る人々の誠意を無にしたくないとフラ〳〵する足元とおぼつかない視界の中に、そこらあたりが――と思ふ處々に會釋をしたり花束をふつたりした。

しかしとう〳〵M夫人だけは見付け出し又ド氏がステツキの先にハンカチーフを結び付けて高くふるのに氣がついて扨其他の人々は――といくら目をみはり〳〵してもこの多くのなつかしい人達の影はたゞ模糊としてとう〳〵船は岩壁をはなれてしまつた。

總てにあきらめを持ち過ぎてしまつた私はかういふ時にも以前のやうにあせりもせず、又涙も多くこぼさなかつた。

それが又私には今かうやつて書いてゐる中にもたへられない淋しさと成つて目がうるんでさへ來た

過敏なものゝ持つ苦しみ――それはとても他人の考へ及ぶ事ではないのだ、それに同情を持たせやうと思へばこそ、そこに失望に伴ふ怨嗟も出て來るのだ人生は遂に孤獨なのだ。――今更何に甘へようとするのだ。

かう考へに沈んでゐる中に船は疾くに沖に出た。

もう人々の姿も全く視界の中にたゞぼんやりした、灰色の集團と成つて映するばかりで、好晴の天空には赫々たる陽光がまばゆく甲板を輝かすのであつた。私は船室に歸つてベツトに足を伸した、往年K氏が米國を出立した時たしか春洋丸の出來たばかりの事、何しろ壯麗なので有名だつた其船の內部を見物しようと皆で、船室の中にはい

つた時私は、「ア、イヤダこんなでは――」と今考へるとふしぎな位其狹く限られた、朝夕の生活が窮屈に感ぜられた。それで今度のこの長い航海にはこれが、第一に私の心に横はつてゐた陰翳であつた、しかしありがたい事に今此場合私には更に其時の樣ないやな感じがなく、安易な氣持ちでソーフアーにさへ横はる事が出來た。

「立つ時N氏がわざ〳〵船中まで來て書いたものを渡されたのがこれだよ」といひながらポケツトからあるじが出す手紙をよんで

彼がその多忙な生活の中でよく純眞なものに對する敬意と懇意が是も亦純な心のあらはれとして私の心に映じたまだ嬰兒であつても、我子を失つた事に對して彼の持つ愛、從つておこる同情の深さ――やはり彼も詩人であり、N系統の文學者であると想はれる。

全く此一文をよむとたしかに爭ひがたい文學者の心境を見それが此N氏やT氏A夫人等によつて現はれる和歌、俳句等の源泉と成つたのだ。

爭ひがたいものは傳統的の力だと今更ながら感無量だ。

夜もよう〳〵更けたシリンダーの音――船ばたを洗ふ濤の音もだん〳〵はげしく成る

明日の朝はいつもとちがつて皆と同じ時間に食堂へ集まらなくてはならないのだ、ねなくてはならない――安眠しなくては――かう考へてゐる中、それも是も皆杞憂に終つてよくねた事〳〵紀淡海峽も遠州灘もたゞ夢の中にすぎて、とうとう赤々と太陽が上り切るまで寢込んでしまつた。

ほとんど此奇蹟的安眠によつて私のなやんだめまひも足の先のしびれも大分とれた。

「ありがたい救はれたのだ」

總てを賭して斷行した、此歐洲行脚の第一夜は、かうして私たちの前途に或一縷の光明を見出さしめつゝ明け始めた。

五月二十一日

神戸の一夜は明けた。

案外平靜によく眠れた私は、起きた時の氣分は實に此頃にない爽快さを覺へた。昨日に比べてやゝ涼味を覺へる風の色は海邊に近づきつゝある爲だといふ事は疑へない。

林立する埠頭の檣の中に英國のマークのある國旗の飜つてゐるのは、今度國賓として來朝されたグロスター公の御乘船らしい。

荷物を上下するクレーンの音が晝夜をわかず騷がしい。横濱とちがつて更に埠止場氣分の横溢してゐるのが此港だ。

午後二時頃鍋島侯母堂が、こゝから下船されるといふので御見送りにと甲板へ出ると思ひがけず、そこにS氏がわざ〳〵大阪行の途次見送りにと來られるのにあつた。あはたゞしい旅程の中にかく歩をまげられた其厚意に對しては感謝する詞をしらない。

氏は此頃めつきり太つて體量二十貫を越すとかいはれてゐる——此偉大な體軀に尙且病狀のあるのがふしぎに思へる位だ、しばらく立話をしてゐる中此地の——日報とかいふ新聞記者が來て寫眞をとりたいといふ。

折から日影眩ゆい甲板に立たされてわれ〳〵一行にS氏をも交へてアツと云ふ間に寫眞はとられた。

五月二十二日

毎日あつさが增すようだ今日も亦更にあつい。

三日間の碇泊を利用して、船客は大抵上陸しガランとしたサロンはほとんど、われ〳〵と外二三乘客のものゝようだつた。

あるじは正金銀行に貨幣の兩替の爲上陸した。

私は今朝一寸した精神感動からか又例の腹痛に襲はれた。

これから又しばらく日本食を口にする事は出來まい。お名殘りに是非と皆に望まれてゐたのも此よう子ではどう成る事か——私一人をおいて皆も行けまひし、さりとて又日本食に對する彼らの名殘惜しさもわかつてゐる、どうかしてよくなりたい——服藥をするやら溫めるやらしてそれでも午後三時頃にはどうやら痛みも薄らいで來た。

「おかあ樣、とう〳〵此お船には私たちだけに成つてしまつたわ」促し顏にす江子はいふ——室を出て見ると成ほどどこにも船客の姿を見なくなつてゐた。

寂寥たる船內にはたゞ船員のみが不相變忙しげに右往左往してゐるのみだ。

これでは皆が出たがるのもむりはない——「そろ〳〵行けるなら、大阪へでも行つて見ないか、こゝからはすぐだし、もし工合がわるければどこからでもぢき歸れるから」——不相變こゝでも亦押立てるようにあるじはいふ、

私はとう〳〵身仕度をした。

幸ひ天氣もどうやら持ちさうだが安易にと思つて自動車を雇つた、舞子まで四圓だつた。

途上右側にかの有名な須磨を見た。しばらく行くとこれがあの幼ない中から聞き馴れた——平家の大敗した一の

谷だとあるじが說明する。

しかしまのあたり見る此の鵯越はさのみの險路とも見へず――大軍の接戰した大戰場とも見へない。

考へて見れば其當時は此日本もまだ〳〵半開の一小島國で武器といつても、一人々々を相手に太刀薙刀を揮へる位の程度――鐵砲といふものさへなく弓矢が唯一の飛道具として恐れられた事は、丁度今の機關銃のようでそれを防ぐ爲には單に金屬の甲冑位で間に合つたのだ。

それが今はどうだらう――攻城砲、機關銃、地雷等々々空には飛行機、飛行船、天地相呼應しての戰ひだ。

しかし昔しは魂と魂と相搏つ事も出來た。

今は幾千萬の將卒が只機械の力によつてのみ、相打つのだ。智略よりもむしろ物質的の威力が勝敗のわかれ目ともいへる

勿論それを統卒する將官の精神――それこそ實に全軍に與へる魂の表徵でなくてはならない事は論を待たない事だが。

扨話しは前に戻つて

須磨ではかの有名な「須磨の關屋の板庇しに尙洩るものは秋の月の――」と謠曲にもある通りの――その板庇しの吹きあらされたのが海岸に一軒殘つてゐたのだ、あとで聞くとそこはもう舞子の領域だつたそうだが、其時は須磨の領內だとばかり思つて、かの須磨源氏の舊蹟やさま〳〵の故事などを考へて感慨無量――感興の溢れるのを覺へた――なまじゐ聞かなければよかつた――飽くまで須磨と信じてよろこんでゐたかつた、しかしそれも今更しかたがない――

ところで其板屋に茶を賣つてゐる女があつた――見たところ四十恰好の女で詞は大阪辯、セルの單衣に黑繻子の腹合帶をキチンとしめいかにも物馴れた調子でいろ〳〵とはなすのがまことに關西の茶屋女風で――もう少し素朴な――頭髮などを櫛卷か何かでありたかつた――中年の女性にありがちなヘラ〳〵と薄い唇を飜へしてはなされては一寸興さめてしまふ。

金玉糖の小さいような菓子が出てその上ふしぎな事には、此汚ない小屋の中にあの二月堂の通りに見へる――黑いふき漆に朱の線をとつた机が二脚並べられた――

「ここから大阪へ行くには――」とあるじが聞くと「もうすぐむかふが電車の停留場で――あれあのガラン〳〵が發車のしらせ、七分おきに電車が出ます」

かうはなしてゐる中ふと氣が變つて「これはいつそ又車などでゆられるよりはこつちへ來る途中一寸見へた大變新らしい立派な建物があつて萬龜樓と書いてあつた――あれが多分旅館らしい――いつそあすこで夕飯をすませ心ゆくまで此舞子の風光にひたろう。それにはさつき車の中から一寸見た苺狩りの建札が出てゐたあれを一つ、若いもの達――殊にすえ子が摘みたがつてゐた――に摘ませてあとから來るようにし私たちはあの料亭に引かへして休息しよう、その中若い者達はあとから來る事にして――

かう相談一決しわれ〳〵は其料亭へ、若い連中は苺狩りの方へ行つた。

此家はごく最近竣工されたと見へまだ木の香の失せない――疊の色も靑々してゐた。

案內されたのがすぐ目の前に海をひかへた二間つゞき――田舍にしては中々廣々した座敷だつた。

床の間にはかういふ家によく見る五葉の松の遠洲流に生けられたのが床の間の中央を領してゐる外、掛物なども

田舍びてゐた、しかし料理は流石明石鯛の本場だけあつて新鮮な代り何もかもこれが大部分をしめてゐた。
刺身、酢のもの、お椀、金びら――これは私には禁物だつた燒肴にしてもらつた――そへものに松露のかはゆいのが二三そへられたのも此處ならでは――とうれしかつた。
若いものたちはよく笑ひよく食べた。
とう〳〵お櫃のお代りをした。二度目の時はそれでもあまり量が多くもてあましてゐた。

彼あらば此飯櫃を更に又
代へなんものを悲しきかなや

五月二十五日　晴

今日特筆すべき事は、印度の僧侶の色々の話を、夕飯後のサロンできいた事だつた。豫て、この船に印度僧の黄の衣を見、それが、まるで繪にある達磨大師そのままなのを見て、私の好奇心は動かされた。一體、あの人は何語で話すのだらう。少しでも日本語がわかると良いがなあ、と思つてはゐたが、之は全く無理な願だとばかり思ひ切つてゐた。
所が、今日午後のお茶から歸つて來たあるじが。
「驚いたなあ、あの坊さんが、實に達者な日本語を話す。それは全く意外な位だ。一つはなしを聞いて見たらどうかな、オツタマさんといふんだそうだよ」
斯う聞いて、私の心は更に彼の話を聽きたいと思ふ念願に燃えた。丁度其夜のサロンにゆくと、この僧が大勢の

人を相手に、盛んに論談してゐるのをみた。中にはM夫人S公爵夫人も居られた。
さり氣なく私も隅の方の椅子によつて、熱心に彼の話を聽いた。やはり印度の革命家なのだ。
「私の革命は、一人の人を殺さず、只、口でみんなに同意させるのだ。それでも政府は私を恐しがつて大勢の警官をつけ、到頭牢にほうり込んだ。私は一文の食費も使はず、大勢の警官に護られ幾年も幾年も牢で暮した。有難いこつちや。なあに、印度人の小便だけでも、英國は流れて終ふんだ」アツハ……
かういつて呵々大笑しつゝ。彼は印度人特有の眞黑な顏に、その物凄いまでに大きな眼を輝かした。尙その話の中に、
「昔は日本人、みんな袖の下を使つた。今、洋服になつても袖の下は止まない、そうでしよう、奥さん」
何といふ達者な日本語だらう。
彼は又、日本に對する自己の著作を示した。それには、其當時の我國の風俗の殆ど總てを網羅して、寫眞に撮り委しく說明されてゐた。
二食主義の彼は夕飯は攝らなかつた。しかも牛津大學を出た彼はまた、流暢な英語をあやつつた。
「奥さん、私、この鞄一つで何處迄もゆけます。簡單でせう」
彼は、其小脇に抱へ込んでゐた、茶革の折鞄の可成り汚れたのに、はち切れるやうに詰込んだのを私に示した。それからの此サロンは殆ど船客の知識階級全部を網羅して、毎夜、この僧の周圍に一つの大きな集團を形作つた。彼は喜んでこの室の中央にある大きなソフアーの上に腰を掛けたり、胡坐をくんだりして、何等倦怠の色も無く、よく談じよく聽いた。

女だてらに――と思はれる遠慮から、私は彼の話や、周圍の質問にきき耳を立て乍ら、その中心になる事を避けてゐた事も、ある時はもどかしくさへ思はれる折々もあつた。

明日あたりから、愈々楊子江の水でなければ浴槽に入らない事になる。今、きれいなうちにといつもの係りの人の親切な注意により、間もなく入浴した。前と違ひ、これは又大變なまぬるい。然し鹽湯だから、風邪をひく樣なこともあるまいと、良く溫つて出た。何しろ「ホツト」としてある方の栓は中々女の手では開けさうもないので、觀念してよく溫まらうと、色々試みた結果、到頭寢て入る事が出來るやうになり、何が幸になるか分らないものだと、後でみんなの笑話になつた。

夕飯頃から、愈々楊子江に入らうとするその河口に、諸川の流れが一時に錯綜する爲か、船が可成り動搖する。

咲枝が夕食に列したが具合惡くとう〳〵中座した。

午後、お茶の一寸前、ホールで彼のオツタマ師に會つた。同師は明日愈々この船を去るといふので、豫て考へてゐた自殺といふ事について、彼の見解を聽いた。

「それはもう、幾世に渡る罪だ」

「それでは乃木大將の死――國のため死ぬ事――それをどう解釋しますか？　或は一人の死――青年の純潔さを保たんが爲――青年としての人格完成の理想の下に死んだ――斯ういふ事は何と解釋しますか？」

彼はいつた。

「それは、死は飽迄惡い。然し、その行爲により人を善導し得たものとすれば、自殺といふ事と敎化といふ事が、自ら二途に分れて說明しなければならない」

かういふのが彼の解釋だつた。

判斷といふ事、それは飽迄理智的に公正でなければならない――彼に對する尊崇と愛慕の念は、凡てを絕して、母なる私に偉大なる信仰と尊敬を起さしめるのだ。私はどうしてもこの世に絕したる母と子として、悠久の世界に相會するのみが、今の私にとつての信念であり激勵でなければならない。

私はこのオツタマ師が只一人、平然として黃の袈裟の中に牛津大學生として留學までした學識を包み、死の前に尙自國の獨立を高唱して憚らない――その意氣に感ぜざるを得ない。かういふ人に會ひ、この熱辯を聽く事を得たのも、この思ひ切つた長途の旅行に依つて得た賜物といはなければならない。何故、私は彼の在世中、斯かる機會を作り得なかつただらうか。

今この樂しかるべき航海中にも、彼の笑ましげな風丰――を想像する如きことある度々、私の心は哀しみに滿ちて、四圍の情景も何も一切眼に入らず心にも響かない。噫、またしても私はこの心境に沒入するのか――もうやめやう。そして、せめてはこの家の爲、子等の爲我心を鞭打つて前進する外なからう。噫、それにしても餘り鮮かな彼の笑顏が又しても私の顏前に彷彿するではないか。

夜に入つて、船は可成り動搖する。S公爵夫人も食堂に出られない。今夜は珍しく味噌汁が付いた。然し、珈琲茶碗に盛られた事が、一寸可笑しい感じがした。成程、故國を離れて始めて、樣々なものに對する懷しさが分る。

往年美術界の奇骨故岩村透男が長い滯歐中「この頃はパンと肉とにあきはてゝ茶づけのめしをくはんとぞ思ふ」とローマ字でかきおくられた事が切實に心に浮ぶ。

五月三十一日　晴

いよ〳〵船は拂曉香港へ着くといふ――昨夜の蒸暑さが如何にもひどかつたので、腹部へだけ夏の毛布を掛け足の先を出して寢た。すると明方ひどく冷々して眼がさめた。之はいけない。やはり弱い者は暑くてもその氣になつて、無暗に薄着をしてはならないのだと氣付いた時はもう遲い。無暗に足先が冷へ、おまけにお腹の方も折角昨夜迄良かつたのに少し變だ。

午前四時頃か、起きてみると丁度船はそろそろ着くとみえ、大きな人々の影が舷門に迫つてゐる。

この上海から香港の航路程靜かな事はめつたにあるまい。まるで海上を滑る――文字通りの靜かさだつた。もう一寢りして――と思つてぐつすり寢込んでゐると、豫て昨夜から聞いてはゐたが――戸をノックして「檢疫で御座います」といふ。時計を見るとやつと六時になつたばかり。

昨夜の蒸暑さでまづ第一に頭に風を入れて――と髮を梳し始めた所にこのノックだ。同時に例の食事のベル迄けたたましく鳴り出した。困つたな――斯う思つたが二度も三度もノックしてはボーイや女給が注意する――仕方が無い、この寢卷の上へコートでもはふつてなど、もう〳〵大騷ぎ――足袋もホースも忘れていきなり出ようとする出合頭、ボーイが來て

「濟みません。檢疫は此處へ御上陸の方許りで良いのださうです」

かういふ聲は時にとつて何よりの幸ひ、まあ良かつた――ほつとして又髮を結ひ上げついでに顏や何かも洗つて終ひ、最後のベルと同時に出て行くと丁度三菱の人が來て御案内を――といふ。「それでは食事を濟せますから」かう云つて食事を始めた。これも亦忙しく忙しく――。

今朝は珍しく白い米の御飯に燒海苔漬物等があつた。嬉くてパンや何かはやめていきなり御飯にかぶりつく……濟んでからホールへ出ると、今度は三井物産の者ですがといつて又別の人が來た。あるじに聞くと上海で三菱へ御厄介をかけたから、今日は三井物産の方へ願ふ事に協定したといふ。そこで丁度檢疫騷ぎで髮も結ひ顏も洗つたので、直ぐに皆して出迎へのランチに乘り、あの若い實業家御夫婦も一緒に向岸に着いた。そこにはもう自動車の用意がしてあり、二臺の中大きい方へは吾々大勢の方が乘つた。それから例の錯綜した市街――それでも上海よりはずつと家並も立派で整頓した――を拔け、山の上に登つた。そこには實に歐洲のそれを思はせるやうな宏壯な建築――花卉の咲き滿ちた前庭を上る小丘の上に建てられたリバルスペーホテルに着いた。

早速寫眞を撮る事になり、かの實業家が吾々一行を寫した。

「洋服を着た御婦人許りなさうです」

かう誰やらいふ聲がして洋裝の婦人許りが丘上に立つた。

「洋服でも男子はいけないさうです」

皮肉らしく誰かいつた。實業家の夫人は洋裝だつた。唯一人本國の服裝をした私は後に殘された。

「ああやつぱり坊ちやんだね」

誰か囁く聲がした。然し省みて吾子は――と思ふ時、そこには相距ること遠からざるものあるを考へずにゐられない。

「ああ、人事では無い。どうかせめてはこの吾家に取つて空前の企を無意味たらしめたくない」

ふと私は出立前親戚に伴はれた觀劇の一場面が心に浮ぶ。――彼の澤正の演じた「大老伊井」德川十五代の太平

に擊壤鼓腹長夜の夢未だ覺めざる時、一人德川家の流れ正に涸れんとするを直覺し、懊惱苦悶或時僧侶の禪話を聽き、遂に三月節句登城の朝警告する者二三に止らざるも遂に死を期して決然駕を命ずる——私はこの大老の心事を忖度する力は無い。然し私はこの君家の大變動を豫感し得ても尙一木の支へ難き大勢を知り、自ら死期を早めたのではあるまいかとも思はれる。ああ如何なる英傑も神では無い。人事を盡して尙天命を待つに忍びなかつたのではあるまいか。何時の世にも先覺する者は受難者だ——どうかこの行をして單に遊覽に終らしめず、彼夫妻をして內に充實し外に開發する所あらしめたいものだ。然し私はかういふ遊覽の時々、己のため一の冗費なく玉の如く逝いた彼英男の事を思はずに居られない。明日は彼の命日だ、けれど

船なれば汝が好むものあがなへず香のみたきて過ぎんその日を

さてこの眺望比無きホテルで、冷した飲物や菓子の饗應があつた。私は飲物——果汁の僅を飲み紅茶を啜つた。之だけだつたが、拂曉から具合が悪く成りお腹が少し痛み出した。皆が寫眞を撮つたり色々した後一行がその山巔に登る時からそろ〳〵氣分がわるく成つた頂上に着くともう堪へられなくなつた。そこであるじにその事を話すと幸その頂上にケーブルカーの發着場があり、休息場もあつた。氣味わるわる洗面所に入ると、ここに世話をしてゐたのは支那婦人で、にこやかに手拭を出してくれそれが又さつぱりと洗ひ立てだつた。人情の嬉しさに變りは無い私は「多謝多謝」とでも云ひたかつたが云ひ得なかつた。どうもかういふ所がもう少し社交的でありたいと、吾乍らもどかしい。その支那婦人の年齡は四十左右、體の大きい、——耳輪などを下げ小ざつぱりした服裝をしてゐた行きずりの人にも優しさを感する——。

ここからは又一行と合して山頂を下つた。今度は愈晝飯をと云ふので、私一人支那の輿のやうな物に乘り他の人

は歩いた。この輿の乘心地は案外人力より氣持が悪い。何しろ前後に一人づつゐて歩くので、ゆさ〳〵して安定が無い。然し之も良い紀念だと國男が撮影した。それから間もなく香港料理屋に導かれ、そこで可成り大勢の食卓が開かれた。ここの料理は概して非常に淡泊な味だつた。

「これは田の鳥です」

斯う云つて簡單に說明を打切つた主人役の言葉に、それと感付いた私はそれでも嫌な氣もせず可成り旨く味はふ事が出來た。

それは生れて始めて味はつた蛙のフライだつたのだ。輕くしこ〳〵して本當に鳥の味に似てゐた。

そこからは各自自由行動をとる事になり、若い連中はもう少し市中を見たいといふので、私達は一先づ船へ歸つて後更に市中見物に出かける事に成り船着場へ急いだ。然し生憎ランチは既に出た後なので、國男と二人だけで一行の歸りをそこで待つ事にした。

大きな印度人の巡査がここにも巡邏してゐた。そこへ丁度本船のランチが特別に出ると云ふので、それに乘つて私だけ本船に歸つた。

六月一日　曇

昨日は所々も見物したり樣々で、殊にこの行に大成功ともいふ可きは、到頭エレヴエーターに成功した事だつた晝飯の時七階位の所を上下したが平氣だつた。

「まあやつと之で人並になつた」かういふ氣がして嬉しかつた。午後一時半、クレーンの音喧しく、銅鑼の音、支

那商人の往來、慌しく到頭出帆した。歌二首を得て百合子のところへ書き贈つた。

この船のすすむはうれしさりながら故國をへだつ我心淋し

故國遠く船香港を出でんとすクレーンの音に吾心はしづむ

今日は珍しくこの行一番の風波の高い日だつた。唉枝も變だつたがどうやら食卓には出た。サロンにドクターやM夫人S伯爵などのお話を傍聽した。S伯は中々立派な體軀の持主だつたが、頭腦も中々明晰な方らしく對談中どこの船からか使があり、伯に面會の都合を聞いてゐた。伯は別にノートを見る風も無くすら〳〵と訪問時間を極めて歸した。其夜、かの飛行將校H氏が妊娠中の奥さんが未だ安產の報をよこさず心配してゐるうち、昨夜非常に惡い夢を見た。何んでも子供の手を引くとその儘取れて終つたと云ふ夢だつたさうだ。この話を聞いてT老夫人は

「それはどうしても身二つに成るといふ辻占だから御安心なさい」

と慰めてゐた。然し中々慰められさうも無い面差で、誠に同情に堪へない氣がした。夕方M夫人から電報があつて

「その後御健康いかが、無事御航海を祈る」

と云ふ意味の電報があつて誠に嬉しい氣がした。東西南北——何處を見ても只波——海許りのこの海上にこの懷しい友の便り——人情の美しさは何物にも代へ難い。

夕飯の食卓には珍しく鰻丼があつた。大喜びで箸を取つたが、然しそれはひどくひからびて乾物のやうに味が無かつた。御飯だけ少し喰べて後は輕い食事を攝つた。考へてみると、かういふ大洋の眞只中で鰻飯を喰べやうなどと思ふのが贅澤な話、顏を見ただけで滿足しなければならないのだ。自問自答して自ら慰める外はなかつた。

六月四日　快晴

かのものすさまじかつた貿易風——かう船員はいつた——も靜まつて、からりと晴れたコバルト色に久振りの快い空をみせた。

「まあよかつた」

かういふ喜びは、この船中の誰でもが持つ氣持だつたらう。救はれたやうな愉快さで、朝飯を快く終つた。餘り一つ藥でも——といふので、昨夜はビオフェルミンを飲んでみた。すると今日は不思議に利いたとみえ、腹痛も止り朝飯の旨かつたことは今迄に例の無い位だつた。

先づパパイヤを喰べてみた。ここは流石に熱帶に近いためか、日本のそれとは違ひ、滑らかで美味かつた。レモンの輪切りが一寸添へてあるのも氣が利いてゐた。

今日の晝飯には珍しく五目すしがあつた。郡山の家で手作りのおすし——それに味も何も酷似してゐるのが、物懷しく思はれた。

二三日前か、日本弘道會員東京高師の教授××氏が倫理學研究の爲獨逸に行かれるといふ事を聞いたが、今日サロンでS伯やM夫人等を交へて快談した。倫理學の研究に渡獨する——一寸私はおかしい感じがした——。今日は夫人から、その令嬢が幼少の時病弱だつたため、ある寺院に轉地療養させた、ところが「門前の小僧習はぬ經を讀む」といふ諺通り、何時の間にかその令嬢——現在同船のM子嬢がお題目を覺え、讀經をさへされるやうになつた。

あの恐ろしい震災當時の事だつたさうだ。M家の御別莊が潰れこの令孃のおられた處もその難に會はれた。折から隣家に庭造りの職人が大勢は入つてゐたため掘り出されたが、身に一塊の土もついてゐなかつた。不思議にもこのM子孃の身邊だけには色々の物が支へてゐて、丁度かこつたやうに空いてゐたさうだ。その時地上にゐた侍女等が心配して、頻りにその令孃の名を呼んでゐると、思ひがけない地下に聲がして

「大丈夫よ、私は……」

「何をしてゐらつしやいますか」

「お題目を稱へてゐるのよ」

かう言はれたさうで、この奇蹟的の復活以來益々信抑を增し、この頃は到頭父君さへ珠數を懸けるやうになられたとのことだつた。

今日はこの船にプールが出來、カンバスに水が盛られて幼い人達は大喜びらしい。キヤツ〳〵と言ふ聲が折々聞える。M家の坊ちやんJさん——活潑なお子さんだ——生憎お腹のため發熱し、末だ出て來られない。若し起きて居られたら、さぞ喜ばれるだらうに——變化の少いこの船中の明け暮れを考へて、痛はしくさへ考へられる。

私も追々この船の生活にも馴れたらしく、稍樂に身仕度も出來るやうになり、面倒さも減じた。なる程、人は適應性に富んでゐるものだ。

六月六日　晴

案外早く今朝は起きられた。この地名物の驟雨がやつて來て、珍しく清涼な氣が室內に滿ちた。

「ああよかつた」涼しさに元氣付いた自分は、滯滯することなしに用意が出來た。今日は又檢疫だといふことだつ

た。甲板に出て見ると、もう可成りの人が出てゐた。然し例の兩夫人が出て居られない。——やつぱり一等船客は宜いのだ。上陸する人だけの檢疫らしい——かういふことで、折角の早起きは無駄だつた。然し又その御蔭で、三菱商事からの出迎ひで直ぐ敏活に上陸が出來た。これも偶然早起きの得だらう。直ぐ岸壁に船が著いたので、誠に樂に下船することが出來た。迎ひの自動車二臺に分乘して、吾等一行は先づセントラルホテルといふ——日本人經營の——に著いた。ここは三階に室が取つてあつた。——日本間の十疊位はあつたらう。久し振りに坐る靑疊——坐布團、派手な浴衣を著た若い女中——この家の女將は、面長な粹な樣子をした——何處やらS未亡人に似てゐた——浴衣の上に黑い薄羽織をはふり、挨拶に下げた頭は切り下げだつた。

この頃は東京でさへ、可成りな老婦人も寡婦になつて尙小さい髷をのせてゐるのに、うち見たところ、未だ四十代かと思はれるこの婦人の切髮なのは、一寸私には意外に思はれた。殊にかういふ商賈人の主婦としては——兎に角中々如才ない愛想ぶりで、口數少く引下つた具合は、可成り心得てゐる者らしい。

ここで久振りに浴衣に著代へ、伊達卷にくつろいだ氣持は、出帆以來初めての快さだつた。そのうち風呂が沸くあるじが先づ試みには入つてみる。

「大變綺麗で湯がだく〳〵溢れてゐる。氣持がいゝから、さあは入れ〳〵」

かう言つて、貸浴衣に着代へたあるじは、如何にも輕々と愉快さうに見えた。何しろ立つ時、だら〳〵急で、仕度が一時になつたため、浴衣さへ入れなかつたあるじは、流石の洋服好きもこの暑さに浴衣がけの身輕さは忘られなかつたのだらう。

あるじの試みに安心した私は、これも同じく貸浴衣に代へて風呂場に行つた。」

なる程、廣々とした浴室で、約二十疊かもつとあるように見えるその一隅に、風呂が長方形の石造で設けられ、だく〳〵と湯が溢れてゐる。初めは少々氣味惡かつたが、何しろ灼くような暑熱の折柄この玲瓏たる水の魅惑には勝てなかつた。

久振りで日本風にゆつくり浴槽の中に跼んで汗を洗つた時の氣持は何んともいへなかつた。座敷に戻ると直ぐ晝飯の用意が出來てゐた。

「どうか食堂へ――」と女中が言ふ。おや〳〵食事だけは西洋風か、それでは折角の浴衣も著代へねばなるまいと少々がつかりし乍ら立ち不ると國男が來て

「浴衣でかまはないんだつて」

然しこれなりでは餘りだと、その上へ直ぐ帶だけを結んで一階の食堂へ下りる。

そこは丁度私達一行にふさはしい位の小部室で、卓子の上に赤い御膳が並び、お碗――といふ風に箸や茶碗が並んでゐた。

熱帶の有難さは、先づ私の眼についた御膳の上の水々しい胡瓜、漬物のたくわんなどの鮮かな色であつた。暫く私は箸も取らず眺め入つた、

「あゝ、久振りに見た漬物――御膳――何といふ懷しさだらう。僅未だ一月を經た許り、それでさへこんな氣がする」かう考へては果しもない――周圍に促されて漸く箸を取つた。更に又第二の追憶が私を捕へた。彼あらば――胸は絞るやうに引締つた。これはいけない――かう思ひ返した私は、危く現實に自らを引戻した。

お菜は豆腐の汁、燒魚――一寸小鯛のやうな――青葉のひたし物、里芋の煮つけ、筍など、渴望してゐたお茶づ

けさら〳〵とかき込んだ。

ここに配膳する馬來人は十三四位の男子で、英語も解し得なかつた。

「それでもまあ〳〵日本料理が喰べられて良かつたわね。ではこれから見物に出ませう」

かう言ひつゝ、私は立つて身繕ひした。

折から驟雨漸く霽れて、凉風がすが〳〵しく街路の塵を沈めた。

この三階からふと見ると、下にはここの小學校らしいのが見えた。何處にも變らないのは兒童の可憐さで、繩飛びを盛んにしてゐた。この室から見下す市街の有樣は、これも亦千態萬狀、白人あり、黑人あり、支那人もあればこの地の馬來人もある。各種の人々の間に立つて、黑人は愈黑く、白人は愈白い。

黑人の好んで紅の色を著けてゐるのが、初めは婦人かと思つたが、よく見るとそれは男女の別無く皆紅を裝つてゐる。丁度子供が赤い色を好むやうに、單純な彼等の頭には、此强烈な色彩が殊に刺激的に好ましく見えるものらしい。漆黑な半裸體に、遠目で見るとこの紅の色のみが眼について、薄暮の巷には私の覺束ない視界の裡にも、殊に際立つて見える。

「おや、何時の間にこんなに自動車が集つたのだらう、小學生徒の迎へらしいぞ」

「オーライ〳〵」かういふやうな呼聲で馳ける窓の下には、なる程かの校門に自動車が充滿して、人通りさへ妨げて見える。然し、ここがこの呑氣な世界の特色で、喧騷する聲も餘り無く、行人は急がず騷がず靜かにその散じ盡すのを待つてゐる

行通整理の世話も無く、驟て又何時の間にか四散して、元の靜寂に返つたこの街路には、支那そばやの笛の音が

する。丁度故國のそれを思はせるやうな——

「さあ〳〵見物だ〳〵、まご〳〵すると日が暮れるぞ」

あるじが促し立てるこの聲に、それぞれ又用意が始まり、旅亭のあるじの豫て用意の刷物に依つてほぼ目星がついて、一行は又自働車に分乘した。

運轉手は二人で、一人の方は中々地理に詳しく、如才無い男だつた。

「私は決してブレーキを使ひません。だから車が倍も三倍も保ちます。注意さへすれば、車のためこれが一番良いのです」かうこの運轉手は自慢さうに言つた。

なる程、このシンガポールなればこそ、そんな事も出來るだらう。あの東京の芋を洗ふやうな中で、果してそんなモットーが貫徹するだらうか——私は心の中でさう思ひ乍ら、あるじが頻りに褒めるのを默つて聞いてゐた。運轉手の一人は馬來人らしかつた。

軈で車は、椰子の影高く棕櫚の木の密生する街路を、右に左に馳驅して植物園に著いた。見渡したところ、規模はさ程の宏大さを感じなかつた。

只私は、眼前の視界の外に逝きし彼の佛のみ彷彿した。

さうだ、彼あらば——あの大きな聲で熱狂するやうに喜ばん彼——細やかに、かの大きなる掌の中に花瓣をつまんで、

「ほら、こんなに幾重にもなつて咲いてゐる。お母さま、あゝ、この匂ひ——この——色」

かう言ふであらう彼の姿態や情景が、容赦無く私の視野を遮つた。

涙してわれは仰きぬ椰子のかげ俯しては泣きぬ花の數々に

そこを出て回々教の寺に行く。一人の馬來人の僧侶がゐるのみだ——ここでは履物を許されない——滑るやうに磨かれた極く低い大理石の階段を三四階上ると、更に一寸廣い——二階ならば「踊り場」とでもいふやうな——一隅にテーブルが置かれ、可成り大きな洋綴の帳簿のやうなものに、各自其邦字で署名させる——

それから中央の會堂に入つた。そこは一週一回、僧正が來られて說教がある——明日は丁度その日に當る。かう聞いては、一日違ひで惜しいことをしたと思ふ——そこには格別禮拜すべき本尊めいたものは無い。高い天井に吊されたシャンデリアの影が、この滑るやうに磨かれて、八面玲瓏たる大理石の床に映寫して、人氣少いこの寺院の中に立つた時、國籍を異にする私の胸の中にも一種の莊嚴さが滿ち〳〵た——折しも紫色の光線が、神秘的な色を階上の窓のステンドグラスを通して投げてゐた。

あるじも同感であつたと見え、かの番人らしい馬來人——やつと片言の英語だけ解する——を手招ぎし、床の上に跪づいて禮拜の形を做つた。

かういふ時、あるじは平生の氣輕さで、直ぐこの態度に出られるのが羨ましい場合もあつた。この時もやはり、私には躊づきたいやうな氣分は有りながら、容易に從ひ得ない私の心持があつた。然し彼の死後、靈界を思ふことに切になつた私の心の中には、以前のやうに無關心に神佛に對することが出來なくなつた。ここでもやはり私は、ある感酩が自らを涙ぐましくさへした。

然し、何處も變らぬのは物慾に對する人間の淺間しさで、この超世間的な馬來人の番人も、歸りにショウフアーが氣を利かして渡した若干の金錢には、笑ましげな面持ちを見せた。愈々一行が歸らうと以前の階段を下りると、

意外にもそこには故國で見る通りの乞食が、何か分らぬことを呟き乍ら手を出してゐた。

運轉手は更に左の方を指さした。そこには古代の羅馬を思ひ出させるやうに、滿々と水を湛へた——これも大理石造の廣い〳〵池があつた。上には屋根があるので何かと聞くと、そこはこの寺院に參詣する信者が、皆ここに水浴して身を淨め、その後この階を上つて神前に禮拜するのださうだ。

ふと私はある洋書に依つて見たことがあるクレオパトラの浴場——久米正雄氏に依つて譯されたある夜のクレオパトラ——の情景を思ひ起さしめた——。

次にジョホール王の宮殿の一部——政廳の如き所に案内された。

「今、王樣は歐羅巴へ修行のために行かれて、お留守なのです。この頃はやかましくて中を見せませんが、時と場合で見せることもありますから、一寸聞いて來ます」

かう言つて馳け出さうとするのを、もう一人の助手が止めた。

「この頃は中々やかましくなつて駄目だよ君」

然しその聲を後に、默つて馳け出した運轉手は、中々氣の利いた男だつた。

「到頭見せることにしました。然し全部とはゆきませんが——」

意氣揚々と彼は言つた。幾ら南洋でも、王宮の中ならば——誰でもかう思つたに違ひない。廳て印度人らしい體格偉大な、銃劍を著けた番兵が出て來て、一行を凝視しながら、それでも默つて立つてゐた。

すえ子などは流石に一寸氣味惡さうだつたが、この旅行によつて可成り物馴れた彼女は、格別もの怯ぢした風もなく、靜かに私の側に著いて歩いた。

「ここは大食堂です」——なる程可成り廣々した室で、四隅には大きな花瓶が——約六尺以上もあらうか——支那燒の大きなのが置かれてあつた。その傍には、更に水でも盛るのかと思はれる黛赭色の、直徑あれでも三四尺位あらうかとも思はれるのが置かれてあつた。多分大饗宴のある毎に、花でも盛るのであらうか——がらんとしたこの室內には、この南洋の輝かしい日影も入らず、一種むれ臭いやうな匂ひが、先づ私の鼻を打つた。

次の室はやはり中央に卓子があり、以前よりは少し小さい食卓らしい。これは多分王樣が出廳の折々、極く近侍の者のみ食膳に陪せしめる所であらう。その外には、さのみ目を止める物も無い。次には圓いエキステンションテーブルが、中央に置かれた室に導かれた。これは前より更に狹い。

なる程この南洋邊りでは、可成り土人に驚異の眼を瞠らしめたであらう——番人はさも驚く可き物のやうに如何にも誇らしげに、それを擴げたり縮めたりして見せた。然しもう吾々の家にさへ、今は珍しいものではなくなつたこの式のテーブルは、折角御自慢のこの番人を喜ばす可き言葉も表情も誰の口からも出なかつた。

さあそれではこれだけで——と言ふ聲を後に出やうとする次の室には、幾つも並んで長方形の卓子の上へ、澤山の硝子——切子——細かいのや大きいの各種の形のものが山積してゐた。聞いて見ると

「王樣のお留守中に、皆このシャンデリアの掃除をするのださうです」

運轉手は通譯してかう言つた。良く見るとなる程それは、皆その器具の取外したものだつた。格別監督者らしい者も無く——あの一人の印度兵の他には——かうやつて委せ切りでゐる。單純なる彼等の、總ての生活狀態を思はされた——。

それから程無く、車は先王の墓所に著いた。墳墓と言つても、それは決して故國で見るやうな山陵では無い。

ここも亦、大理石の輝くやうに磨き出された殿堂の中である。以前見た寺院の通り、名簿に署名して案内された
これは今の父王ので――打見たところ六尺以上もあるかと思はれる高さで臺の上に据へられてその靈柩があつた。
これは全部英京倫敦で製造させたものださうで――なる程實に立派に彫刻された黒色の、玉のやうな大理石造だつた。その周圍には、立體的の小さい大理石の墓が、幾つもあつた――
「これはお子さん方のお墓で、この赤い色のが、お妾さんのお子さんです」
運轉手は一々説明した。
かうしてこの大いなる先王の柩を圍つて、尙幾つもの靈柩がその周圍に置かれてあつた。最も面白く思つたのはその靈柩の一番上が開けてあつて、その上に花盛り臺が置かれてあることだつた。
「かうして開けてあると、花の匂ひが底迄透るといふのださうです――」
この花は、南洋特産の木蓮華のやうな白い厚味のあるのや、蘭の花その他色々の匂ひの高いのを、花許り摘んで供へられてあつた。ここでは大理石の床の上に履物が許され、所々に禮拜する時跪づかんがため、敷物さへ置かれてあり、傍には經文だといふ、厚い〳〵洋綴の本が本立ての上にのせられてあつた。
開けて見ると、全く私には未知の、一寸我國の隷書に似た文字で書かれた――細さ太さの際立つた――サンスクリット風の文字であつた。ここでも亦署名して、例の通り小さいチツプが、運轉手から案内者の手に渡された。
私はこの殿堂の中で、供へられた花の匂ひを一々手に取つて嗅いでみた。そうして故國の墳墓が皆雨晒しの儘地上に置かれてある、無慘に似たやうな痛ましさを思つた。
往年西村の父上が、土葬の儘養源寺の墓所に眠られてから、その墓石の建てられる迄の一年間――否それ以後に

於ても――風雨の烈しい夜々、幾度私は堪へ難い痛ましさ――この家の中にあつてさへ尙騷がしい折々――生前父上は風が大お嫌ひであつて、
「俺は何も恐ろしいことは無いが、どういふものか風の音が大嫌ひだ。萬里の長城といふやうなものがあつたら、俺がその中には入つて風の音を聞かずにゐられるがなあ」
かうさへ言はれた父上が、如何に亡後とは言へ、この暴風雨の夜、唯一人淋しく地下に眠つておられる――かう考へると私は堪へ切れなくなつては幾度飛び起きて、夜、夜中でも墓所へ行かうと身繕ひしたことか。
「なんだ今頃飛び起きて、一體お前は何をする積りなのだ――」
あるじが驚いてかう大聲で言つた。
「お墓參りがしたいのです」
「しつかりしてくれ、この夜中に、ましてこの嵐にどうして行けるのだ」
床の上に瞑目して、私は暫く心を靜めた。
「あゝさうだ、皆に心配を懸け、又子供達が起きでもしたら――父上の思し召しではないのだ」
かう思ひ直して、無理に合はぬ眼瞼を合せたものだ。
本當にかういふ風に立派な殿堂の中に建てられてゐたら、痛ましさに泣くことも少なかつただらうに。
今日のお土産には、せめてこの地特有の花でも靈前に手向けたい――かう考へて花屋に案内させた。野生の蘭が灌木のやうに丈高く、堅い莖の上に淡紅色の花を著けてゐた。これが欲しいと言つたが賣らなかつた。仕方が無い何といふか蘭のやうでとりどりの色美しい葉を持つた植木を、鉢の儘二つ買ひ求めた。一鉢五十錢だと言つた。何

しろ肥料も何も開け放しのこの園内は、這入ると直ぐ惡臭が鼻を衝いた。「厭な蟲にでも螫されると大變ださあ歸りませう」と皆を促して、そこそこに車に歸つた。

「洋服が足り無くて」豫てからかういつて頻りにせがまれるので、最後に馬來人が出してゐる店に寄つて洋服を注文した。

「おばさんこれ宜しい」かういふ故國の言葉をこの馬來人から聞いたことは意外だつた。ここで到頭すえ子と咲枝は白い服を命じ、明日出帆迄には、是非間に合はせると言ふことになつた。

私はその間、彼女等の選擇の手間取れるのに痺れを切らした。考へて見ると今夜國男の小學時代から中學迄一緒だつたT氏といふ方が、六時迄に宿へ訪問する約束だといふことに氣が付いた。さあ、大變だ。私は國男と一緒に先に歸ることに決めて、宿へ車を飛ばせた。

「今の先そのお方が見えて、お留守なら又少しして來る、と言つてお歸りになりました」

女中がかう言つた。

「それだもの本當にお氣の毒なことをした」

かう言ひ乍ら女將に命じて、夕飯の卓に更に一人を追加せしめた。

約三十分餘T氏が見えた。私とは度々會つたことがあると言はれるが、更に見覺えが無い。見たところ中肉で少々小柄な方だ。中々如才無さうだが、然し堅實な人らしく窺へる。

「お父さんがお出でのやうに新聞に見えてゐるので若しかしたらと注意してゐたら、今日の新聞に出てゐたので喜んで——」

かうした話の中に食卓が開かれた。例の下の小室で——肉のすき燒と、ふろふきだいこ——松茸のは入つたお吸物——その他二三品があつた。特にこゝの名物だといふ小指位の小さいバナナは、食後の口に旨かつた。

「これから街の方を歩きたいと思ひますが、いちつしやいませんか」

かう言ふT氏の言葉について、唉枝も一緒に行きたいと言つて出て行つた。そして二人は向ふから直ぐ船へ歸りますと言つたので、私達は別に船にかへり明日の疲勞を考へて、十時頃眠らうとしたが、相變らずの暑さは中々思ふ通り寢室に私を導かなかつた。上のAデツキであるじと涼み乍ら冷い水を飲むうち、彼等は歸つて來た。十一時頃だつたらう。「支那街を通り、芝居を覽たり色々の珍しい物を見せて貰つた。——大變面白くて——」

「まあそれはよかつね——」

こんなことを言ひ乍ら、少し涼しくなつて來たのを潮に吾々は室に歸つた。卓上には飛行家H氏からの贈物だとあつて夏蜜柑、餘のかぶら骨の粕漬などがあつた。

この二三日の暑さで私の汗疹は勢を增した。「あの恐ろしい瘍が出來たら——この脅威で餘計私の神經は疲れるのだ。然し何しろ熱帶のことだ。每夜の暑さはベツトの上に形の儘汗の跡を印した。これはたまらない。Fドクトルにでも相談して來ればよかつた。又しても後悔しては愚痴をこぼした。意氣地無い——かう思ひ乍らも終夜輾轉反側して寢られない上に體中の汗疹——痛く且つ痒く——

然し實に奇蹟とも言へよう、私の隣室にかの皮膚科の泰斗土肥博士門下のH氏が乘つて居られ、他にも內科の學士が獨逸留學のため船を共にされてゐた。甲板で御會ひした同氏は溫厚らしい中年の好紳士であつた。私のこの容態を聞いて、

「それはさぞ御難儀でせう。皆とも相談して、兎も角あの錫を少しづつ豫防にあがつてゐらつしやるやうにしましよう。幸ひこの船醫が持ち合せてゐられるさうです」

かういふことで私はこの日から、日に一回づゝその鑛物を飲むことにした。

「まあよかつた。これで助かつた。もう決して愚痴をこぼさずに安心してゐられる」

かう考へて私は實に安易な氣持になり得た。尙この方の話で、土肥博士が不治の直腸癌に罹られてゐられることを聞いた。

「何しろ人造の××なので、公會の席は總てお斷りしてゐられます」

これを聞いて私の心は暗然とした。これ迄私は土肥博士を單なる皮膚科の泰斗としてのみ考へてゐた。ところが去年だつたらうか、帝大教授の榮職を辭し、社會、人道のため貢獻されんため病院設立の企圖あること、及びその如何に人格者として高潔な方であるかについてさまざまの例證を聞くに及び私の敬仰の念は深められた。

土肥博士といふ方はそんな方だつたらうか、有難い——とかく吻慾にのみ囚はれがちの醫學界の中に——殊にこの科には珍しい硬骨の賴母しい博士だ。病院設立の時は心許りの御寄附にでも應じたい——かう考へてゐたのは何事だ——今更ながら私は天道是か非かと考へずにはゐられない。

ここ迄書いて私は一昨日ホテル・ジョホールで、歸りがけにお茶を飲んだのを書き落したことに氣が付いた。その日朝から方々見物した私は、珍しくお茶を飲みたくなつた。ホテルジョホールといふまるで活動のフィルムに出さうな如何にも荒廢したやうな、然もそれでも中々日本では見られない程莊大な石造の一室に、馬來人の給仕人の手でカステーラ、ビスケットなどで紅茶を飲んで、やつと一息ついたのだつた。

泰西文明の餘波はかかる南洋の一隅にも及んで、至る處不自由を感ぜしめない——人力も亦偉なる哉、と思はずにゐられない——

六月九日　晴

愈船は印度洋に入らんとして、暑熱は益加はるばかり——かう覺悟した吾々にとつて、今日は案外惠まれた日だつた。

波のうねりは幾分高いが、然し船酔ひする者も無く、從つて食堂の一人の落伍者も無かつた。

例の室の横のデッキへ今日も出てみた。誰もゐない心易さに、浴衣がけの儘涼を入れてゐる。

ふと見るとこそには一人の支那婦人が、素足の儘支那服に——流石よく洗濯された木綿の白い上著に黑いスカートを著け、耳輪など下げてゐる。年頃は三十餘位で、可愛い〳〵赤ちやんを抱いてゐる——白人の子らしい生れてやつと百日位に見える。ブロンドの髪、星のやうな眼——圓くなつてアマの手の中に抱かれてゐる。軈てそこへ更に二人の子供が出て來た。一人は三輪車に乘つた五つ位の男の子、續いて三つ位の、漸く歩けるやうなこれも誠に可愛い——女の子らしい。

この女の子の腰に、紐がゆるく結ばれ、その紐の端を持つた若い母親があつた。

船舷がかなり搖れるのも無頓着に歩く子供の足が、右に左によろめくのを支へるため、かうして監視するのだらう。

婦人は年の頃三十に成るか成らぬ位、歐洲人特有の色の白皙なのに、輕々と純白の薄物を著てゐる。

かう云ふ時にも眼の惡い私には、眉目の微細な點は看取し得ないが、細つそりした首すじから、すらりとした足下まで餘り見かけない位整つてゐる。

軈て婦人が「アマー」かういつて何か話しかける言葉は、決して英語では無い。恐らく支那語だらう。何かこのアマにいひ聞かせてゐたらしく、軈てその婦人は

"Oh, my darling!" かういつてその赤子の方は、如何にも愛撫に堪へないやうに頬摺りした。

私の眼底には又しても熱い涙を感じた。

「さうだ、その通りだつた——」彼英男の幼時、如何に私はかくの如く彼を愛撫したらうか。彼が病む時々私は身命を賭した。彼死なば母も——かう思ひつつ看護する私の誠心は、遂に幾度大患から彼を救ひ得たらうか——

三輪車を乘り廻すには、この甲板は側面であるため特に狹かつた。私はこの可愛い兒童のため、自分の椅子を壁際に押しつけた。"I am sorry" 優しく母夫人は私にいつた。社交的に馴らされたとはいへ、それは如何にも上品で人懷かしい語調だつた。

そしてこの一家族は、また人を煩はすのを憚つたのか、間も無くこの甲板を去つた。

折しも太洋上の落日の影——赤、青、紫と五彩目も眩むばかり壯大な色を空に印した。間も無く夕食の鐘の音がした。用意のため私は室に歸つた。然し私は今見た甲板上の家族を忘れることが出來なかつた。

國籍を隔てぬは人の情だ。かく愛育する吾子のために、身命をさへ惜まぬであらうこの母——いとほしく可愛い幼兒達の將來はどうか——

やがては觸れん濁世の流れの中に、この純白玉の如き彼等の心は如何に浮沈せんとするか——

愈船は印度洋上に進まんとして、風浪いよ〳〵高く、暑熱のいや益すのを感ずる。けれど夜半過ぎから風室内に入ること多く、意外の凉味は私の肌を乾かした。

ひたすら暑熱を恐れてゐた印度洋上の一夜は、かくして吾々の心勞を全く杞憂に終らしめた。

昨夜も亦かの伯爵に、青年團についてのお話を聞いた。

彼等の嗅感を敏感ならしむるため、香を嗅くといふことを考へつき、丁度U伯爵御夫婦が其道に堪能である事を聞いてお邸に伺つたことがある。何しろ敏感なものなら——何をさせても秀れてゐる筈だから——

「それは非常に面白いお思ひつきです。もう過去の遺物となり果てたやうに思つて居つた——香を嗅く——それが今になつて尙活用されることは、さぞその道の宗匠達は喜ぶことで御座いませう。然し敏感な者はどうしても體が弱くはないでせうか」

かう私はいつた。

「いや敏感でも病的でさへ無ければ、決してそんな心配は無いやうです」

さあそこが問題だと私は思つた。

病的で無く而も常人に卓越した敏感さ——健康——私はまた考へさせられた。

更に伯爵はいつた。

「何しろ子供は希望を持たせなくてはいけない。嫌だと思つたら直ぐ止めさせることだ。學校でもなんでも——」

私はハツとした。

さうだ。彼も亦學校生活を最後まで樂んでゐたか——

今日偶然あるじがトランクの中から見つけ出したといつて「釋迦の歩いて來た道」といふ小冊子を渡した。

「處々ラインを引いてある——あれは確かに英男が讀んでラインを引いたものに違ひない——どうだらう？」

かういふあるじの言葉は、私の胸に刺つた。ああまた私の思ひ出の種が殖えたか——そこには「俺に似てゐる」と書いてある處もあると、更にあるじは何氣無くつけ加へた——

今朝偶然朝餐の卓を終らんとする時、背後の窓から小さいしかし私にとつては最も珍らしい龍卷を見た。海上の眞只中から虛空に通ずる一直線、それは白く——霧の如く、乘客は一齊に食事を捨ててこの窓前に蝟集した。

六月十二日（晴）稍凉

此聞くだけも恐ろしい暑熱を想像させる樣な印度洋——それがふしぎにも此大洋に入つてから連日曇りぎみで眼鏡を眞黑いのにしては——などの心配は杞憂に終りそうで何よりうれしい。

もう明日はコロンボへつくといふのでかの有名な佛爪寺に參らうと見物の豫約に入れてもらふ。

そして田舍へのみやげには是非何か本場の此靈場參拜の記念品を買つてよろこばせたい——かう思ふとあの留藏市次郎、おけさその他の眞黑い田舍の人達の單純な顏付きが目に浮んでそのおみやげかひたさに私の遊志はしきりに動く——

昨夜あるじのはなしによるとそこには又一婦人の身で一人の子と共に夫に死別して寡婦と成り軍艦の廢艦を寄宿舍とし不良少年少女の感化につとめてゐる人がゐるといふ——あゝ尊事だい——

惠まれた人だ——高德の人、偉大なる人格者——私たちは天質及ばない事はわかつてゐる、しかしせめてはその

活動のようすを聞いて其幾分もまねたい——彼が天上にほゝゑまん事かゝる事業をおいて他にあらうか——

昨夜あんなにむくんだ足が今朝はひいて氣分がいゝ、ドクターにおしらせして御禮をのべる、これでまづ一時的の脚氣ときまつてやゝ安心する。

國男がその後やはり熱が高い、明日は皆キャンデー行のつもりでゐたが、この發熱でどうしようかと私も考へるしかし彼等は若く又見物する可能性がある老人夫婦だけでも私のからださへよければ行かうと決心する。

よく聞いて見るとそこは釋尊の齒を埋めた寺で佛牙寺といふのだそうだ。

六月十三日

今朝は早起きをしなければならないといふので昨夜はむりにも早くねてしまつた。

七時半か八時頃だつたらう——兼て船員からも是からかなりゆれるだらうと警告された通り中々ひどくゆれて來た——

水平線が高く或は低く窓の外に上下する、まづどうかとあんじた國男の熱が今日も亦下らない單なる咽喉風かと思つてゐたが一寸氣に成る、しかしドクターは何處にも異狀がないから安心するようにといふ事だ。

そこで大奮發で朝六時半頃おきてそれ〴〵仕度にかゝる、——前日の髮で顏も一寸ふいたぎりの心安さ、我ながら洒落氣もなくなつた——一面にいへば心情の枯渴——一面には又悟り切つたともいへよう——

こんな容子でごく手輕に從て極短時間に身じまひがすむ。「お出かけの方だけはお早く——」といふ事で食堂も早く開かれる。

あつさり食事をすませすえ子はMさんや何かゞ御留守番だから私もお留守居して皆さんとお遊びする方がいゝかういつて居殘つてしまつた。

不相變性急のあるじに何か追ひ立てられる樣な心持で取るものも取りあへず船の方へ急ぐ——今日はいつもの會社の人の顏も見へずはしけといつても中々立派な小蒸汽だが眞黑い人ばかりがせわをやいてゐる、一寸途惑ひのきみで立つてゐると、そこへあるじも來るし又船員の人の顏も追々と見へ漸く安堵する。

間もなく一ぱいの乘客をのせてこのランチが出る——

やがてすばらしい防波堤を過ぎて船はついた。

行屆いた英國政府の手はこゝにも亦其腕前を見せて堂々たる港内であつた。

「こんなに完全な防波堤は何處にもあまりあるまい——」讃嘆しつゝあるじはいつた。

しかし視力の乏しい私には何ら其特徴をさへ見出す事が出來なかつた。

こゝで下りた一行は忽ち又此熱帶の眞晝中赫々たる陽光に衿元をやかれた。

「これへおはいりに成つては——」

かうやさしくいつてT老婦人は絹張りの日傘を貸し與へられた。

遠慮する餘裕もなく私はそれを恭く受けた、間もなく自動車の配置はつき私はA氏といふ船客と同乘した。

運轉手も助手も皆眞黑い印度人だつた、しかし操縱はいかにも巧みで敏捷なものだつた。

數哩でこゝの國王の離宮の樣な處につき木の間を無邪氣に飛び交ふ栗鼠や、大木の根が犬位はらくにくゞれそうに彎曲してゐる——其頂天を目のわるい私は烏がむれ飛ぶのかと思ふとそれが蝙蝠の大群集で、あの折々繪で見る

通り一寸爪先で木の枝にぶら下つてゐる——と人々は珍らしがつてゐた。

「これがあのよく聞いてゐる——人の血を吸つていつの間にか死に迄導くといふ恐ろしいのか——慄然として私は益群を增して飛びかふ天空を仰いだ——

それから更に行つたのが植物園でかの恐ろしいゴブラや鰐——これはどうかして弱つて物を投げても動きもしない。それから毒蛇もゐたがあまり巨大でなく色も鼠色の普通なもので何ら恐ろしい感じを與へられなかつた。

園内には熱帶植物らしい强烈な色彩を持つ花の多くが咲き滿ちてゐた。

カンナらしいのがこれもさま〴〵の色で盛りに見へた

カンナ咲きぬまづよろこはん英男あらす

神前に手向けて涙更に新なり

こゝにも亦この舊作を思ひ出さずにゐられない噫——

故國をいでゝ既に數十日纒綿として盡きざる私の悲しみはこゝにも亦其情を新たにして低廻さるに忍びざるものがあつた——。

それから更に車を馳せてクキンスホテルに行つた。

熱帶地にふさはしい非常に窓の多い開け放した樣な此ホテルには黑人のみが客の間に斡旋してゐた。

その中にかなり年長らしいウエターが頭に櫛形の大きなピンをさしてゐた、あるじが聞いて見るとそれは佛教徒のしるしだといつた。

流石に印度だ——これでは飲酒や總ての遊興に浸る事は出來まい。

面白いシンボルだ――と思つた。

言葉は英語が立派に通じた。

三皿ばかりの洋食に――ライスカレーは有名な熱帯獨特の食物だ、食べて見ようと、とつて見る――成程一寸洗ひ米の樣にさら〳〵して辛いカレーに色々のやく味がそへてある。

流石に名物だけあつて決して馬鹿に出來ない味がある。

くだものには小さいバナヽと生のパインアツプル――熱帯だけにかういふものには特殊の味とかほりがある

それから呑物だけの料金をはらひ、寫眞帳や畫はがきを買求めて又更に自動車に乘つた。

こゝには多勢の――かの青年團が一しよにゐた、しかし誰も取締りとなるべき年配のものも見へずいつも〳〵われ〳〵の自動車をかけぬけるのも此一隊だ、私は監督するものもなく、此青年達を自由に放つ事の不利な事を感じる。實に其態度や總てがいかにも訓練されず殊に折々われ〳〵をかけぬけては先頭に出たりした。

「いけませんよ、あんなにスピードを出しては――三十哩以上に成るとあぶないものです、私もそれには經驗があります、もつとゆつくりいらつしやい」かう私はいつた。

それから佛牙寺まで又かなり走つた。

何しろあとで聞くと往返ほとんど百六十哩、歸りには又頭が寒く貧血してあるじの帽子を借りて顏にあてゝゐたやつと辿りついた佛牙寺にはおりるとすぐ乞食の群が三々五々集まつて來た、何處でもある事だが國を異にした此種族のは殊に恐ろしい感じがする――

是から先は徒歩でなくては行かれない、何しろ風を切つて疾走してゐる中はさのみに思はなかつた強烈な日光が

赤道に近い猛威をわれ〳〵の上に逞うした。

又日傘のご厄介に成つて階段を上り〳〵やつとその寺門に辿りついた。

何でもそれは一枚石を全部刳りぬいたのだと案内者はいつてゐるが果してどうか解らない、修繕した爲だか意外に新しい――正面に安置されてある箱の中は或日を限つて信徒のみに禮拜を許す寶物があるさうだが、生憎今日は其日でなく見物する事が出來なかつた。

こゝにもやはり木蓮花のやうな香氣と厚い瓣をもつた花の色々が花瓣のみむしつて供へられてあつた、私も少しを買つて供へた。

あとで氣の利いた船員の一人がその花の多くを買つたのを一輪もらつた、しかし大切に持つて來た甲斐なく神前に供へない中殘念にも萎びてしまつた。

此頃はそれでも思ひ付いて毎朝一人前づゝお茶とくだものとを供へるので少しは私の氣がすんでゐるが――とにかく此佛牙寺の印象として殘るものは其いかにも素朴な事で私の期待した樣な――當時の古蹟ともいふべきもの、或はその傳統的に殘された高僧――說教等の記錄――そんなものは皆目なかつた事が殘念だつた、しかし佛滅後數百年、かゝる異國の者さへ渴仰の念をもつてこの佛蹟に足をとゞめしむる――偉大なものは哲人の足蹟だ。

かうして佛牙寺は極幼稚な裝飾や色彩で飾られてある事を考へながら見物を終つた。

何か田舍へおみやげに成る樣な――聞及んだ菩提樹で造つた珠數でもあれば――かう呟いて自動車へ乘ろうとする丁度そこへ見るも恐ろしい形相をした印度人が其珠數をもつて賣りに來た、何でも四連ばかりで一圓だといふ、しめたとばり私は喜んでこれを買ひ一行と合して車は走つた。

何しろ往返ほとんど同じ道なのであまり興味はわかず從つてひどく其道程は長く感ぜられた、例の通り頭がいやに冷く成つたのであるじの帽子をかりて前顏を蔽うた。

大變この工夫はよかつた、間もなく貧血狀態から回復してみかどといふ店についた、こゝは自動車の世話をしてゐる店でおみやげものを澤山賣つてゐるそこにかのめづらしがつて買つた珠數も澤山あつた、そして非常に廉價だつた。

やつぱりだまされたなあ——と思つた。

「先刻、奥さんが土人に高く賣り付けられていらつしやつたのを見ましたが商賣敵のように思はれるのでだまつてゐましたが。」かうその店の番頭がいつた。

しかし例の通りで私にはよくその顏に見覺へはないがあるじなどに聞くとやはりゐたのださうな。こゝで更に珠數大房二連——一圓でかつた、まあこれで田舍へのみやげも出來たとうれしかつた。

その店に又一寸東京の麥わら細工に似てそれよりは細かく奇麗に出來てゐる——一寸シガレットケースの大きい樣な——かぶせ蓋で色とり〴〵に面白いのがあつた。

私はこれを唉枝とす江子に買つた。

Dさん御夫婦は此店で何か首飾りの樣な寶石を買はれた。

その間にあるじは別の店でホールドオールを買ひ、さあ歸ろうとすると時間が一時間ばかり早い、そこで更に寶石商をひやかしましようとTさんと同行の船員二人がすゝめる。

どうせそんなものを買ふ餘裕はないのだが——Tさん達はしかし見度いらしい。

やける樣に咽喉のかわいた私は思はず紅茶でも呑み度いといふとそれには是非こちらへとの事ですゝまぬながら其印度人の寶石店へ行く、日本人の岩崎小彌太さんや知名の人々の名刺を出して見せた——しかしそれは幾年前のものなのか皆黄ばんでいかにも古びてゐる。

聞くところによると此店の主人は一面識の旅人にでも大枚なものを惜しげなく無償のまゝ持たせてやり日本に歸つてからそれがいよ〳〵眞物であるといふ安心のついた時代金を送らせるのだといふ事、それでこの關東大震災の時大分損をしたといふ——これにもこりず、やはり今日も亦日本へ持ち歸つてからで代金はいゝとしきりにいふ。

印度人は中々隅におけない。

かうして異國の容を相手に國外に富を得ようとする——日本語さへ自由にはなす——私はこの世界的商業振りに感服した、そして我狹隘な故國に人口繁殖して生活の窮乏いよ〳〵甚敷生活難に直面しつゝ尙海外發展の振はざる事を考へずにゐられない。

しかし深く考ふれば是も亦人生僅五十年、家を離れ、妻子をよそに營々として財を積む……それも亦幾年の壽を保たんとするか——

佛陀のあとを尋ねて私はいよ〳〵ます〳〵人生——について考へずにゐられない、誠に此穢土を脫して出家する事——それが最善であるなら國富、國防、そをいかんとかする、國防なくして各自其堵に安んじ得べき世界、果して實現し得べきか、もし果して其實現を夢想して出家遁世するもの多き時時代はいかに進展せんとするか。

あゝ宗敎家、あゝ敎育家、誰によつて眞個の人生を知り得べきか——。

「六時には船が出ますからそろ〳〵出かけましう。」

かういひつゝ一行は、こゝにも集ふ大勢の物賣りが――乞食が――何か持たしてくれ――とうるさくつきまとふ群集をわけて埠頭に急いだ、丁度香取のはしけがついてゐた。

幾十日の船中生活はかりそめの宿ながら家へ歸る樣な心持で夕陽既に入らんとする海上を本船へと進んだ。

「アラ、お孃さんもドクターも見えますよ」

かういふTさんの聲に、そこかと思ふあたりにハンケチを振つた。

船に歸ると一時に疲勞を覺えた、行程殆百四五十哩、私にはレコード破りだつた、あまりいそいで折角買つた寫眞帳を車の中へ忘れた、あるじがすぐ手紙を出したが手に入ればいゝが――

このキャンデー行は概して私には失望させられた。

幼ない時見た釋迦八相記その中に記された、カビラ城、ランビニオン、無憂樹、鹿野苑或ば釋迦が其王冠を擲つた擅特山曰く何々――それは皆私の期待を裏切つた。

よく聞いて見ると、その總ては印度本島の事で此の佛牙寺の地には釋迦は一度も足を入れなかつたといふのだ、まあ、そうだつたのか――

まだ釋尊の事については書き度い事も中々盡きない。しかし過度の遠乘りに私は疲れたと見へ食卓へ列するのがやつと位だつた。

今日は海の花――慈善的の――を賣る爲、S伯爵が夕飯の卓で英語でアナウンスされM、Sの兩令孃が其花を賣られた、――白い菊、紅いバラ――。

六月十七日　暑熱烈し

昨日あたりから高くなつた波浪は、今日になりいよ〳〵はげしい。從つて食卓の落伍者がだん〴〵殖えてゆく。外人の群にも空席が見える。

「こんな事では夜よく閉めて寢ないと、浪がは入るかも知れません――」

かういふ船員の詞は、誰の耳にも決して快くは響かない。

S公爵夫人も亦食堂へ出られない。M令孃はもう殆んど全快に近いが、未だお室で靜養して居られる。――何となく寂寥を覺える昨今だ。

夕食の時には國男がまた腦貧血の氣味で葡萄酒を飲み、やつと回復した。之も亦私の頭には一抹の陰影とならざるを得ない。――

夜に入り船の動搖いよ〳〵烈しく、今迄の航海中一番の搖れ方だ。然し不思議な事には、すえ子許りは何等の影響を受けず、あるじも亦非常な元氣だ。何時も船に弱かつたのに不思議な位だ。老いて益々旺んな事は何よりだ。何しろ食事毎に私より倍量を攝り、而もその速度の早さ、驚く可きものだ。

夕飯には唉枝も到頭落伍して終つた。

昨夕私がベットで休息してゐると、隣室にゐる外人の子供が二人、初めは覗いてゐたが、追々大膽になり到頭室内には入り込んで來た、もとより子供好きの私は、面白がつてその儘見てゐた。丁度私が食堂へも出られず、室で夕食を攝つてゐた時であつた。

Are you not in sea sick？ とかいつて——

私は辛うじて答へた。

No, I am not と。

そして豫てこの子供等に親しみを感じた。丁度まだ口を切つた許りの可成り上等のチョコレートを、折よく歸つたあるじに托して子供らにやつた。喜びに滿ちた彼等はまたカーテンの蔭から顏を出して、わざと大きな口をあけて喰べて見せた——

私はこんな時お互に淋しい旅中のつれ〴〵を安らかに慰め合ふ事の出來ないのを竊屈に感じた。さりとて又如何にしてその親みを續け得ぬきか、またしても私は、鶴見氏の書かれた「ゆきずりの人にも親しみを感する人の多い事よ——」といふ樣な言葉によつて、離遇の傷さを書かれてあつたが、全く何ともいへない樣な氣がする——

六月十八日　驟雨　浪高し

今日はこの航海中第一の高浪だ。昨日あたりからの千波萬波更に重疊して、朝からもう足下がふら〳〵する。唉枝も昨夜來食卓に出られない。相變らずすえ子は更に痛痒を感ぜず、あるじも不思議な位平氣だ。彼女は今日どういふ拍子か、N夫人に髮をリボンで結んで戴いたが、見たところさつぱりして大變いゝ。今日は同令孃はまた熱が高いとの事、お氣の毒に思ふ。が扨どうしようもない。

「夕方はいよ〳〵船が島蔭に入つて、もつと〳〵樂になります」

かういつた船員の言葉に、夕方が待遠しい——

「どこへ行つても船中で外國人は皆平氣でゐるのに、日本人は直き醉つて終つてなさけない」

嘗て西村の父上が生前かういつて慨嘆された事が強く胸に甦へる。

「そうだどうしても食卓に出よう」

何だかいやに軀がよろ〳〵して、足下のあぶないのを、踏みしめ〳〵、それでも到頭夕飯の卓に列した。見渡すと外人の卓にも、流石に落伍者が多い——

珍しくオードブルに海苔卷が出た。例の通り何ともいへない氣持がして箸をとつた。

しかしいくら馴れてゐるとはいへ、この暑い〳〵厨房の中に吾々の爲に色々と故國のものを料理する——それは職業とはいへ、私は心から同情せずにゐられない。感慨に充ちつつ私は直ぐその海苔卷を喰べた。珍しく酢が利いてゐて甘かつた。

豫てから話に聞いて恐しく思つてゐたこの印度洋から、紅海に入らんとするところの暑さは、全く强烈なものだつた。まるで鼻を塞がれた樣な暑さだ——むせる樣な暑さが遠慮なく私の周圍に迫る。幾枚着物を着代へても〳〵まるで上半身が洗つた樣に濡れる。この狹い船室の中は、その濡れたもので一杯だ。洗濯屋は有つても、洗ひに出すと仕上げに可成り暇が要る。こんな事ならうすものをもつと澤山持つて來ればよかつた。あるじなども日本服などは全く要らないとの事で折角用意した絽の紋服を持つて來なかつた事が悔まれる——せつぱつまつて、ぐしよ濡れの浴衣をその儘上半身だけ洗つては懸け〳〵してやつと乾かす——かうして狹い船の中はいきれ切つた熱帶の風を受けて、暑さに喘ぐ吾々を刻々とその目的地に運んでゆく。而も亦吾々を、運ばんが爲、更に〳〵暑い階下の室

に火を焚く人、炊事を司る者、さてはドクターの室さへこの高熱に煽風機の止む間もないのだ——

かく營々として各自その任務にいそしむ時、私は涙ぐんでその苦難に同情する。「あゝ、不足をいつては勿體ない」

——而し夜——漸く憩はんとする時吾等の寢室の暑さはどうだ。私は思はず愚痴が出る。何だつてこんな時を選んだんだらう。冬にすればよかつたのに、而も疲勞し切つた私の瞼は何時の間にか、かたく閉ぢて、黎明の光がカ〻テンに白む迄何もしらずに寢入つてしまつたのだ——

六月十九日　晴

暑熱の烈しさに私はぐつたりして終つた。唉枝もまだ起きず、國男も亦起きはしないが、然し今朝はもうすつかり下熱して安心する。

今日はいよ〳〵船は島蔭に入るのだといふ事を聞いて吾、人、共にその時の來るの許り待たれた。

夕食頃迄はまだ却々風浪が高い。下の船室などでは遠慮なく浪が浸入して、本當の寢耳に水の騒ぎをさへ演じたさうだ、全く浪の高い時はおかしなものだ。一寸上げる足下が、「フワツト」まるで雲の上でも踏む樣に變に頼りない氣がする。そして頭の心がいやな感じに襲はれる——然し話に聞いた通り午後八時頃から、いよ〳〵島蔭には入つたと見えて、俄かに怒濤の音が靜まり、安らかに椅子に掛けてゐられる樣になつた。何しろ私の卓は前が二人後が三人で前列は別々の椅子だが、後の三人はソフアー式にベンチ型なので、風浪が高いと一人でに轟が出たりは入つたりする。滑稽だとほゝ笑むには餘りに恐怖に近い事實だ。

今日は晝飯前一場の講演會が催された。船長の紹介で、佐野伯の「國民一致各自協力の必要」を說かれ、ついで

橋口氏が「飛行機及飛行船の委しい說明」があり、澤山の圖面をさへ示された。

「もう飛行機を恐しがつたり危む時代は過ぎました。何しろ委しい調査の結果、汽車の事故より飛行機の方がよつほど事故が少いといふ事になりました。今吾々が最も知らんとする事は、既に獨逸に於ては實行せられた飛行機を砲身内に充塡し、一氣に目的地に向けて發射するといふ——この方法を各國とも極秘にしてゐる——それを知らんとして吾々も熱心に努力して居ります。若し誰方でもこの機密を知る機會がおありになつたら、どうか是非よく見て置いて報知して戴き度い。獨逸などでは各國協定の條約を無視して、その規約より幾倍かの飛行船をさへ、既に〳〵完成してゐます——」

かういふ話を聞いてゐる時、私はその生類生存の必要上弱肉强食の實例を眼のあたり見る樣な感じがして、生類のあさましさをさへ思はずにゐられない。あゝ、空界の勇者——その涙ぐましい勇氣と犧牲的精神——希くはかゝる人々が地上にある時、何故平安の地にその家族生活を營ましめ、その蜉蝣に似たる生涯を快樂の中に過さしめ得ないだらうか。さらば、靈的生活、そこにも亦生存す可き强者として、精神上如何なる矛盾を感受し終らんとするか——さりとては又現實に卽する生活——それは今の私にとつて決して滿足す可きものではない。私は只、靈的生活——それのみ今考へ度いのだ。

六月二十日　晴　暑熱甚し

今日は國男もいよ〳〵快く夕飯には食卓に出るといふ。然し貧血するのが癖の樣になつたと見え、又顏色が蒼白になつたので、私は急いで前にある赤酒を分けて飲ませた——

M令孃も今日は峠だとの事、何でも體溫四十度に近いらしい。ドクターの話では、更に心配がないので、却つて下熱藥を止めて見たとの事、附添ひの女中二人も傳染して高熱を發したので、一人には烈しい注射をして、やつと少しは下熱したとの事だつた。

夜に入り——午後六時半頃いよ〳〵「アラビヤ」の一角「アデン」に着いた。久しぶりで地面を見た嬉しさ、それは恐らく海上生活に經驗を持つ者でなくては味はひ得ない事だらう。然し期待した程でなく、この島には一木一草もなく、一年間も雨がなく全く旱天に喘ぐ國土だつた。青色を見ない、それは可成り私を失望させ、丁度國男も病後なので上陸を見合せた。然し甲板で見てゐると、それ〴〵ハシケに乘つて來る土人達は丸でかの繪にある通り頭部を赤いきれで卷き、その足の裏の色は靴の色よりもつと黑いと皆は笑つた。國男もまだ病後なので見物などは思ひ切つて、吾々は只甲板から見物してゐた。すると船員の一人が

「何でもあつちで釣をしてゐるさうで、中には海蛇や」

この一語で私はぞつとしてもう見る氣もなくなつてしまつた。

夜釣りする漁火の影——折柄滿潮の海面に映寫する——それは如何にも故國のそれを彷彿させるものであつてもこの蛇の夜釣りは全く私に見物させる勇氣を失はせた。

折しもさし昇る月の影がさわやかに天空にかゝつた。往年あるじが一人渡英の時も、印度洋上に名月を見て、一首の歌を書き贈られた事があつた、今や吾等はからずもまたこゝにこの月を見る、感無量ならざるを得ない。

きつと船へでも乘つたなら、日記の上に材料を得る事が多からうと樂んでゐた航海も、この暑熱——アフリカ沙漠から黃塵萬丈の中を吹く熱風に會つては、流石堅い覺悟を持つた私も可成り努力しなければ書き得ない。自然極

く雜ばくな事ほか書けないのを遺憾とせざるを得ない。然し仕方がない。まあこゝ迄船にも醉はず、どうやら來た事に幾分の滿足を感じなければなるまい——

六月二十一日　晴　九十三度

今日は朝から酷熱の爲、食慾が皆無になつた。こゝで弱つてはと勇氣を奮つて少量の水分を攝つた。肉類はとてものどを通らず、僅かにアイスクリームと紅茶などで凌ぐ有樣になつた。

午前の中にもう私の脊中はすつかり汗で濡れて終ふ。重い樣に濡れたうすものを乾かすにも、毎日船長が巡視する爲さう廣げては置かれない。さりとてその儘つくねても置かれず、ドライクリーニングの設備のないこの船中では、全く白い夏服でも着る方が一番便利でよかつたのだ——冬ならば日本服もよからうが——なる程船の旅行はブルヂョアー式でなければ通るまい。もう少しサイベリアが完備したら、それに越す事はあるまいが、——私はしみ〴〵自分の研究心が足らずこの船旅行を思ひ立つた事を考へる。然し私の健康狀態は根本的に可成り恢復されつゝある事も亦否定されない。糖尿の方は大變いゝらしく、また神經衰弱も大分恢復したらしい。只然しそこには人類本來の天質の如何にしても變じがたく其劣れるを知りつゝ尙向上せしめ得ない自己の乏しさをも痛感する。

今日運動會に私の謠を望まれた。どうしてそんな事が知れたのかと聞いてみると、S醫博のお申出だといふ。なる程、同氏の室は私の隣室なのだ。それで何時の間にか聞かれたものとみえる。惡事千里を走る習ひ、全く油斷の出來ないものだ——私は堅く辭した。何しろ本もろくになし、氣おくれのする樣な事はし度くないので——

今朝はどうかして少し咳が出る。すえ子が私の爲、夜半にうちわであほいでくれてゐたのを、少しも知らないで

寢入つてゐた爲らしい。この經驗によると、どうして重病人などにはうちわの風をおくるのは考へものだ。こゝでまた私は、はしなく思ひ起す。生母の危篤の時、暑熱の甚だしい爲、看護婦が絶えずうちわの風をおくつてゐた事だ。その爲か否かは知らないが、母が到頭かぜを引き、氣管支炎をさへ併發してしまつたのだ——勿論本病は腸カタルではあつたが——

今夜の食卓には珍しく海苔卷やソボロのおすしが出た、數日來食慾のなかつた私も救はれた樣な氣がして箸を取つた。——

彼の向ふ隣の西洋人の子供二人——折々無邪氣に私の室に入つたりしたので、彼等にチョコレートを與へた事は既にかいた。それが却つて迷惑にでも感じたとみえ、それ以來一寸も子供等の顏をみる事が出來なくなつた。ところが偶然私が今日の午後、舷門に風を入れてゐると、思ひがけなくも高い〳〵窓からこの子供等が顏を出してゐた私がふと見ると顏を引込め、見ないとまた出しなどする。こゝでもまた彼の、「ゆきずりの人の情にも感ずる事が多い」といふ言葉を思ひ出さずにゐられない。もう少し遠慮なしに、かういふ子供に交際する法はないものだらうか子供好きの私には實に寂寥さを感ずる。

今夜は國男達の室の方が涼しい風が入るやうだ。それならあつちへ行つて寢ようと、すつかり仕度をして行つて見たが色々と面倒ちしいので、また舞ひ戻つたこの室の暑熱は、實に私には未曾有の苦しさだつた。

かの恐ろしい癰を病んで以來、毎夏涼を那山にとつて都會の暑熱に遠ざかつてゐた。今この猛烈な沙漠を挾んで吹く熱風に、私は頭がぐら〳〵し、食物ものどを通らない——

夜に入つて床の中はまるで濡れ鼠の樣に私を汗にしてしまつた。丁度それは午前二時頃だつたらうか、たまり兼

ねた私は床を飛び出して、室の前の甲板に出た。折しも十四五夜位の月が高く中空に懸つて、流石の黃塵萬丈もこの月宮殿迄は侵し得ないだらう。何といふか、烏位の海鳥が盛んに群れ飛んでゐる。船から折々投げる食物について來るものらしい。キキと啼く聲は赤子のそれの樣で哀調を帶びてゐる。

島又島、皆アフリカの所屬ださうだ。

一望涯なき此太洋に面する幾日、例へそれが沙漠であらうが何であらうが、私はこの一群の鳥と、散在する島嶼の多くに懷しさと親しさを感ずる。

昨夜であつたか、偶然この船の一員である青年に會ひ、それが故國の我家に近き千駄木町に住んでゐる人である事を知つた。

「歸る船を見ると私は懷しく羨ましい」

悄然としてゐる彼を見て私はいつた。

「あなたは一體何年位この海上生活をなさるのですか?」

「エヽ、三年位は嫌でもゐなくちやあなりません。二三日前の大浪の時など、吾々下等な人間の室にはすつかり浪がは入り夜中に體中びしよ濡れでした」

「一體人間に下等上等といふ事がありませうか?」

一寸興奮した樣に私はいつた。その中彼の時間が來たらしく下の方へ降りて行つた。彼も亦苦む可き人らしい。文字通り單なるこの一面識の青年に對しても尙私はある同情と同感を禁じ得なかつた。

六月二十五日　晴

今日はカイロ見物にと拂曉から出かける人達の騷音、ドラの音――四時過から私達は目がさめた。

昨夜から、かなり涼風だつた室内には、めづらしくベッドの上で眠られ夜中には、また涼しいので更にかけものをはふるほどであつた。ところが目がさめると、やはり私の背中はかなりびしよぬれだつた。「仕方がない――」かう覺悟した私は、更に床の上に下りて寢た。然しうと〳〵と、あるじと話しながら又いつか寢入つたと見え、七時半に果物とお茶を持つて來る給仕の聲に驚かされた。急にあるじの聲が戸の外からきこえた。

「この景色はまあどうだ！　まるで何とも云へない景色だ――これを見ないぢや仕方がない、さあ早く〳〵」――と促がされて窓を開けた。名高いこのスエズ運河の絶景は、全く驚異にみちて私の目の前に展開された。丁度私の見た時、すぐ私の船窓の前に一隻の船が碇泊してゐた。それは決して外國船とは思へないほど小型の船で――

それが實に〳〵穩かな湖面の如きこのキヤナルの岸邊近く折柄まだ早曉の薄靄の中に靜かによこたはる光景は實に〳〵何とも云へない色彩を神秘的のものにして私の目に映じた。然し兩岸に人家多くかなりそれに接してゐるため、かねて覺悟の無風の苦熱は、我々の上に比類ない暴威をたくましくした。それはまるでいきれるやうな室内に然も窓を開けると尙、外氣の高熱が浸入するといふので國男が閉めきつてしまつた――其室内にしかも各國人――黑人や何かが、かなり多く出入するのでうつかり開けはなして置くことさへ出來ない――殆ど生れて初めての此酷熱は、何にくらぶべきものもない、（かう書いてゐる私の手は汗で滑る――）

午前十時頃國男が大きな寒暖計を持つて入つて來た。「やつぱり閉めきつておくとひどいものだ、外から來るとひやりとする、ちよいとこれを置いてみようか」かう云つて暫く置くと、驚く勿れその針は、十度も下つて九十二度になつた。そして追々其苦熱に耐へるに從ひ、かねて聞いた通り極度に乾燥した熱氣は、さのみ苦痛でなくなつた。

「お晝には何を食べよう――」かう考へてゐると意外にも食卓には大きな〳〵メロンが出た。「あゝ、メロン！」私は此聲を聞くたびに胸をえぐられるやうな氣がする――。

涙と共に飲み込んだ此メロンは日本の西瓜位の大きさで水氣が多く、その代り甘味も少なかつた。然しめづらしい此果物は涙にせまる胸にも快く通つて、食欲も増すやうに思はれた。

あゝ、人類よ！　それは全く動物の一種に外ならないのだ。彼を憶ふ涙の中に彼が最後に栽培した此メロン！我ながらよくも咽喉を通つたものだ。あゝ、これが人類の本能であつて誰も持つ矛盾なのか？　それならばまだいゝ――。若し此乏しい母のみがかうであるならばあゝ、私は――！　自己を侮蔑しないでは居られないのだ――

今日は何しろカイロ行で食堂はがらんとして空席が多かつた。

扨此キヤナルは人力の如何に自然をも凌がんとするか――其最大力を表現し得たとも云へよう――今迄の英國行には喜望峰を廻らなければ行けなかつた――其旅程約――哩を其爲短縮し得たこゝにも亦人工の偉なるを思はざるを得ない。

然し何しろ狹い河幅なので大きい船舶が行きちがふ時、お互に相警戒して衝突の難の無いため待合せるのだそうだ。此日もまた往來の船の數、非常に多く、豫定の時刻にはとても出帆出來なかつた。

かくて徐々として進む、兩岸の風光は、若し以前の視力が私に與へられてゐたら、どんなに愉快でもあり興味も

多かつたらう――然し、もう現在の私にはそれを希望すべくあまりに視力は弱つてゐた。せめて輪廓でも見られるうち――身體がどうやら動けるうち――かう覺悟して出た私の心の中は、見るもの毎に彼を憶ひつゝ、また更に己の健康の衰へを悲しまずにゐられなかつた。行くところまで行かう――彼女を案じ彼を追憶すべくあまりに私の人生は悲慘だつた。

「必死を覺悟して出掛けた私だ、今更何を驚くんだ――」かう思ひかへして私は更に午後から急に冷氣を覺えた。――爽快さを味ふと入浴後甲板に出た。此處は私の部屋の前で人通りも極少く其代りかなり狹い甲板は、やつと椅子を壁に押付けてかけられるぐらゐだつた――。

ふと私はオペラグラスを取つて周圍を見廻した。其處にはかねてよく畫になどかゝれてゐるかの砂丘――ほんとうに一木一草もない赫い赫い砂丘――其下に一つの動く影がある。よく見るとそれは此處の土人なのだ。今まで――陽が傾くまでねてゐたのがやつと起きたらしく欠伸をし、ながゝとのびをし、懷から麥稈帽らしい――きつちりと頭にあつてゐるのを幾重にも赤い布で包んだ――頭部の上にかぶつた彼もまた此大いなる船の影を見逃さなかつた。しきりに艦上を見上げながら何か棒の樣なものを持つて、妙丘の彼方に去つた。恐らく此起伏のはげしい砂丘の影にはあまり人家もなく對岸の――かなり賑はつてしかも相當立派な建物の多くある方へ行つたのだらう？

對岸を見るべく立たうとした前面には、かの本郷の家の近く――Iさんの友人だといふ――此船に勤務の青年海員が立つて居た。

「何かお宅へおことづけでもあるなら伺つてお傳へしませう、僕は多分九月頃歸るでせう、そして徵兵が一寸あぶないんですが――」

私の例の一人ぎめの同情――何時までも家郷を思ひつゝ歸られない――は我ながらおかしかつた。そして此頃の青年が持つ通有性の――同情されたいための感傷的の話に同情した自分がおかしかつた。きいてゐるうち益々此青年が人すれのした人間らしいのに氣が付いて、私の女らしい同情を苦笑せざるを得なかつた。

今日はめづらしく夕飯のための身仕度が早く濟んだので――それと涼風しきりに肌に泌むやうに快くて私は尙、甲板を去りかねて居た。すると明日立つといふ某氏が來て

「奥さん、陽の入りが非常にいゝんですよ」

偶然來合せたのかそう知らせて君れた。急いで出た甲板には、もう日沒の影が淡く紅を印して夕闇は此めづらしい萬有を包まんとしてゐる。

やがて夕餐を報ずるかのなりもの――修道院の鐘の音のやうだと喜んだ――の音がした。

夕飯後は又此行未曾有の月明の夜となつた。其上に涼風俄かに袂をはらつて甲板は寒いくらゐになつた。

かの古人が「二千里の外古人の心」と詠じたそれよりも尙幾千哩遠く〳〵我々は航海しつゞけて來たことか――

萬里の波濤に碎けつ滿ちつする銀波金波、此運河の船上に立つて感慨無量にして云ふところを知らない――

其うち事務長の口から船舶の往來の多いことや、色々の事情で出帆は更に延期され、あるひは明朝ぐらゐになるかも知れないとのこと――かのカイロ見物の連中の歸路如何に？

私達もM夫人達と御一緒に甲板上に立つて、九時頃歸る汽車の人達に何とか知らせる工夫はないかと焦慮した。

後できいてみると、かの一行の目にも香取丸とは分つたがさてどうしようもない――沙漠の中に疲れ果てた身を横たへてもう欲も德もなく、男は横臥したが婦人は實にお氣の毒だつたらしい――。

然し文明の威力は此沙漠――十年も雨を降らさない此沙漠の中にも氷をつくり――行人のため道々に備へられてゐる水道の水を更に冷却して――沙漠の氷！　私には異様なひびきを感じた。かくて夜の更くるに從ひ、秋氣愈々ひやゝかにうす羽織さへ重ねるやうになつた。

さてもかの沙漠のうちに、たとへ假初の宿ながら歸る船を失つた一行の心の中や如何に、かう考へつゝ私はめづらしく十二時過ぎるまでベッドに入り得なかつた。かくして此夜は實に喧騒の一夜だつた。

其上、昧爽には、ボートセッドに入港の豫定なので、澤山の石炭を積荷するため、窓は皆閉ぢ、總ての舷門は締められた。それでさへ私の部屋の前の甲板には、粉石炭の入ること非常に多く、夜半にあるじが紙で目張りして漸く其侵入をふせいだくらゐだ。然しそれですら朝、目のさめた時私の咽喉はから〳〵に乾いて、すえ子はしきりに咳をした。

かの沙漠行の一行も深夜二時頃歸る音を、ほのかにきいたが、疲れ果てた私はそれもまた夢の中だつた。

早朝百合子からの便があつたと云つて、F氏が態々ドアーをノックして知らせて呉れられた。それは「今やつと友人から手紙が來て百合子さんはもう病氣のあともなく盛んに社會事業を視察して居られる――」かういふことで私達はほつとした。

ついで百合子から電報が來て

「ソネアテテガミミタマルセイユニテアフユリコ」

といふのだ。發信局は巴里、二十五日十六時三十分といふのだ。それは丁度午後四時三十分にあたるとのことだ。

もう私の目には、足をばた〳〵させて喜ぶ樣な彼女の姿態が目に浮ぶ――。

六月二十七日　晴　七十八度

今日は午前十時から、B甲板で消防の練習があつた。もう二度目だから袋を背負はなくても、いゝだらうと思つたが、あるじが「船長の命令は船の中では絶對服從すべきだ」といふ言葉をもつともだと思つて、其時間に例の袋を背負つて甲板にのぼる。前回と違つて、非常に少數の人達が集まつて居、なかには外人でも、私の風を見て急に袋を背負ふのさへあつた。

M夫人もさすがに甲斐々々しく甲板に出られた。

「急の時はこれでは幾らの人達も收容されまい」など口々にさゝやくほど一つの艇を下すにひまがかゝつた。

今日は號砲二發が最初に響き、終りには汽笛がなつた。

それから十一時には、船客一同、B甲板の前面にて撮影され、其後でS公爵夫人、M夫人が船長と一緒に撮影され、ドクターは又すえ子や我々を撮影した。

此日はなか〳〵のひどい風で、ロクに髪を結ぶ間もなかつた私の頭は、まるで吹きさらされて、さてどんなに撮つたことか――以前ならさぞかし氣にしたことだらうと我ながらおかしい。

午後二時すぎ百合子宛、「デンミタモンデーマルセイユツクホテルノアユイカガ」との電報を出した。

夕食後からこの船の中のファンシイ・ドレッスが行はれ、すえ子はドクターの服を借りて其扮裝をした。唉枝は青年に扮したが、すえ子のは、實によく男性らしい容姿になつた。

T夫人のトルコ婦人の假裝や、船長の大工の假裝もなかなか眞にせまつてゐた。すえ子の顏は、コルクの燒いたので色どられ、其天質の銳い面貌は、殊によく男性を表示して、眞にせまつてゐた。

何しろ海また海の洋上に、倦き〳〵してゐた人々はこの催しにかなり熱狂して、あちらこちらで借りたり貸したり狂奔した。殊にTさんの令孃などは水兵の服を一旦着てみたが、更に其上に、或る畫家が買つて來たといふエヂプト婦人の大きなショールを頭から被つて、目ばかり出した――のに扮裝などしてゐた。然し、なにしろすえ子の樣に徹底的に變つたのはなかつたので、外人の子供等は大騷ぎで大喝采を博し、彼女としてはかういふことに出るのさへめづらしいのに――。とう〳〵一等賞をさへ勝ち得て革の手提鞄を得た。

其他シャフル、ボール、二人三脚などそれ〳〵優勝してこの方でも亦、手提鞄や、かはゆい此地の名產――七寶の茶匙などを貰つた。ドクター――ほんものゝドクターも大喜び、しきりにニコ〳〵してゐたが、このことは、恐らくすえ子として、特筆大書すべき心境の進展を示したものだらう。

この賞與に就ても外人の主張の大いに勢力あること他所目にもしるく、故西村父上のかつて慨嘆された對外軟のはがゆさ、私をして憤慨に堪えざらしめるものが多い――。

六月二十八日　晴

今朝あたりから、全く秋風立つて、冷氣肌に快い。朝のうちは、黑い絽縮緬の羽織を着ないではゐられないほどだ。なにしろ此羽織を着るといふことは、かの厄介な帶を簡單にしめられるといふことになるので、ひどく心が安らかになつた。

朝食後K氏が活動寫眞を撮るから一寸見物人になつて――とのお賴みで五六人の人達と下の甲板に下りる――。M夫人の先頭に行つてみると、それは、かねてかのファンシイ・ドレツスの時、ボーイスカウトに扮裝して、か

のK氏をして讃嘆措く能はず、

「奥さん、何てよく似合ふんでせう、僕踊りたくなつた」

から云つた彼の顏をながめながら、この無邪氣に似た言葉をあつさり聽いて居たまではよかつた。

更に今、多數の人達に賴んで、彼女のため其活動寫眞の陪覽者とした――まだそれもいゝとして、私は遂に彼が

「君達よく見たまへ、この奥さんの方がいくら姿勢がいゝか、みんなもかういふ風にシヤンとしてゐるものだ」周圍にはボーイスカウトの一團があつた。私は憤然とした。この青年達の中には、私財を投じてまでこの英國行に隨行し、彼等青年の發溂たる希望を以て、炎天下にも尙かの獅子舞を練習するもの、今この纖弱な一女性を前に各訓示する彼に對して、如何なる感があるだらう――私はかゝる一時的の感情によつて、將來有爲の青年を敎導せんとするの如何に不合理なるかを考へずに居られない。私は歸り際にかう云つた。

「私は今迄何でも女性として男性をお手本に――とのみ云はれて居つたのに、いまお蔭樣で女性のため氣を吐くことが出來るのを光榮に存じます」

この言葉は、果して如何なる氣持をK氏に與へたか、然し私は、この際かう云はずに居られなかつたのだ。

「大なれ、日本男子よ！」

私はまたこゝにも一つの失望を感ぜずに居られない、あゝ――

矢張り最初私が彼の心相に對して感じた陰影は、今斯の如く事實となつて表はれたのだ。

尙、彼は減る時「唉枝さんはゆうべ日本服を着られたが、あれでは身體が泣きますよ、今朝はまあそれでいゝが――」